

横岳遺跡

-横嶽崇福寺跡の調査-

(遺構編)



1ST200五輪塔埋納遺構

1999

太宰府市教育委員会

横岳遺跡

-横嶽崇福寺跡の調査-

(遺構編)

1999

太宰府市教育委員会



横岳遺跡周辺の環境
(横岳遺跡は右中央)



1ST200検出状況
(五輪塔は一部復原)

序

本書は、平成10年度に実施いたしました横岳遺跡の発掘調査報告書であります。横岳遺跡は、横嶽崇福寺跡に所在する遺跡で、元和四（1618）年に描かれた図の写しとされる『太宰府横嶽山伽藍図』に記載された地域にあたります。横嶽崇福寺は、天正十四（1586）年の薩摩島津氏による岩屋攻めによる兵火によって、その多くを焼失しましたが、現在福岡市東区千代に黒田藩の菩提寺として再建され、地域の人々によって線香の火が絶えないほどの賑わいを見せております。太宰府市にあった横嶽崇福寺は、残念ながら創始された当初の姿を望むことはできませんが、寺を創始し建立した湛慧禅師の墓である朝日地蔵は、現在でも地域信仰の拠点として多くの人々によって祭られ、線香の火が絶えないほどであります。

今回報告いたしております調査地からは、横嶽崇福寺が隆盛をきわめた頃から、天正十四年に兵火によって焼失するまでの遺構が検出され、寺の歴史を解明する上で貴重な成果を納めることができました。特に五輪塔埋納遺構ならびに掘立柱建物群は、中世前期後半から中世後期にかけての葬送儀礼ならびに建築史にとって重要な位置を占めるものと思われます。本書が学術研究はもとより、文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用されることを心から願います。

最後になりましたが、文化財に対して御理解賜りました地権者ならびに九州八重洲工業の関係者の皆様をはじめ、関係された諸機関の皆様方に心からお礼申し上げます。

太宰府市教育委員会
教育長 長野治己

例言

- 1.本書は、太宰府市教育委員会が平成10年度に実施した横岳遺跡第1次調査の発掘調査の報告書である。なお本書は、遺構に関する所見のみを記載し、出土した遺物ならびに写真図版に関しては記載していない。したがって、遺構編、遺物編、写真図版編の計3部をもって調査報告書となる。
- 2.本書に掲載した発掘調査の原因、調査期間等の調査に関わる経緯については、調査の報告部分に記載している。
- 3.調査組織は第II章にまとめておいた。
- 4.個別遺構の実測ならびに以下の委託事業以外の遺構は中島恒次郎および中西武尚が行ない、図の浄書は、中西武尚、森田レイ子、阿部浩子、酒井美保子が行なった。また周辺地形ならびに調査I面の遺構実測作業は、(株)文化財サポートシステムが行ない、調査III面の遺構実測を(株)アジア航測が行なった。なお委託事業として実施した調査I面および調査III面については、各受託業者が浄書までの作業を行なっている。
- 5.遺物については、洗浄作業を行ない、選別作業を中島恒次郎・森田レイ子・中西武尚が行ない、注記後収納している。今後は遺物編作成のため、実測作業および浄書作業が必要となる。
- 6.遺構の写真撮影は中島恒次郎および中西武尚が行ない、空中写真は(有)空中写真企画が行なった。
- 7.遺構実測図および遺構配置図は全て国土調査法第II座標系を基準としている。したがって図中に記載される方位は特に注記のないかぎり座標北(G.N)を指している。磁北と座標北との偏差は西偏 $6^{\circ}30'$ (1992年)である。
- 8.出土した金属製品の応急処置は、下川可容子が担当した。
- 9.出土した人骨については、田中良之先生(九州大学教授)および金幸賢先生(九州大学助手)によって採集され、現在(平成11年現在)九州大学大学院比較社会文化研究科にて保管されている。人骨に関しての報告は、遺物編に報告する。
- 10.本書に掲載される遺構番号は、以下の要領で理解される。なお遺構の性格を表記する記号については、『佐野地区遺跡群 I』に記載している。



- 11.本書の執筆は、調査を担当した中島恒次郎および調査補助を行なった中西武尚(調査補助員)が行ない、執筆者を目次及び項目末尾に記している。なお編集は中島恒次郎が行った。
- 12.出土遺物および図面、写真等の記録は太宰府市教育委員会が保管している。

目次

I.はじめに

- 1.調査に至る経過 (中島恒次郎) 1
- 2.調査地の環境 2
- 3.報告にあたって 7

II.調査組織 9

III.調査報告

- 1.層位 (中西武尚) 10
- 2.遺構 11
- 3.小結 (中西武尚・中島恒次郎) 69

IV.成果

- 1.調査成果 (中島恒次郎) 77
- 2.残された課題 77

付表. 遺構番号一覧

I. はじめに

1. 調査に至る経過

報告する調査地は、太宰府市白川1900他に所在し、開発対象面積は約5,200㎡を測り、調査面積は4,000㎡を測る。ここは、東西および北側を大野城跡ならびに岩屋城跡が所在する四王寺山から派生する丘陵によって三方を囲まれ、南のみが開放された地形環境下に位置している。周辺の文化財には、横嶽崇福寺跡が所在していたとされ、昭和35年に史跡横岳崇福寺として県指定を受け、さらに昭和42年および46年に佛殿跡・僧堂跡・瑞雲庵跡（いずれも推定）の各所が発掘調査がなされる等、崇福寺が所在していた痕跡が次第に明らかになりつつあった。その後、当所における顕著な開発もなく、自然環境が残る閑静な住宅街として環境保全がなされてきた。しかし、平成に入り福岡市のベッドタウン化の波は太宰府市各地で顕著となり、開発件数の急増とともに埋蔵文化財破壊に先立つ発掘調査件数も急増の一途を辿ることになる。

そのような動向の中、平成2年2月から8月にかけて調査地にあたる当該地の開発に先立つ埋蔵文化財取り扱いに関わる問い合わせがなされることになる。当該地は、先の昭和46年に福岡県教育委員会によって実施された（推定）瑞雲庵跡調査地の南側に位置しており、横嶽崇福寺跡に関わる遺構が埋蔵されている可能性は十分考慮できた。したがって、各文化財に対する問い合わせに対しては、開発面積および宅地造成という開発目的もさることながら、遺跡の重要性も鑑み発掘調査必要との回答を行なってきた。その後一年ほど開発に先立つ埋蔵文化財に関わる問い合わせは為されなくなり、鎮静化した感があったが、平成3年3月に至り、九州八重洲興業より当該地における宅地分譲を目的とした開発計画が上がり、それに伴う埋蔵文化財取り扱いの問い合わせが為される。この時点でも先述した理由により、発掘調査が必要となるであろうとの回答をしている。同年発掘調査費用および期間等の具体的課題へと協議は進み、同年8月に埋蔵文化財の規模を確認する目的で、樹木林立する敷地内を試掘調査を実施した。その時点で開発対象地の内、図69（付図）に示したA地区およびB地区において現況地表面下、平均で約1.00m下に遺構面を確認している。その際、遺構面は少なくとも二面は確認できており、さらに下については花崗岩風化土であるが基盤層である可能性は低いとの調査成果を得ている。したがってさらに下位に遺構面が残存している可能性を認識していたが、調査地の置かれた当時の環境下では、これ以上の確認ができないまま、その後の協議が進むことになる。試掘調査の成果を受けて、同年10月に発掘調査を実施することで合意をみた。しかし、開発申請その他の理由から当初合意をみていた10月調査着手時期が遅延し、平成10年1月から6月にかけて調査実施の合意を再度取り交わすことになる。

調査期間は、平成10年1月21日から開始し、試掘調査が実施できなかった図1-C地区から試掘調査を実施した。その結果、地表面下約1.00mに遺構を確認したため、調査区を広げ発掘調査

『横岳遺跡 -遺構編-』

を実施した。並行してA地区およびB区における表土除去を重機によって実施し、C地区調査終了とともにBおよびA地区の調査へと移行していった。しかし、樹木林立等による制約下における試掘調査実施であったことから、十分な埋蔵文化財規模の把握ができておらず、先述した花崗岩風化土が基盤層である可能性が低いとの見解が本調査の面的な把握によって、報告文に記載した約1.5mの深さの整地層であることが判明した。また当初予定していた調査期間も、遺構密度の高さと造成工事との同時並行によって生じる調整誤差によって遅延する結果となり、梅雨時の豪雨によって地形崩壊が生じ、残念なことに遺構が一部破損するという結果も招いた。幸い人的な被害は回避されたが、発掘調査と開発行為との調整不十分さによる、お互いの損失は大きいものがあった。その後事業主体者である九州八重洲興業ならびに造成主体者である熊谷組の協力により、平成10年9月12日に調査を終了することができた。

なお調査成果として、横嶽崇福寺跡を考える上において大きな成果を残すことができたため、今後の白川周辺における開発に先立つ埋蔵文化財のあり方を考える手立てとして、整理報告までの実施を調査原因者である九州八重洲興業と協議したところ、合意を得たことから調査終了後、ただちに整理作業を実施し、遺構編作成を開始した。

2. 調査地の環境

a. 地理環境（図1）

古代の大野城跡および中世の岩屋城跡が所在する四王寺山から南へ派生する丘陵に挟まれた谷部分にあり、谷を形成した小河川が中央部分に流れ、この小河川によって開刻された東側河岸段丘上に調査区は位置している。横嶽崇福寺跡は、東西北の三方を山および丘陵によって取り囲まれ、南を開放する地形空間にあり、今回発掘調査を実施した東丘陵と、やや南まで伸びる西丘陵を結べば、閉鎖した空間を形造ることも可能である。現状では白川団地が南側に造成され、東丘陵の旧地形は失われており、旧来の景観を肉眼で観察することは困難となっている。また西側についても、観世団地によって旧地形が失われており、現況での観察では一見金光寺跡と無境界のうちに隣接しているかのような景観を呈しているが、旧地形図では両者の間に丘陵が存在しており、この丘陵によって両寺院は遮断されていたことが伺える。いづれにしても宅地形成によって寺立地の景観は失われており、旧地形図による情報に頼るしか術がなくなっている。

b. 歴史環境（図1・2）

横嶽崇福寺は、先学諸氏が述べるように、仁治元（1240）年に湛慧禅師によって建立されたとされる。湛慧禅師は寺建立の翌年、聖一国師を招き開堂の式を挙げたが、わずか一年の在寺の後、都へ昇ったため、大應国師を文永九（1272）年に招請し住持とした。この間、寛元元



図1.歴史および地理的環境

(1243)年に官寺となっている。この大應国師によって崇福寺は隆盛を極め、現在開山として知られ、今回調査を行なった調査区の北に開山塔として大應国師の分骨墓（須弥壇座無縫塔）が残存している。その後天正14（1586）年薩摩島津氏の岩屋攻めによる兵火によって、伽藍を構成していた各施設の大半を焼失するに至っている。兵火を免れたのは勝禅院と庭園だけであったとされる。現在、横嶽崇福寺は、江戸期に至って福岡市博多区千代に黒田藩の菩提寺として再建されており、元来存在していた太宰府市には、別院が建設されてはいるが、今回の調査原因となった宅地造成に見るように、宅地化が進み往時の景観を思い浮かべることは不可能となりつつある。

先述したように横嶽崇福寺跡の背後（以下特記しない場合は、背後を北、表を南とする）には、大野城跡および岩屋城跡が存在しており、寺西側には観世音寺の子院として発掘調査がなされ、史跡整備がなされている金光寺跡が隣接している。また東丘陵を挟んで東側には、足利尊氏が居留したとされる原山無量寺跡がある。周辺には、この他に金光寺跡同様に観世音寺の子院跡が推定地ながら数多く存在し、四王寺山南に伸びる丘陵には数多くの寺が営まれていた。

観世音寺子院

観世音寺の子院は、『筑前国続風土記』に記載されており49の側寺別院が存在していたとされている。この49の別院（以下「子院」と記載）の真偽および所在地に関して、高倉洋彰氏の論考に詳細な検討がなされ、所在地について現存する字名から推定がなされている（高倉、1977・1983・1984）。

これら49子院のうち発掘調査が実施され、整備復原がなされている金光寺跡について述べる。

金光寺跡

横嶽崇福寺跡の西側丘陵を挟んでにし側に存在していたとされ、現存する字名「今光寺」の地に推定されていた。昭和28年に鏡山猛氏によって発掘調査が実施され礎石建物跡の一部が検出されていた。その後九州歴史資料館による4次にわたる発掘調査が実施され、Ⅲ期に渡る遺構面が確認され全体像が明らかになってきている。

I期（13世紀後半から13世紀終末頃）

金光寺跡形成期にあたる遺構で、推定ながら南面する礎石建ちの建物と土壌を検出している。

Ⅱ期（14世紀中頃）

金光寺の整備拡充時期として位置づけられるほど遺構の広がりが確認され、建物6棟をはじめ墓地、火葬施設、石組雨落ち溝などが確認されている。

Ⅲ期（14世紀終末から15世紀初頭）

金光寺が規模縮小をしていく時期にあたり、終末は16世紀前半頃が推定されている。建物2棟、井戸および池が確認されている。

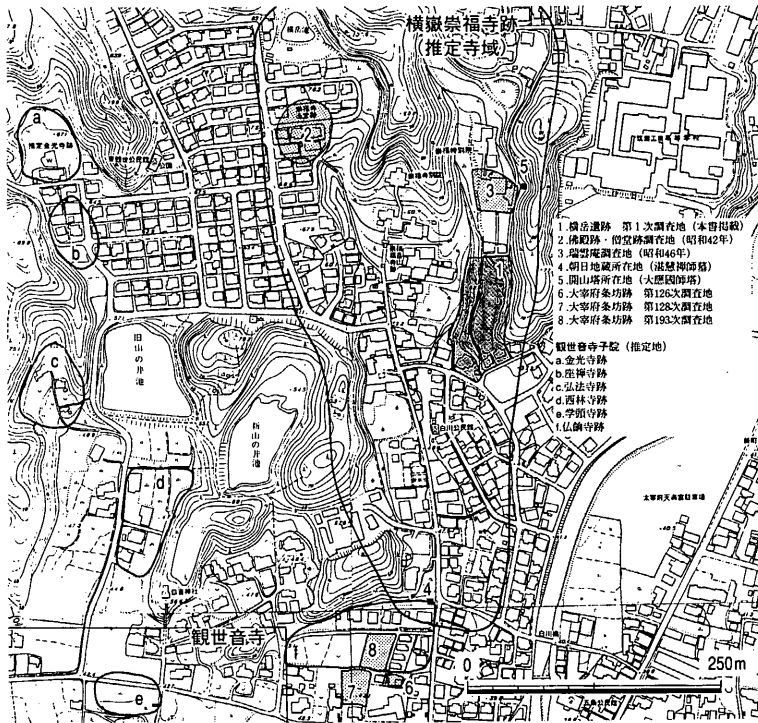


図2.横嶽崇福寺跡周辺の環境

これら三期にわたる調査によって、寺が営まれた経過が明らかになり、特に各期に共通して存在するものとして地形環境の欠点を補う排水施設が充実されている。また瓦の出土が顕著であり、礎石建物の屋根には瓦が葺かれていたことがわかる。また寺とする考古事象として仏具の出土もみられるなど、寺とする根拠が明らかになりつつある。横嶽崇福

寺が形成され、存続していた期間と重なり、両者は東西に並存していたものと考えられる。

原山無量寺

横嶽崇福寺の東側丘陵を挟んで東側に所在していたとされ、太宰府市教育委員会によって15次にわたる調査が実施されてきている。江戸期に描かれたとされる『原山無量寺古図』が伝えられており、伽藍配置に関する情報は得ることができる。15次にわたる調査では、礎石建物跡、石組による墓など数多くの遺構が確認され、何らかの関連は想定できるが原山無量寺の所在を確定するまでには至っていない。詳細は城戸康利氏によって記載されている（城戸、1992）。

大宰府条坊跡

横嶽崇福寺跡の南には、大宰府条坊跡が存在しており、数次にわたる発掘調査が継続的に実施されてきている。その中で隣接地域での調査として、第126次、128次、193次があり、奈良期から室町期に至る遺構を検出している。検出された遺構としては、根石を据えた掘立柱建物や井戸、さらに条坊痕跡と考えられる南北の道路遺構などが検出されており、条坊跡北東域の状況が明らかになってきている。しかし、これら調査区の東側には御笠川の河岸段丘面が存在しており、次第に遺構が希薄になってくる。大宰府条坊跡の北限が確認できておらず、今後の調査に関わる課題が存在している地域である。

c.横嶽崇福寺跡の調査歴

横嶽崇福寺跡は、現存する別院および字名から太宰府市白川に所在することは分かっており、昭和35年に福岡県史跡に指定されていた。その地に宅地造成の計画が持ち上がり、昭和42年に発掘調査が実施されている。この調査地は、元和4（1618）年に描かれた図の写しとされる『太宰府横嶽山伽藍図』が『横嶽志』に記載されており、この伽藍図にのこる僧堂跡および仏殿跡の推定地にあたっている。この調査では、僧堂跡および仏殿跡と考えられる礎石建物を2棟確認したのみで、周辺に存在していたと考えられる庫裏、方丈など付属する施設は確認されていない。確認された仏殿跡は、建て替えの痕跡があり、やや規模が縮小していることが判明している。またこの仏殿跡の西側に礎石建物跡が1棟確認されており、遺構の位置関係から僧堂跡と推定されている。この僧堂跡も二時期想定されている。下層を13世紀後半の大應国師開山時期に当て、上層は出土した瓦から室町期と推定されている。同時に伽藍図にある「雲勝庵」、「毘廬庵」、「正洞庵」、「瑞雲庵」等の推定地が調査されているが、顕著な遺構は確認されていないと報告されている（土田他、1992）。

ついで、崇福寺別院建設に先立ち、福岡県教育委員会によって、推定瑞雲庵の調査が昭和46年に実施されている。先の調査で確認できなかった瑞雲庵であるが、この昭和46年の調査では、礎石建物二棟、石組遺構一基を検出し、大應国師塔へ至ると考えられる階段遺構の一部を確認している。検出された礎石建物の内、大應国師塔の西に位置している建物は、東西三間×南北三間の建物で、中央間の中軸線上に塔が位置していることからみて、『太宰府横嶽山諸伽藍図』にみる瑞雲庵に推定されている（土田他、1992）。

その後、観世団地および白川団地内での建て替えに伴って試掘調査ないしは立会調査を実施してきているが、伽藍図に見る諸施設に関わる遺構は確認できていない。しかし試掘および立会調査では、調査規模が狭小であり、遺構の確認はできているが性格付与に至っていないというべきであろう。

文献

- 高倉洋彰（1977）「筑前観世音寺子院小考」『九州歴史資料館研究論集』3
- 高倉洋彰（1983a）「筑紫観世音寺の調査とその成果（二）」『佛教藝術』146
- 高倉洋彰（1983b）「筑紫観世音寺史考」『太宰府古文化論叢』下巻
- 横田賢次郎・森田勉（1987）「推定金光寺跡」『佛教藝術』174
- 土田充義・高橋章・栗原和彦（1992）「三・横嶽崇福寺」『太宰府市史』考古資料編
- 城戸康利（1992）「四・原山無量寺」『太宰府市史』考古資料編

3. 報告にあたって

報告にあたって、便宜的に調査区を3箇所に分割した。図69（付図）を参照していただきたいが、調査区北東側にあり墓のみを検出した区域をB区、調査区の大半を占め主として建物を

『横岳遺跡 -遺構編-』

検出したA区、さらに調査区南東部に位置し、標高で最も低い位置にあり、小穴のみを検出し性格付与が困難であったC区である。さらに生活空間と墓域という性格によって2者に区分できるため、調査報告ではA区およびC区を建物部とし、B区を墓部として報告する。

なお遺構の性格を示す遺構種別記号は、表1に示した。ただし、あくまでも想定される性格であり、遺構の報告内容から判断していただきたい。

(中島恒次郎)

表1.遺構略号

略号	遺構種別
SA	槽
SB	建物（掘立柱建物等）
SC	廊
SD	溝
SE	井戸
SF	道路
SG	池
SI	竪穴住居
SK	土坑
ST	墓
SX	性格不明遺構（小穴・凹み等）

II. 調査組織

調査および整理を実施した平成10年度の調査組織は、以下に示す。

平成10年度（1998年度）調査・整理組織

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	小田勝弥
	文化財課長	津田秀司
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	山本信夫
	主任主事	藤井泰人
	主事	今村江利子
調査	技術主査	狭川真一
	主任技師	城戸康利
		山村信榮
		中島恒次郎（調査担当）
		井上信正（事前協議担当）
	技師	高橋 学
		宮崎亮一
	文化財調査技師（嘱託）	下川可容子
		森田レイ子

なお調査を進めるにあたり、多くの方々に御協力ならびに御援助いただいた。御芳名を以下に記し謝意を表します。

木村栄、平田憲曠（九州八重洲興業）、石井健自・高島邦夫（熊谷組）

また調査に関わる様々な所見に対して、太宰府市文化財専門委員（小田富士雄【福岡大学】委員長）の諸先生方をはじめ、以下に記した方々より数多くの御教示、御助言を賜った、合わせて謝意を表します。

宮小路賀宏・栗原和彦・横田賢次郎（九州歴史資料館）、折尾学（福岡市教育委員会）、河原純之（千葉大学）、増渕徹（橘女子大学）、田中良之・金宰賢（九州大学）、村上久和（大分県教育委員会）、木村明敏（太宰府を語る会）、田上稔（福岡県教育委員会）、藤澤典彦（元興寺文化財研究所）、小西信二（太宰府天満宮）

III. 調査報告

1) 層位

A区

現代の耕作土を除去すると暗灰色土の遺物包含層が認められ、その下位には黄褐色の崩壊土層が広がっている。崩壊土は東側の丘陵斜面に近づく程厚く堆積する傾向にあり、丘陵斜面の崩壊土中からは、五輪塔の破片および蔵骨器等が出土している。この崩壊土の下位から遺構検出面が現れる（遺構I面）。なお検出面

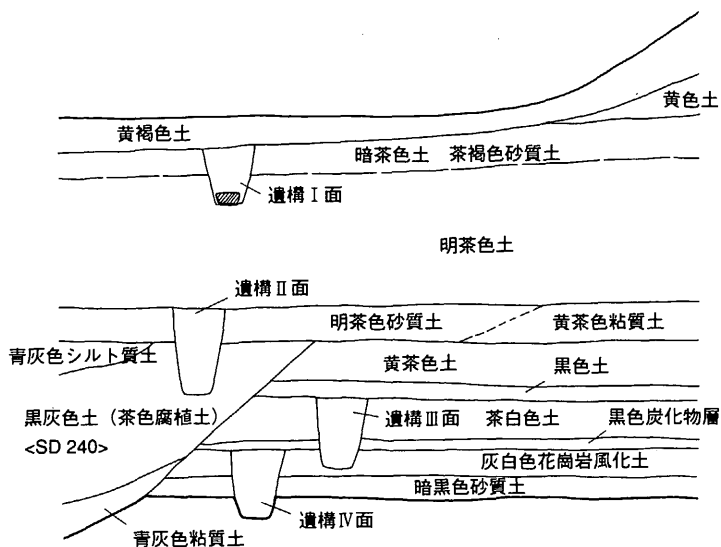


図3.A区土層模式図

には炭化物が散在していた。遺構検出面から下に約1.5m前後の間は、黄橙色土、灰白砂質土、灰色砂などの層が、斜め方向におおよそ一定間隔で帯状に確認でき、人為性が認められることから造成土と考えられる。造成土は、基盤層の上昇に伴って調査区北側では消失している。この造成土を除去すると、白色花崗岩風化土に切り込むかたちで遺構が検出される（遺構II面）。また調査区中程からさらに南側では、この遺構検出面から下に約0.5mのところ再び安定した茶白色花崗岩風化土が認められ、これに切り込むかたちで遺構が検出される（遺構III面）。これらの花崗岩風化土は、比較的安定して面的に広がることから整地に伴うものと考えられる。また、部分的な確認であるが、灰白色花崗岩風化土を除去すると黒色炭化物層が検出され、この炭化物層を除去すると黄茶色地山形成土に切り込む遺構が確認された（遺構IV面）。以上のように、4面から成る生活面を確認し

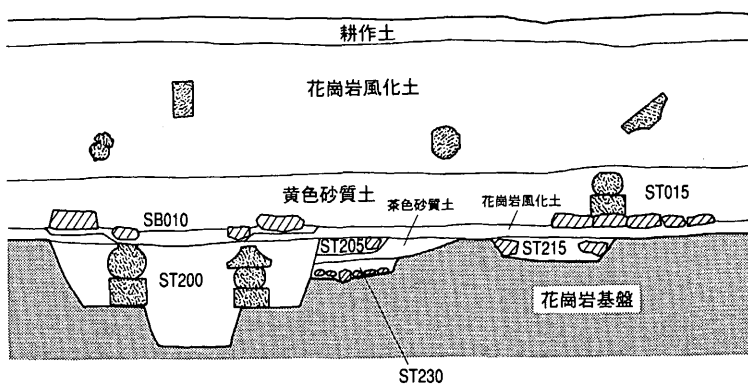


図4.B区土層模式図

た。

B区

耕作面を除去すると五輪塔の破片を包含する花崗岩風化土が約1.5m程堆積している。五輪塔の出土状況に規則性はなく、丘陵の自然崩壊によって堆積していたものと考えられる。

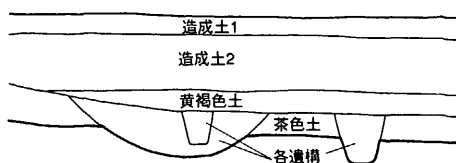


図5.C区土層模式図

この自然崩壊土の下位にST015をはじめとする墓が確認された。

C区

近代以降の二層から成る造成土を除去すると、黄褐色土の層が確認される。この堆積土は、東側斜面からの崩壊土と考えられ、A区同様にこの崩壊土を除去すると下位より遺構検出面が現れる。遺構は茶色土（平安期の遺物包含層）を切り込むかたちで検出されていた。

2) 遺構

A区

検出された遺構は、層位の項で記述したように4面の生活面からなる。以下、その概要について各面ごとに記述する。

[遺構I面]

調査区の西側は、開発対象地域の西を流れる河川によって開析を受けており、さらに現代の造成により削平を受けているため遺構が欠失する傾向にあった。

調査区北半分では遺構は検出されず、検出した遺構のほとんどは、調査区南半分で確認している。遺構の検出されなかった北半分は、粗い花崗岩の小礫を含む茶灰色砂が堆積しており、丘陵からの湧水が顕著であった。

a) 掘立柱建物

1SB060

調査区南側中央で検出した3間×5間で四面に縁側が付くと推定される東西棟建物である。柱間総距離は、桁行で12.05m、梁行で7.8mを測る大型の建物である。桁行の各柱間は、西から1.99m・1.98m・1.96m・2.01m・1.97mを測り、ほぼ等間隔であり、梁行の各柱間も、北から2.00m・1.94m・2.03mとほぼ等間隔であるといえる。縁側と解した部分の柱間の平均値は、北側で1.02m、東側で1.06m、西側で1.08m、南側で0.81mを測り、極端に南側が狭いことが解る。柱掘り方は円形を呈し、直径0.3～0.5mで、深さは約0.4mを測る。柱痕跡はほとんどの掘り方で確認され、埋土に橙褐色粘質土のものと明灰色粘質土のものの2種類がみられた。直径は約0.1mである。また、ほとんどの柱穴の底には、礎板として根石が検出された。根石には0.18m～0.25mの垂円礫～角礫の花崗岩が用いられているが、一部緑泥片岩・砂岩なども使用されている。根

『横岳遺跡 -遺構編-』

石は1個を使用されたものがほとんどであるが、中には複数用いられているものもある。また、柱の重圧により割れたと考えられるものもみられる。これらの根石を取り外すと、掘り方 a・c・s からは炭化物を多く含む茶灰土を挟んでさらに下部から根石が検出された。また、掘り方 c ではさらにその下部から、埋土に灰色砂質土と暗茶灰土の混合された土を持つ直径約0.1m、深さ0.05～0.1mと浅い柱痕跡を確認した。同様な二重の柱痕跡を確認した掘り方に b・d・e・o・p・u・v・w・a v があり、以上のことから最低1回の建て替えが考えられる。主軸の方位は N-17° 11' 37" -E である。

1SB065

調査区西端、1SB060の西側で検出されたもので、南北2間、東西1間以上の東西棟建物と推定される。調査区外に

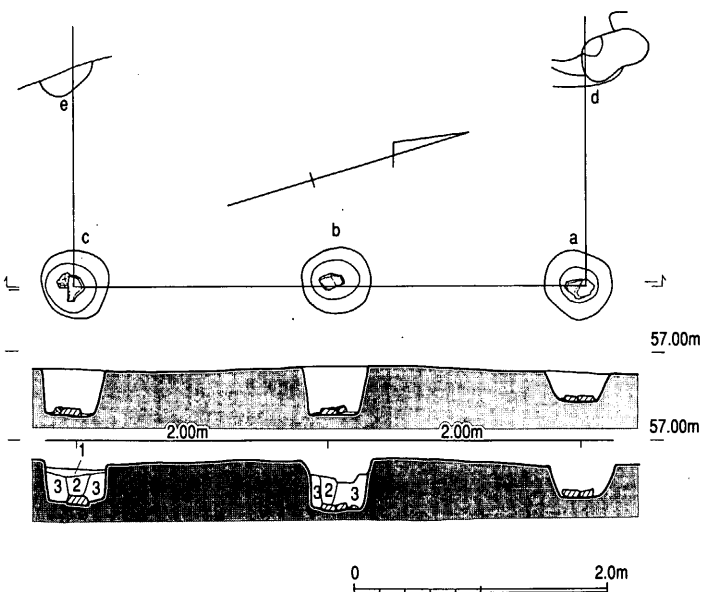


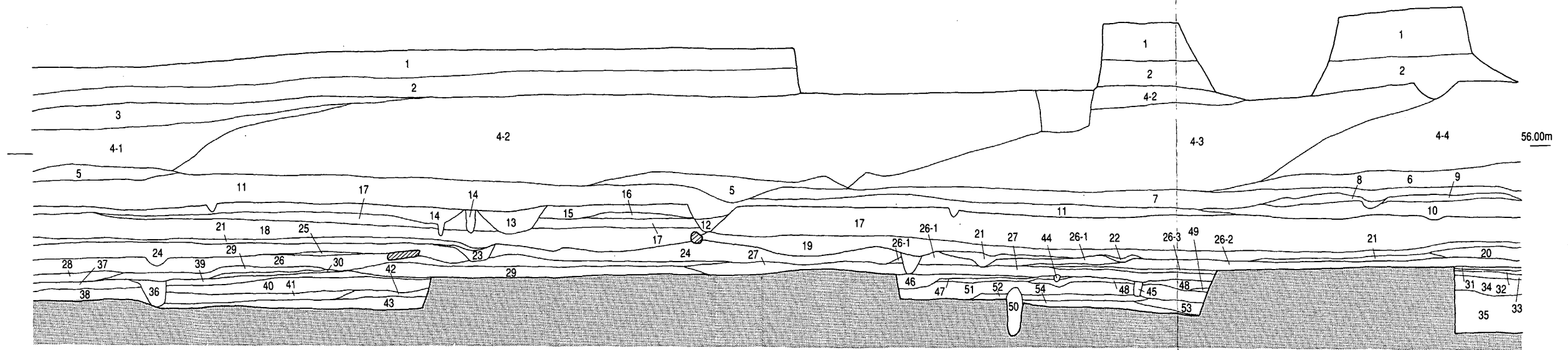
図6.1SB065遺構実測図 (S=1/60)

展開しており、その規模は不明である。各柱間の平均は、南北2.0m、東西1.8mを測る。柱掘り方は円形を呈し、直径は約0.5mで、深さは約0.4mを測る。柱痕跡は掘り方 b・c で確認され、直径は0.11～0.15mである。また、柱穴の底には、礎板として根石が検出された。根石には約0.2mの花崗岩礫が用いられている。根石は一個を使用されたものと複数用いられたものがある。また、柱の重圧により割れたと考えられるものもみられる。掘り方 d・e に関しては、調査時の調査区の崩壊により消失してしまったが、崩壊後の断面観察で根石と考えられる礫を確認している。主軸の方位は N-16° 41' 8" -E である。

1SB075

調査区南、1SA095の南側で検出した1間×4間で北側に大きな庇を持つと推定される東西棟建物である。1SA095の塀状の遺構によってL字状に北側ならび東側を囲まれている。柱間総距離は、桁行で7.9m、梁行で4.3mを測る。桁行の各柱間は、平均で2.0mを測り、ほぼ等間隔である。梁行の柱間は、1.9mを測る。庇部分の各柱間は、東西3.96m、南北2.0mを測る。柱掘り方は円形を呈し、直径約0.5mで、深さは0.3～0.5mを測る。柱痕跡は掘り方 a・b・f で確認され、埋土は橙褐色粘質土のものである。直径は約0.16mである。また検出した柱穴の半数には、底に礎板として根石が検出された。根石には0.18～0.35mの花崗岩が用いられている。主軸の方位はN-

A区調査区西壁 南側



1. 耕作土および灰土
2. 暗灰色土 (遺物包含層)
3. 灰黄色土
- 4-1. 黄橙色土 (白色花崗岩ブロックを多く混入)
- 4-2. 灰白色砂質土と灰色砂の互層
- 4-3. 黄橙色土と灰色砂の互層
- 4-4. 灰色砂と灰白色砂質土の互層
5. 白色角礫混入中粒砂
6. 灰茶色砂質土
7. 赤橙色土 (北にいくにつれて鉄沈着層へ変化)
8. 暗灰色粘質土
9. 灰白色粘質土
10. 青灰色粘質土
11. 暗黒茶色土
12. 明白茶色砂質土
13. 黄褐色ブロック混入茶色土

14. 暗茶色土
15. 白色花崗岩風化土
16. 黄茶色土
17. 白色花崗岩風化土
18. 茶色土 (黄橙色土ブロックを多く混入)
19. 灰茶色砂質土 (黄橙色土ブロックを多く混入)
20. 暗青灰色砂質土
21. 黒色炭混じり土
22. 灰白色花崗岩風化土
23. 黒茶色土
24. 黄橙色土と黒色炭混じり土の互層
25. 黒色炭混じり土
- 26-1. 灰白色花崗岩風化土
- 26-2. 灰茶色土 (灰白色花崗岩風化土ブロックを多く混入)
- 26-3. 灰白色花崗岩風化土と黄色砂質土の互層

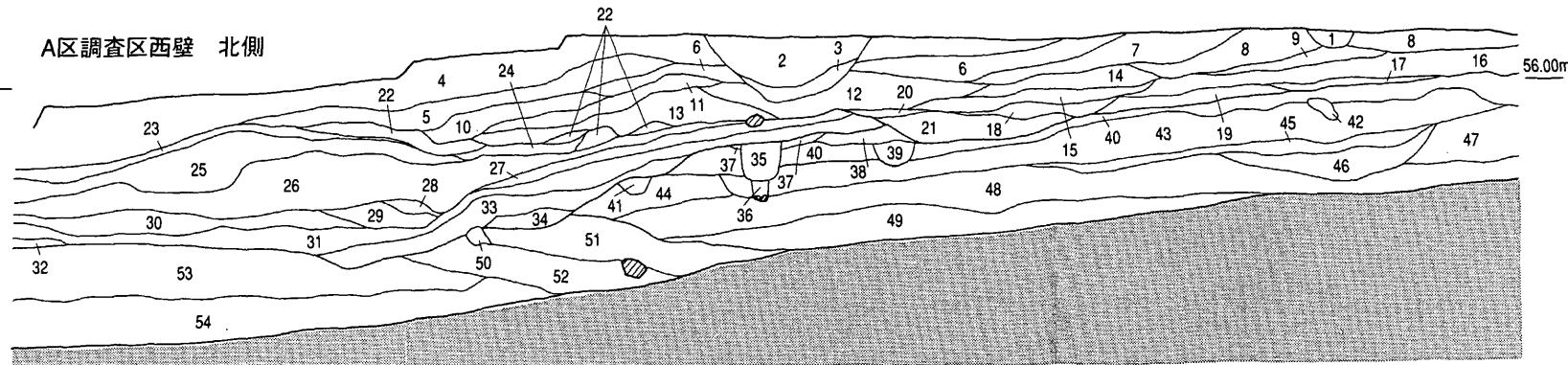
27. 暗灰色砂質土 (花崗岩風化土)
28. 黄茶色土
29. 暗黒茶色砂混じり土
30. 灰白色砂質土 (花崗岩風化土)
31. 緑灰色砂質土
32. 灰色砂質土
33. 緑灰色砂質土
34. 暗青灰色粘質土
35. 青白色粘土
36. 茶白色砂質土と灰茶色粘質土の互層
37. 明黄茶色砂質土と茶色砂質土の互層
38. 暗黄茶色砂質土 (炭化物を少量混入)
39. 暗茶色砂質土 (黄色土ブロックを混入)
40. 淡茶褐色砂質土 (青灰色砂質土ブロックを多く混入)
41. 暗茶褐色砂質土 (褐色砂質土ブロックを混入)

42. 明黄褐色砂質土 (白色花崗岩風化土ブロック混入)
43. 淡茶灰色砂質土
44. 灰色粘質土ブロック
45. 灰色粘質土
46. 黄茶色砂質土
47. 暗茶褐色砂質土 (炭化物を混入)
48. 明茶褐色砂質土 (灰色粘質土ブロック混入)
49. 青灰白色シルト質土 (下部に鉄分の沈着あり)
50. 淡灰茶色砂質土
51. 淡茶白色砂質土
52. 黄茶色砂質土
53. 淡灰茶色シルト質土
54. 茶褐色砂質土

1. 茶白色砂質土
2. 暗茶灰色砂質土 (炭化物を混入)
3. 茶灰色砂質土
4. 暗茶褐色土 (黄褐色粘質土ブロックを多く混入)
5. 暗灰茶褐色砂質土 (灰色粘質土ブロックを混入)
6. 淡灰茶褐色砂質土 (黄白色砂質土ブロックを混入)
7. 暗灰茶色砂質土 (炭化物を混入)
8. 淡灰茶色砂質土 (")
9. 暗灰褐色砂質土
10. 黄灰褐色砂質土
11. 9層に同一層相
12. 暗灰褐色砂質土 (黒灰色土ブロックを多く混入)
13. 10層に同一層相
14. 6層に " (")
15. 8層に " (")
16. 7層に " (")
17. 9層に " (")
18. 9層に " (")
19. 6層に " (")
20. 9層に " (")
21. 淡黄白色砂質土 (褐色粘質土ブロックを多く混入)
22. 青灰色粘質土
23. 鉄分沈着層
24. 赤茶褐色土 (鉄分を多く混入)
25. 淡青灰色粘質土
26. 暗青灰色粘質土
27. 25層に同一層相
28. 淡青茶灰色粘質土 (鉄分を多く混入)
29. 茶褐色砂質土

30. 茶灰色砂質土 (青灰色シルト質土を混入)
31. 暗灰色粘質土
32. 淡茶灰色シルト質土
33. 暗青灰色粘質土
34. 32層に同一層相
35. 暗黒灰色粘質土 (炭化物を多く混入)
36. 暗灰褐色粘質土
37. 茶褐色砂質土
38. 暗灰褐色砂質土 (炭化物を多く混入)
39. 暗茶褐色砂質土 (")
40. 茶褐色砂質土 (")
41. 茶褐色砂
42. 灰色砂質土ブロック
43. 淡黄茶色砂質土 (茶白色花崗岩風化土ブロックを多く混入)
44. 暗黄茶色砂質土 (")
45. 44層に同一層相
46. 明黄白色砂質土
47. 暗灰茶色砂質土 (炭化物を混入)
48. 灰茶色砂質土
49. 淡茶色砂質土 (灰色シルト質土ブロックを混入)
50. 灰白色シルト質土ブロック
51. 灰茶色砂質土 (灰色シルト質土・鉄分を帯状に混入)
52. 青灰色粘質土 (灰白色シルト質土ブロックを混入)
53. 暗青灰色粘質土 (")
54. 淡灰褐色砂質土 (灰白色シルト質土を帯状に混入)

A区調査区西壁 北側



- ・南側3～11層および北側4～21層は共に遺構Ⅰ面造成土-A区土層模式図明茶色土に対応
- ・南側4層内の1～4は整地のユニットを示す
- ・南側14～17層は遺構Ⅱ面整地土-A区土層模式図明茶色砂質土に対応
- ・南側24～26層は遺構Ⅲ面整地土-茶白色土に対応
- ・南側37～40層・46～48層は遺構Ⅳ面整地土-A区土層模式図灰白色花崗岩風化土に対応

- ・北側25～34層は流路変更後の河川堆積土
- ・北側51～54層は " 前の "
- ・南側31～35層・49層・53層は河川堆積土

図7.A区土層実測図 (S=1/50)

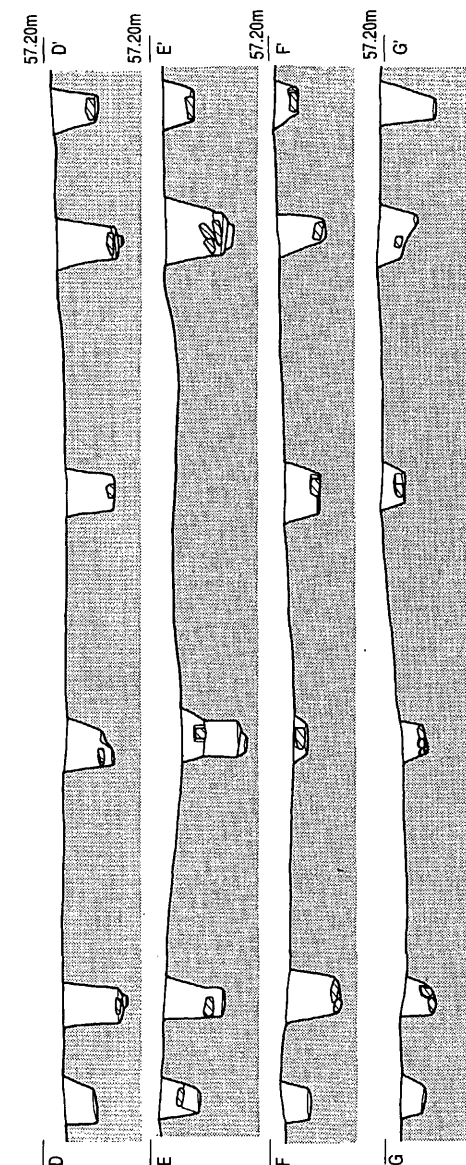
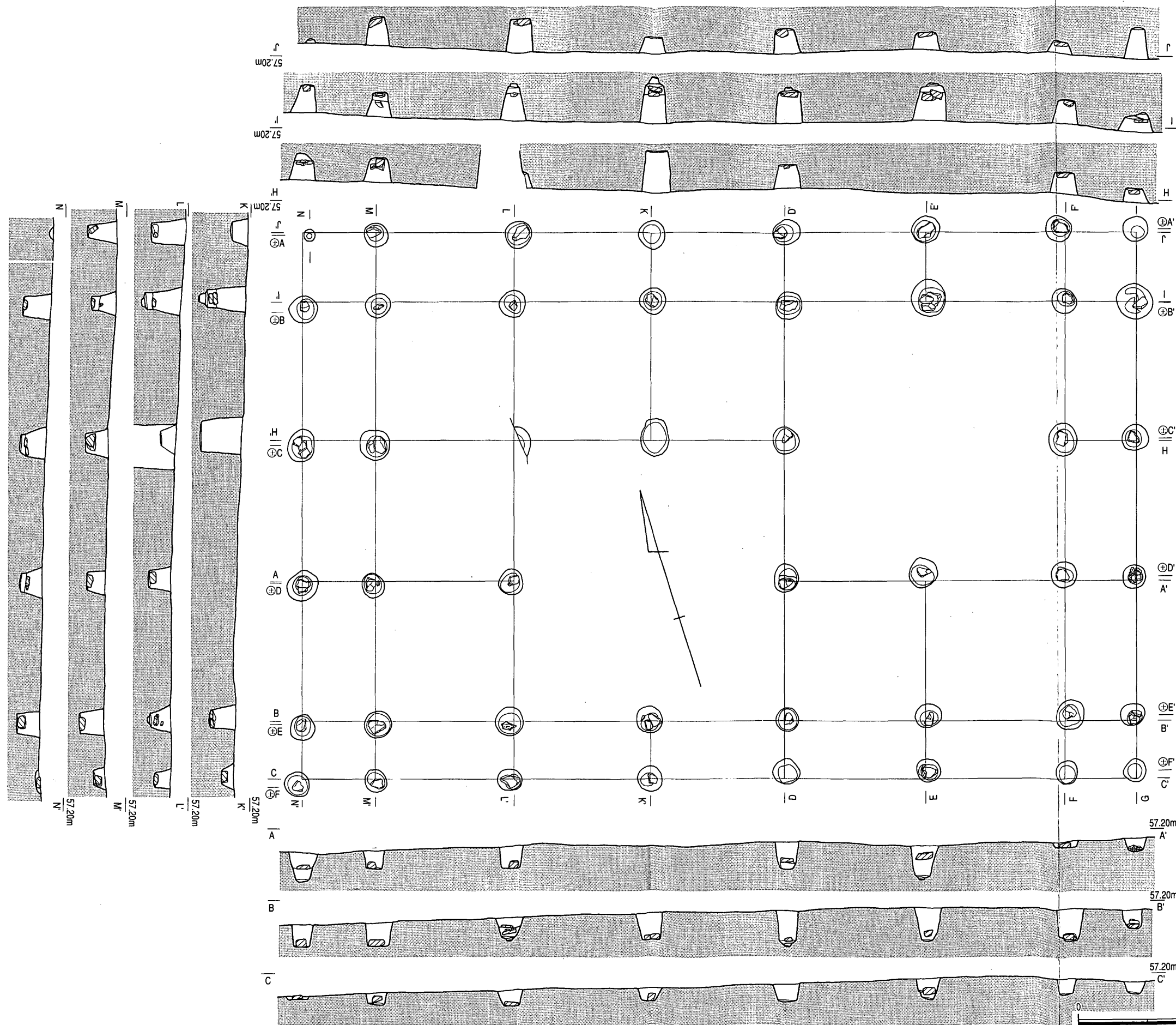
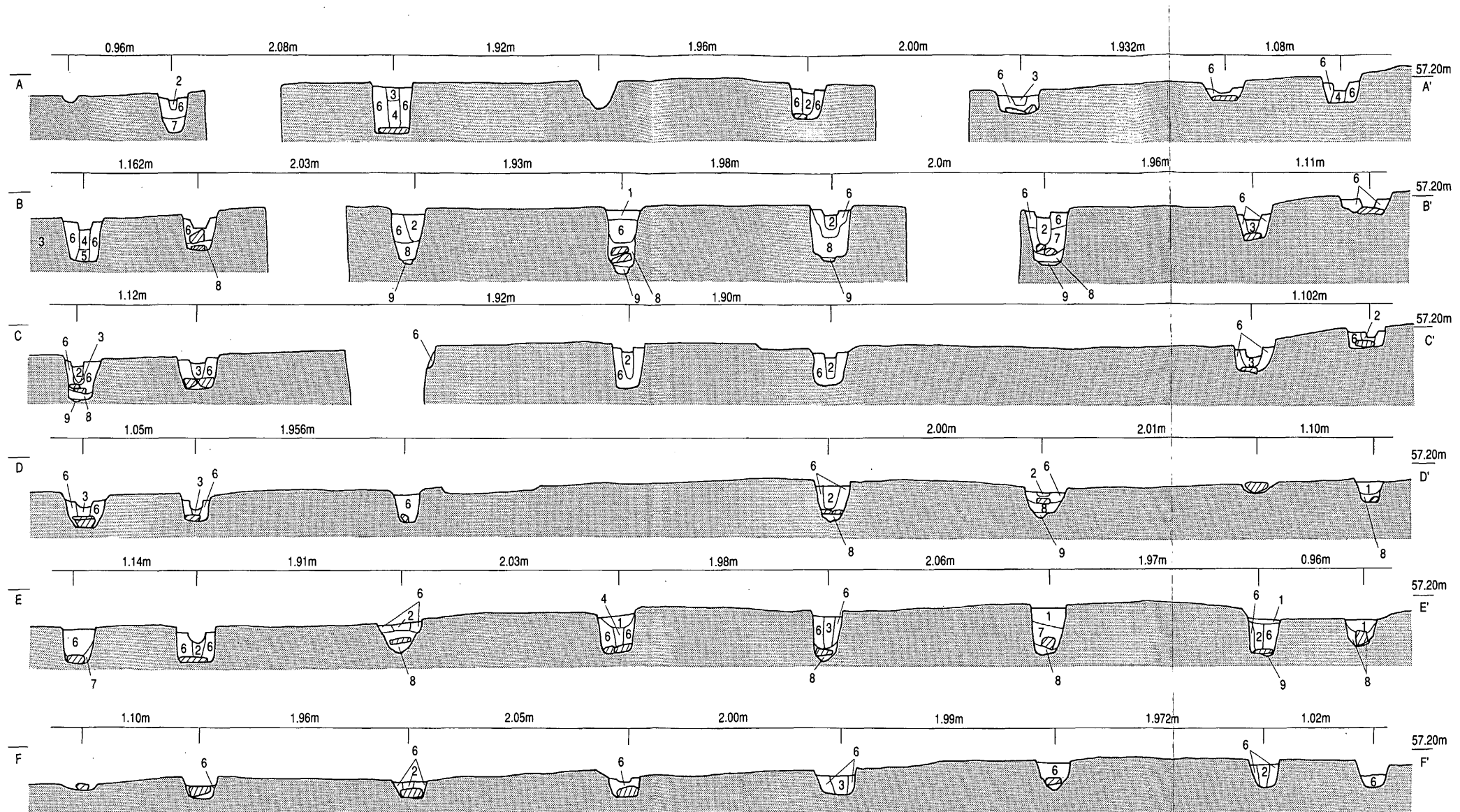


図9. ISB060遺構実測図 (S=1/60)

④は土層断面ポイント



1. 橙褐色粘質土+灰茶色土の混土層
2. 橙褐色粘質土
3. 明灰色粘質土 (しまっている)
4. 暗灰色粘質土 (粘性が強い)
5. 暗青灰色粘質 (かなりしまっている、粗い砂粒を含む)
6. 灰茶色砂質土 (炭化物を含む)
7. 暗灰色粘質土 (細粒を多く含む)
8. 茶灰色土 (炭化物を多量に混入)
9. 灰色砂質土+暗茶灰土の混土層

図10.1SB060土層観察図 (S=1/50)

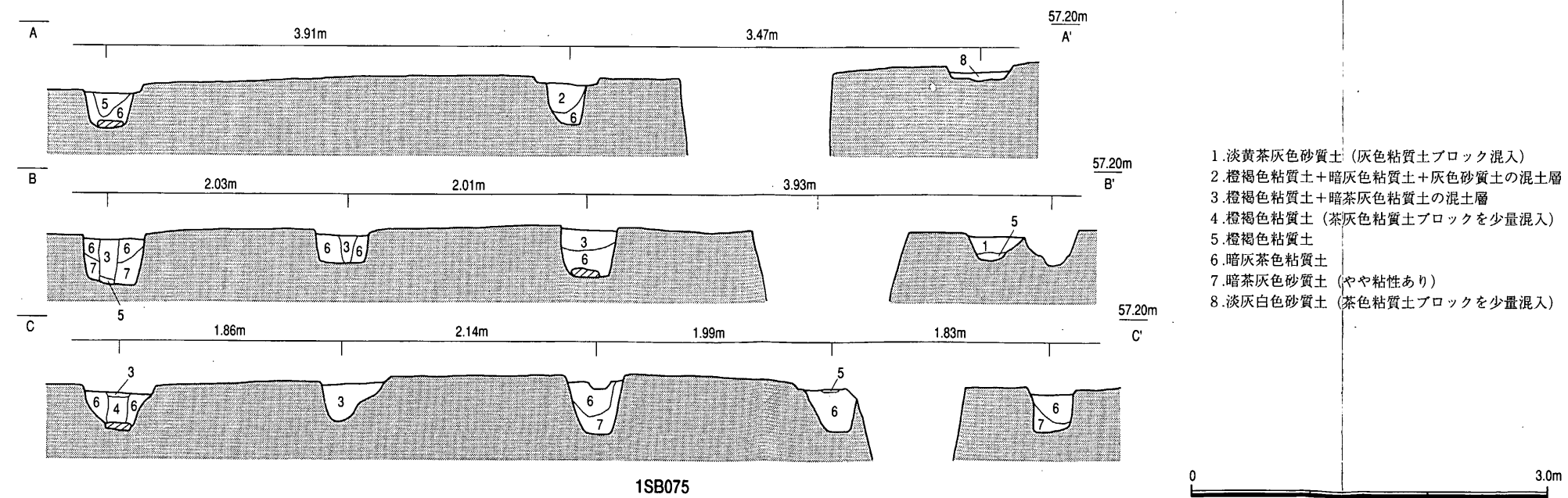
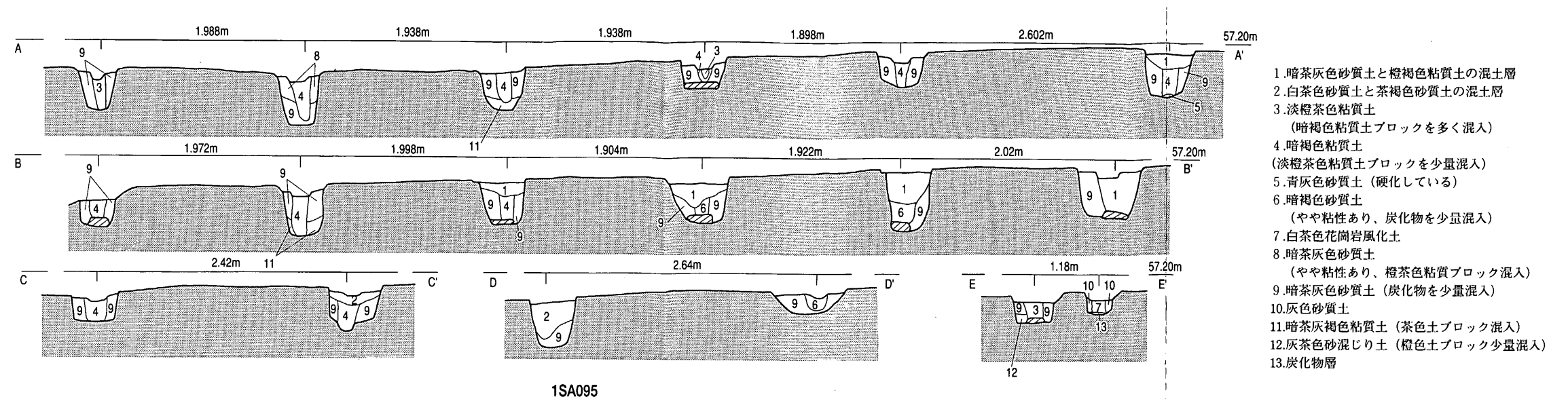


図12.1SA095・1SB075土層観察図 (S=1/50)

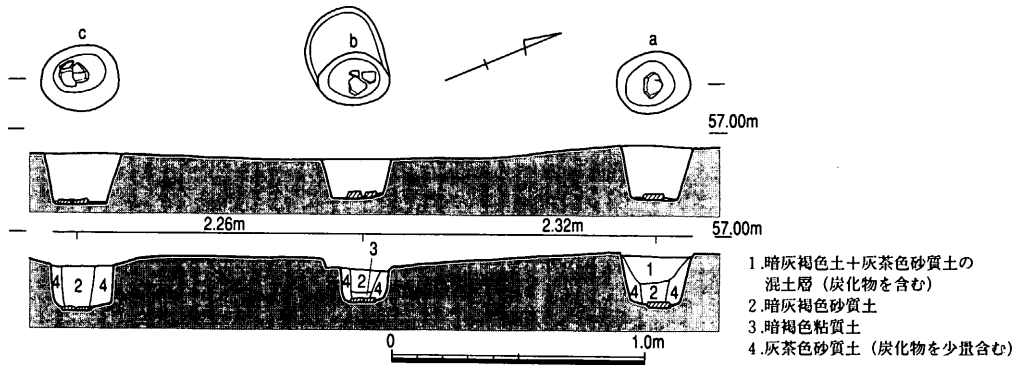


図13.1SB100遺構実測図 (S=1/60)

18° 7′ 53″ -Eである。

1SB100

調査区西端、1SB065の南側で検出されたもので、南北2間、東西1間以上の東西棟建物と推定されるが、1SB065同様大半が調査区外に展開しており、その規模は不明である。各柱間は、南北約2.7mを測る。柱掘り方は円形を呈し、直径は0.55mで、深さは約0.4mを測る。柱痕跡は掘り方全てで確認され、直径は0.2mである。また、柱穴の底には、礎板として根石が検出された。根石には約0.2mの花崗岩が用いられている。根石は一個で使用されたものと複数用いられたものがある。主軸の方位はN-18° 7′ 26″ -Eである。

b) 塀

1SA095

調査区南側、1SB060と1SB075の間で検出されたものである。2列の柱穴が幅0.6mで1SB075の北側と東側をL字状に囲んでおり、塀状の建物になると推定される。柱間総距離は、東西方向に8.47m、南北方向に7.5mを測る。北側の各柱間は1.91m～1.98mとあまり差はみられないが、L字状に屈曲する箇所は、内側で2.10mと若干広がっている。また、東側の各間についても北側より広く造られている。柱掘り方は円形を呈し、直径は平均で0.3mで、深さは0.2～0.4mを測る。柱痕跡は掘り方のほとんどで確認され、直径は0.1m～0.14mである。また、柱穴の底には、礎板として根石が検出された。根石には0.18m～0.3mの花崗岩が用いられている。根石は一個で使用されたもの、複数用いられたものがある。

塀として考えたため入口を確認すべく各柱穴間に硬化面を観察したが、確認できなかった。

主軸の方位はN-17° 36′ 59″ -Eである。

c) 井戸

1SE070

調査区の南西部で検出された石組みの井戸である。掘り方は長軸1.75m、短軸1.5mを測る楕円形の平面プランを呈し、検出面から約0.4mの深さを測る。井戸枠部分は、亜角礫～亜円礫の花

『横岳遺跡 -遺構編-』

崗岩を使用し、直径約1.0mの円形に礫を配している。礫は基本的に一段ごとに組まれており、下部の二段には、0.15m～0.3mの比較的大きな礫を用い、それより上部は拳大の礫を混じえて構築している。残りのよいところでは7段から成る。井戸枠内の堆積状況は、茶色土の単一層からなる。若干下部に暗茶色粘質土の堆積がみられるが茶色土との混じりが著しい。枠内には、茶色土と伴に五輪塔の地輪

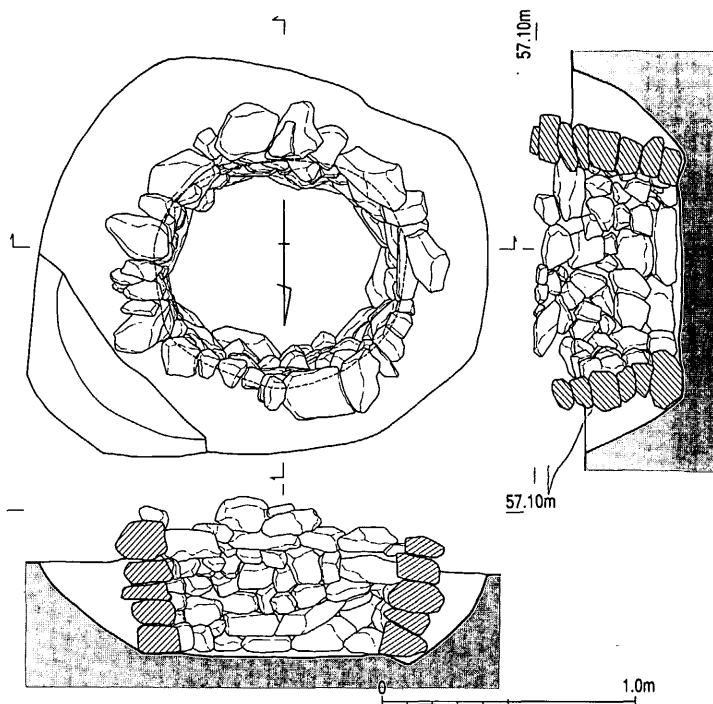


図14.1SE070遺構実測図 (S=1/30)

や最大で約0.5を測る花崗岩の礫などが、枠内に充填されており、井戸としての機能の停止後に廃棄されたものと考えられる。現状で下部から湧水は認められず、検出面からの深さが浅いことなども考慮すれば、井戸というよりも水溜め遺構としての機能も推定される。掘り方は基底部に向かって掘り鉢状に掘られている。裏込めの埋土は、灰茶色土を主体とした茶褐色土との混土層である。ISA095との切り合いは不明瞭であり、同時併存していた可能性が考えられる。

d) 溝状遺構

1SD061

調査区中程から南東側に緩やかに弧を描き延びる溝状遺構で、検出長約15.0m、検出面での幅約0.5m～1.8m、深さ約0.1mを測る。南東部は、丘陵の斜面に近づくにつれて浅く成っていき、調査区東端で無くなる。北側は調査区の中程で閉じる。埋土は暗灰褐色土の単一層である。1SB060・1SA095の建物群に切られている。

1SD110

調査区南東端で検出された略南北方向の溝状遺構で、検出長約16.0m、検出面での幅約0.2m～0.3m、深さ約0.1mを測る。北側は、丘陵の斜面に近づくにつれて浅く成っていき、1SD061と切り合うところで不明瞭となる。それより北に3.0m

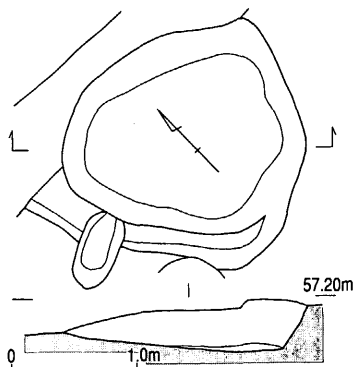


図15.1SK080遺構実測図 (S=1/40)

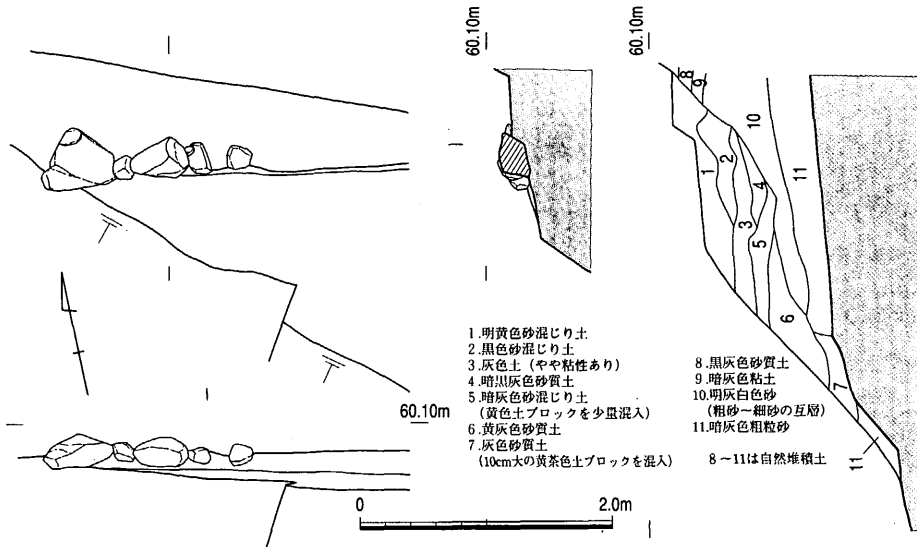


図16.1SX005遺構実測図 (S=1/60)

延び、無くなる。南側は調査区端から4.0mのところまで閉じている。埋土は暗灰褐色土の単一層である。1SD061に切られている。

e) 土坑

1SK080

調査区中央よりやや南東で検出されたもので、長軸約2.0mを測る不整形円形プランを呈する。検出面からの深さ約0.35mを測り、埋土は、黒灰土を主体とする茶褐色土との混土層の単一土層である。遺物はこの埋土内から多く出土した。1SB060の掘り方aiにより切られている。

f) その他の遺構

1SX005

調査区の北端で、他の遺構検出面から約2.8m上がった平坦部で検出された石列である。石列はほぼ東西方向に延びるもので、南側に面を揃えて造られている。現状で検出長約1.6mを測り、これより東では礫もしくはその抜き取り痕跡等は確認していないが、石列の面に沿った落ちのプランを検出している。また、西側については、もともとこの箇所では止まっていたのか、崩壊に伴い欠損したのかは不明である。埋土の堆積状況は、下位に堆積している灰色砂質土より上位には、斜面に対して水平に堆積しており、埋土内には黄茶色のブロックを含んでいることから人為性が認められる。埋土内からは肥前陶磁器片の出土が確認されている。

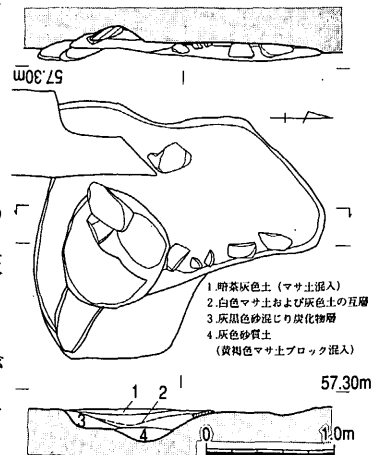


図17.1SX035遺構実測図 (S=1/60)

『横岳遺跡 -遺構編-』

1SX035

調査区中央より西側で検出されたもので、長軸約2.2m、短軸約1.6m、深さ約0.24mを測る不整形プラン呈する。遺構の南部分では、直径約0.8mの略円形に掘り込まれた箇所が確認されており、それより東側には炭化物の広がり

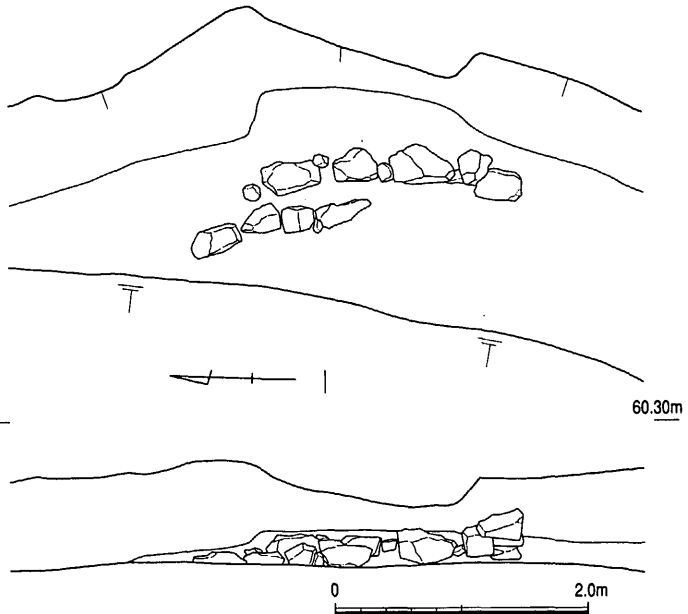


図18.1SX045遺構実測図 (S=1/60)

が認められる。また、北部分では遺構の東側端に花崗岩礫が一部並べられている。埋土の堆積状況は上位より、暗茶灰土→白色マサ土と灰色土の

1SX045

調査区中程の東側斜面で検出した石列状の遺構である。検出長は約2.5mを測り、石列は垂角礫～亜円礫から成る。大きなもので0.3m～0.5m・小さいもので0.1m～0.2mの花崗岩で構築されている。石列は谷側に面を揃えて2列みられ、南端部は扁平な礫を3段重ねて造ってある。それより南側は白色土の安定地盤であることから、この部分が当初から当遺構の南部分であったと考えられ、北側に関しては、崩壊したものと考えられる。

埋土の堆積状況は、石列構築時は暗褐色土で礫が固定されており、その後、暗灰色土が堆積し、さらに上位に黄褐色崩壊土が堆積している。なお、暗灰色土中からは肥前陶磁器片の出土が確認されている。

1SX050

調査区中程の東側斜面、1SX045より東側で検出した切り通し風の遺構である。東側丘陵斜面に直交するように検出

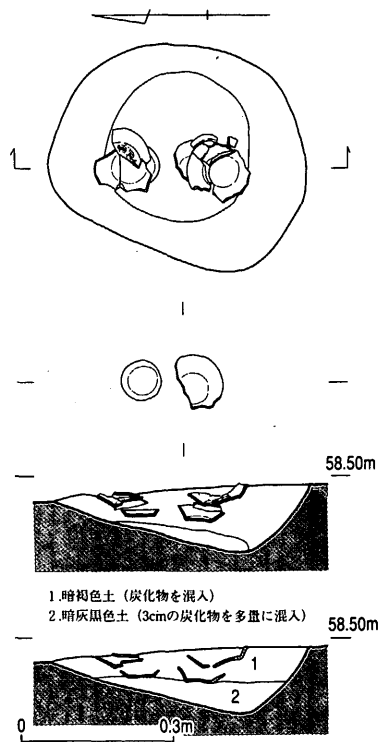


図19.1SX085遺構実測図 (S=1/15)

『横岳遺跡 -遺構編-』

され、東側の調査区外に展開している。現状での検出長3.7m、幅1.5m～2.5mを測る。不定形な段状を呈し、現時点で4段確認される。下段と上段の高低差は約0.9mを測り、ゆるやかに上がる。土層観察によると、上部には黄褐色崩壊土が遺構の半分以上に堆積し、その下位には、暗灰褐色土が堆積している。さらにその下位の床面直上には薄く暗灰色砂質土が堆積している。遺構の性格としては、切り通し風になっていることから通路等の可能性が考えられるが遺構が調査区外に延びるため、現状では判断し難い。

1SX085

調査区中程の東側で検出した、長軸約0.5m、深さ約0.13mを測る平面プラン楕円形の遺構である。埋土の堆積状況は、上位に細かな炭化物を多く含む暗褐色土で、下位にはおよそ3cm大の炭化物が多量に含まれる暗灰黒色土が堆積している。暗灰黒色土の直上で、土師器の坏a・小皿aが2対重なった状況で出土している。土師器は土圧によりかなりつぶれてはいるが、北側では、小皿aを下に置き、その上に坏aを置き、さらに坏aを反対にし蓋状にして置いている。南側のものは、坏aを置き、その上に小皿aを反対にし蓋状にして置

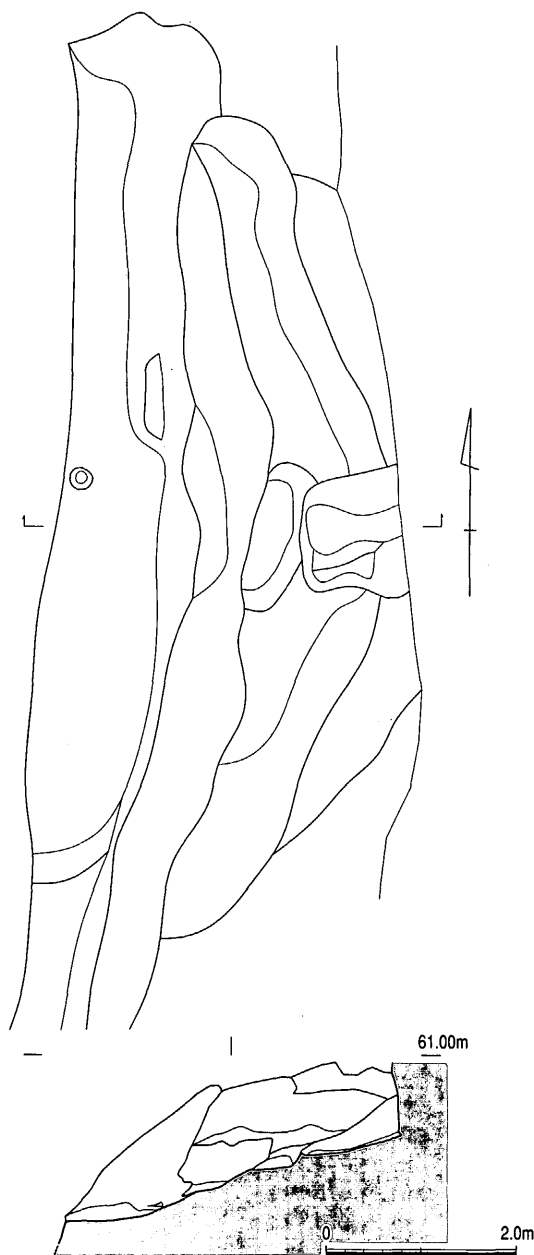


図20.1SX050遺構実測図 (S=1/80)

き、さらに坏aをその上に置くというものである。土師器内からはなにも出土しておらず、下部の暗灰黒色土中に何らかの意図があったと考えられる。遺構の性格として、地鎮等に関わる祭祀遺構が考えられる。

1SX089

調査区の中央で確認した集石遺構である。0.2m～0.3mを測る亜角礫～亜円礫の花崗岩が直径

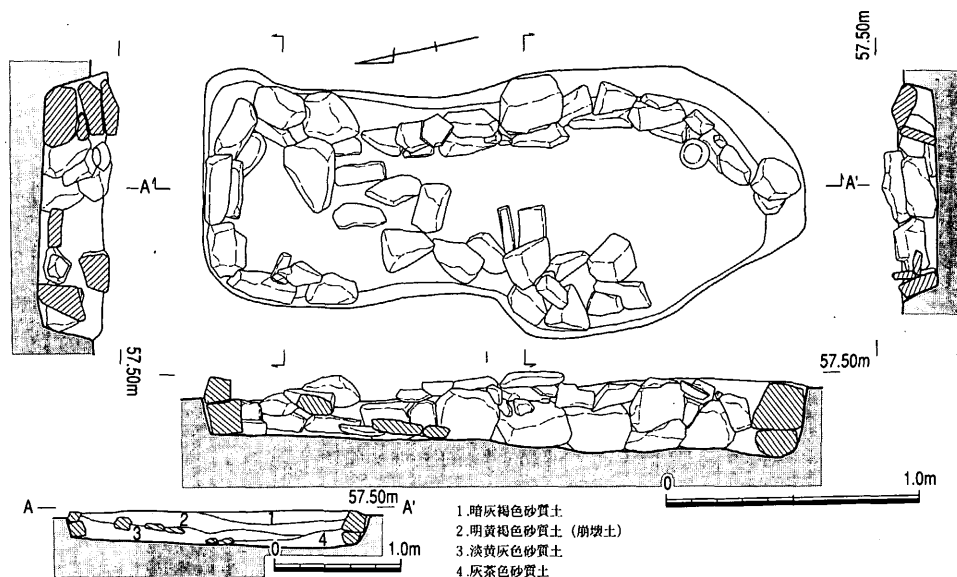


図21.1SX090遺構実測図 (S=1/30・1/60)

約0.5mの範囲でまともな検出されている。検出面からは、遺構の掘り方のプランは確認しておらず、また、集石除去後も下部に遺構は認められなかった。遺構の性格としては、単に礫が集まった可能性も考えられるが、1SB060のほぼ中軸線上に位置しており、それとの関連が想定される。

1SX090

調査区の中央よりやや北側で検出した石組みの遺構である。長軸約2.5m、短軸約0.9m～1.0m、深さ約0.2m～0.3mを測る不整長方形プランを呈す。石組みは、0.2m～0.4mを測る垂角礫～垂円礫の花崗岩が使用され、礫と礫の間は拳大の礫により固定されている。上下2段で構築されているが、西側部分は、南東側に石組みの崩壊が認められる。埋土の堆積状況は、上位より暗灰褐色砂質土→明黄褐色砂質土（礫を含む崩壊土）→若干粘性のある暗黄灰色砂質土→灰茶色砂質土である。明黄褐色砂質土は崩壊土と考えられ、土層観察では、北方向からの流入が確認できる。また、遺構の南側端、暗灰褐色砂質土の下部からは、やや南に傾いた状態で完形の土師器坏aが出土している。

1SX102

調査区の南東端で検出した遺構で、その大部分が調査区外に展開しており、規模等は不明である。現状で検出長約4.8m、幅約1.3m、検出面からの深さ約0.8mを測る。埋土の堆積状況は上位から、茶灰色砂質土→明茶褐色砂質土→暗茶褐色砂質土→茶白色花崗岩風化土を含む茶褐色砂質土である。埋土内から肥前陶磁器片の出土が確認されている。

1SX105

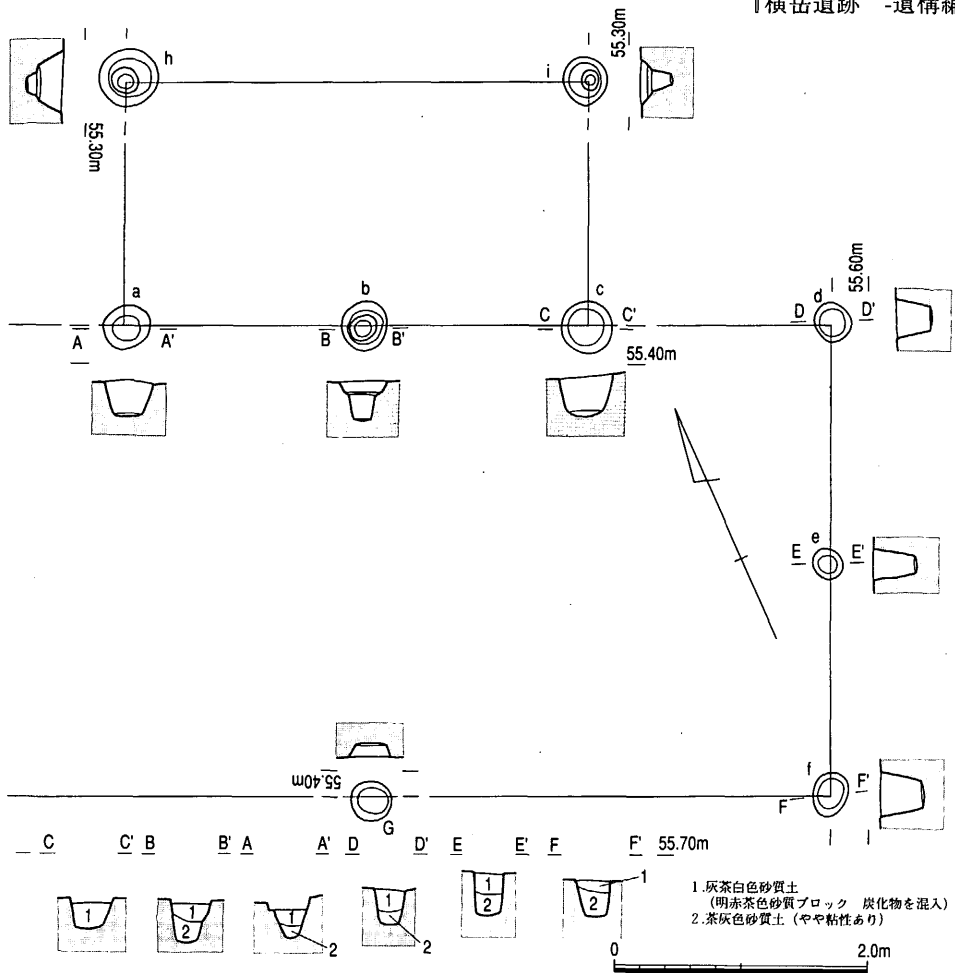


図22.1SB125遺構実測図 (S=1/60)

調査区の南側で検出した遺構で、検出幅約5.0m前後、検出長約10.0mを測り、深さ約0.5mに緩やかに凹む溝状を呈す。遺構の東側からなだらかに傾斜しており、東側と西側では高低差約1.6mを測る。東側の上位には、暗灰色土の埋土内に垂角礫～円礫の花崗岩が集中する箇所が認められる。それより下位は、淡茶灰色砂質土→灰褐色砂質土→暗灰褐色砂質土→暗灰茶褐色砂質土が何回かの掘り返しに伴い堆積している。埋土内から肥前陶磁器片の出土が確認されている。

[遺構II面]

調査の都合上、調査区の南側半分で確認。その中でも南側は安定した面を持っており、北側は、やや不安定な黒灰土に切り込む遺構が検出されている。また、黒灰色土からは木杭が多く検出されている。

a) 掘立柱建物

1SB125

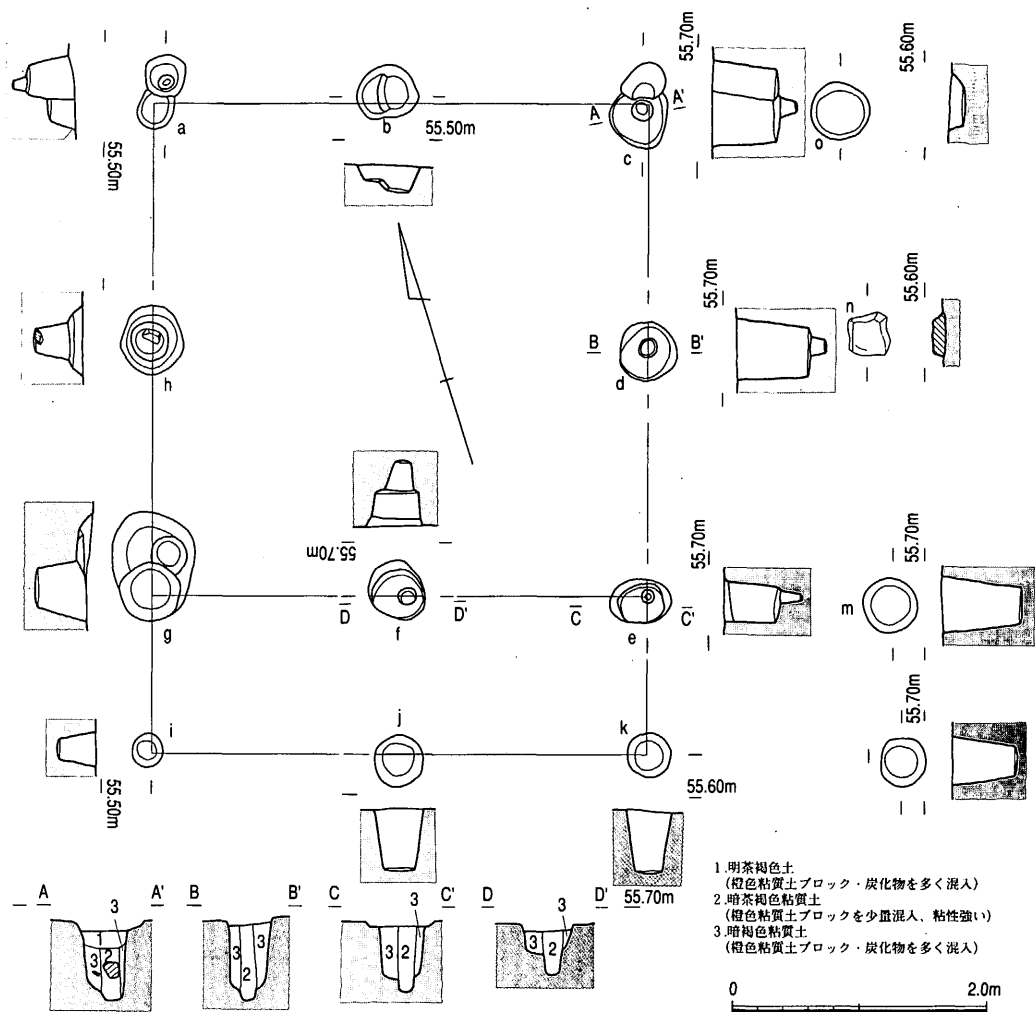


図23.1SB235遺構実測図 (S=1/60)

調査区の南側で検出されたもので、南北2間、東西4間以上の東西棟建物と推定される。また、北側には、東側から1間分空けて大きな底になると考えられる柱穴を検出している。仮にこの底が建物の中央に位置するならば、2間×4間の規模を有する建物と推定される。各柱間平均値は、南北および東西ともに1.85mを測り、庇部分は南北3.66m、東西1.92mを測る。調査当初は、建物東側を南北方向に延びる柵列と考え、庇部分を東西2間で、北側に展開する南北棟建物を想定していたが、これより北では柱穴は検出できず、各柱間の間隔がほぼ同じであることから一つの建物として認識するに至った。ただ、南側に関しては1間分柱穴を検出できていないが、現段階では一つの建物として考えておきたい。柱掘り方は円形を呈し、直径は0.3~0.4mで、深さは0.3~0.4mを測る。柱痕跡は確認できず、土層観察から茶白色砂質土と茶灰色砂質土の上下2層に分層された。主軸の方角はN-25° 6' 38" -Eである。

1SB235

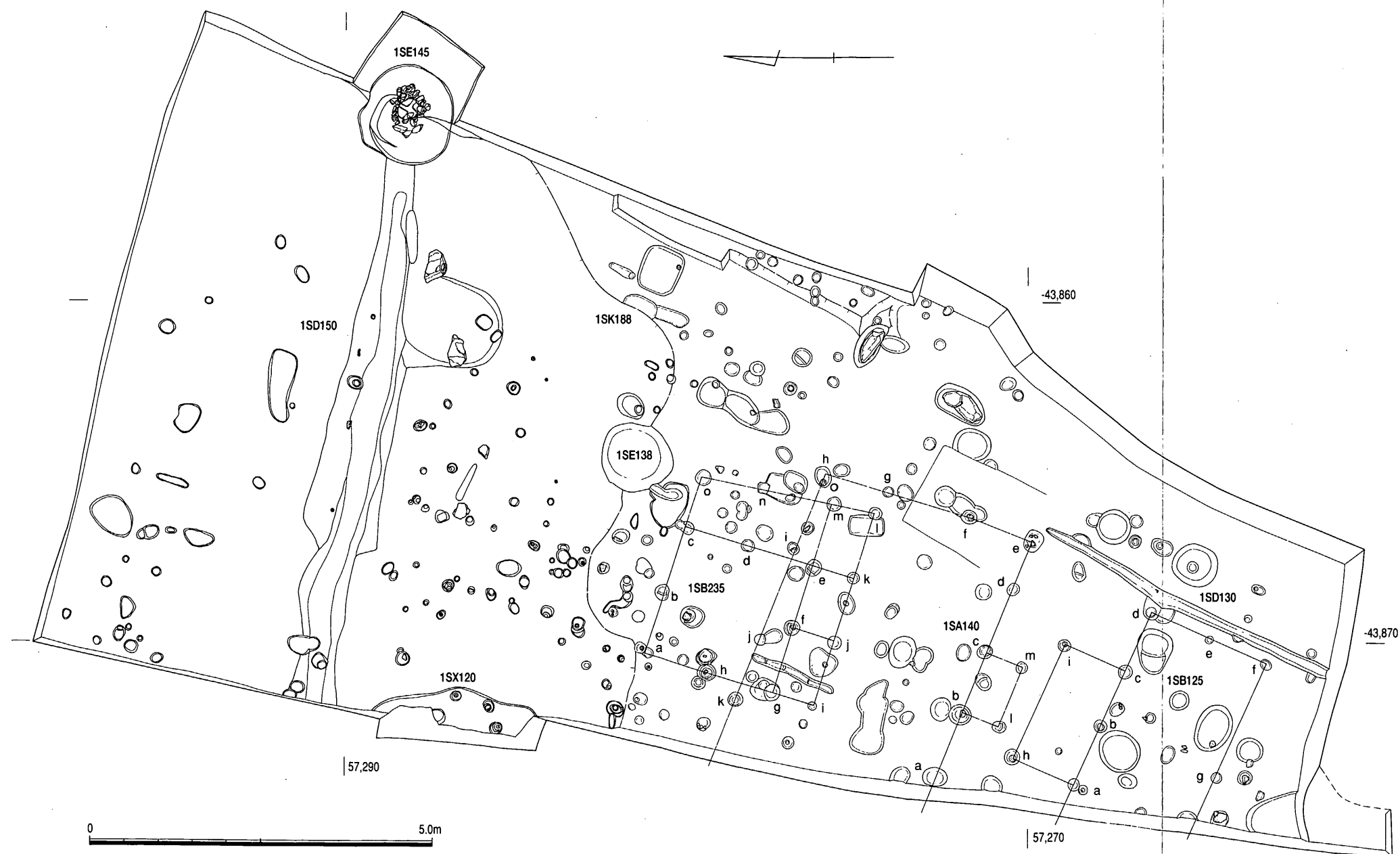


図24.A区II面遺構配置図 (S=1/150)

Archaeological site plan of the 1955 excavations at the Shuangmiao site. The plan shows various pits (a, b, c, d, e, f, g, h, i, j, k, l, m, n, o, p, q, r, s, t, u, v, w, x, y, z) and their elevations. A legend identifies three soil types: 1. Dark greyish-brown clay (暗褐色粘質土), 2. Greyish-brown sandy clay with some carbonaceous matter (炭化物を少量混入) (茶灰色砂質土 (炭化物を少量混入)), and 3. Yellowish-brown sandy clay (明茶灰色砂質土 (粘性あり)). A scale bar indicates 0 to 2.0m.

調査区中央で検出されたもので、南北2間×東西2間の南側に庇もしくは縁側をもつ建物である。柱間総距離は、南北で5.16mを測り、東西で3.92mを測る。各柱間は東西に平均1.95m、南北に平均1.92mを測り、庇もしくは縁側部分は、1.25mを測る。柱掘り方は円形を呈し、直径は0.25～0.5mで、深さは平均0.45mを測る。柱痕跡は掘り方 $b \cdot c \cdot d \cdot e$ で確認され、直径は0.12m～0.14mである。柱痕跡の埋土は暗茶褐色粘質土で、掘り方の埋土は橙色粘質土ブロックを多量に含む暗褐色粘質土である。主軸の方位はN-18° 54' 1" -Eである。

-35-

『横岳遺跡 -遺構編-』

ることから建物に付帯する施設の可能性が示唆される。また、掘り方n・oについても若干の歪みが認められるものの、柱間は1.8～2.0mとほぼ同じであり、掘り方l・mと合わせて東西に1間分延びる可能性がある。

b) 柵列

1SA140

1SB125の北側で検出された東西方向のもので、東側で北に1間分曲がるL字状を呈している。西側は調査区外に展開しており、その延びは不明である。現状での柱間総距離は、東西で7.5mを測り、南北に2.0mを測る。各柱間は西から2.06m・2.00m・2.02m・1.54mを測り、東側だけ若干短くなっている以外は、整然と並んでいる。柱掘り方は円形を呈し、直径は0.4～0.6mで、深さは0.4～0.5mを測る。柱痕跡は掘り方a・bで確認され、直径は0.1mである。柱痕跡の埋土は暗褐灰色粘質土で、掘り方の埋土は茶灰色砂質土である。全ての柱穴の底には、礎板として根石が検出された。根石には約0.2mの亜円礫～亜角礫の花崗岩が用いられている。根石は一個で使われているが、掘り方eのように、小礫を複数用いているものもある。主軸の方位はN-22° 10' 27" -Eである。

この他、柵列の北側で検出された掘り方g～kと合わせて1棟の建物としての可能性が推測されるが、東側で柱の軸が歪むことや、南側の柱間が整然としているのに対して規則性が見受けられないこと、さらに柱掘り方の規模が小さく、底に根石をもたないことなどから現状では柵列としておく。

また、掘り方l・mは、掘り方b・cから南に1.1m、平行に延びており、当建物に付帯する施設の可能性が考えられる。

c) 溝状遺構

1SD130

1SB125の東側にある南北方向の溝状遺構である。南側は調査区外に延び、北側は約10.0mの所で止まっている。北側は検出時に一部掘り下げ過ぎて約0.5m程消失している。検出面での幅約0.3m、深さ約0.3mを測る浅い溝状を呈している。埋土の堆積状況は、灰白色砂質土の単一土層である。主軸の方位はN-23° 21' 25" -Eであり、西側の1SB125との関連が考えられるが、建物との距離が近いことから雨落ちの溝とは考え難い。

1SD150

調査区の北側で検出した東西方向の溝状遺構である。検

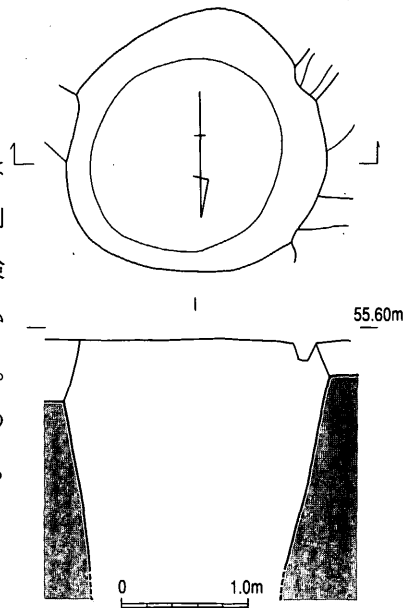


図26.1SE138遺構実測図 (S=1/60)

『横岳遺跡 -遺構編-』

出長約15.5m、幅約1.5m、深さ約0.5mを測る。西側は調査区外に延び、東側については1SE145により切られている。遺構の北側端、埋土内からは、杭列を検出しており、杭列は直径が約0.1mのものを3本確認している。杭と杭の間は一定しておらず、2.0m・2.5mを測る。埋土の堆積状況は、上位から青灰白色粘質土→黄茶色砂質土→黒褐色土であり、黄茶色砂質土堆積後に掘り返しが行われている。主軸の方位はN-10° 11' 12" -E

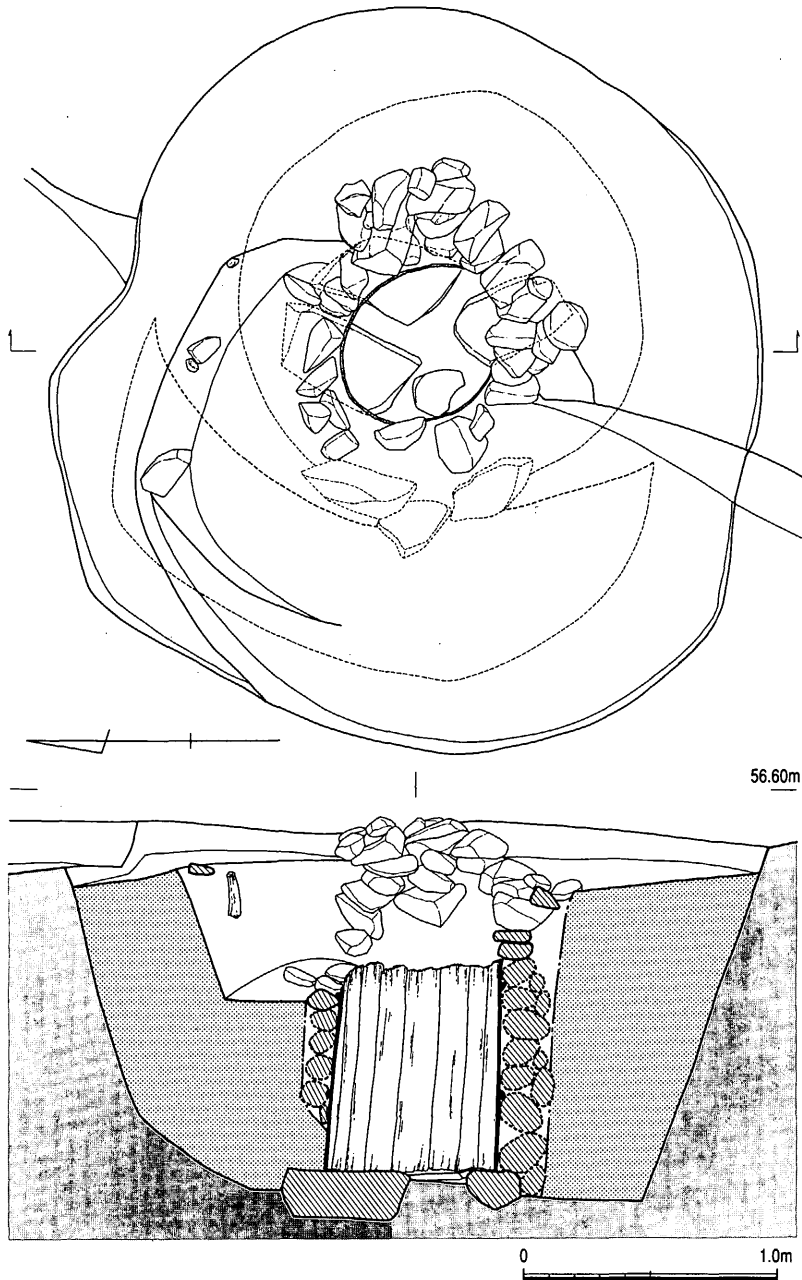


図27.1SE145遺構実測図 (S=1/30)

である。

d) 井戸

1SE138

調査区の中央で検出した素堀の井戸と考えられる遺構である。掘り方は検出面で長軸約2.5m、短軸約2.1mを測る不整楕円形プランを呈す。安全管理上遺構の完掘には至っておらず、現状で

『横岳遺跡 -遺構編-』

深さ2.0mを測る。堆積状況は、上位に黄茶色砂質土のレンズ状堆積がみられ、それより下位には、黄灰色粘質土・青灰色土・茶色土等の混土層が堆積している。この堆積状況から井戸として掘削の際、湧水点に達しないことから、途中で断念し、そのまま埋め戻したものと推定される。上位の層はその後、窪みに自然堆積したものと考えられる。遺物は散在するように出土している。

1SE145

調査区の北東隅で検出した井戸である。掘り方は検出面で、長軸約3.0m、短軸約2.6mを測る略円形プランを呈し、そのほぼ中央に直径約1.2mを測る略円形を呈する石組がみられる。それより約0.5m下位で、幅約0.1m、長さ約0.8mの板材を円形に組んだ桶状の井筒部が認められた。板材は西側の所で幅約0.05mのものが使用されており、この部分で組み終わったと考えられる。井筒は長径0.7m、短径0.6mとやや歪んでいる。井筒部の外側は0.1m～0.2mの礫で固定されている。検出面からの深さは約1.5mを測り、基底部には、長軸約0.4m～0.5m、厚さ約0.2mを測る扁平な花崗岩礫を3個配している。湧水は北東の礫と礫の間からのものが顕著であった。井筒内の埋土は灰白砂質土であり、掘り方の埋土は青灰色粘質土である。

e) その他の遺構

1SX120

調査区中央の西側で検出した遺構である。遺構は調査区の西側に展開していたと考えられるが、造成等で掘削されている。現状で南北方向に約4.5m、東西方向に約1.2mを測る平面不整形

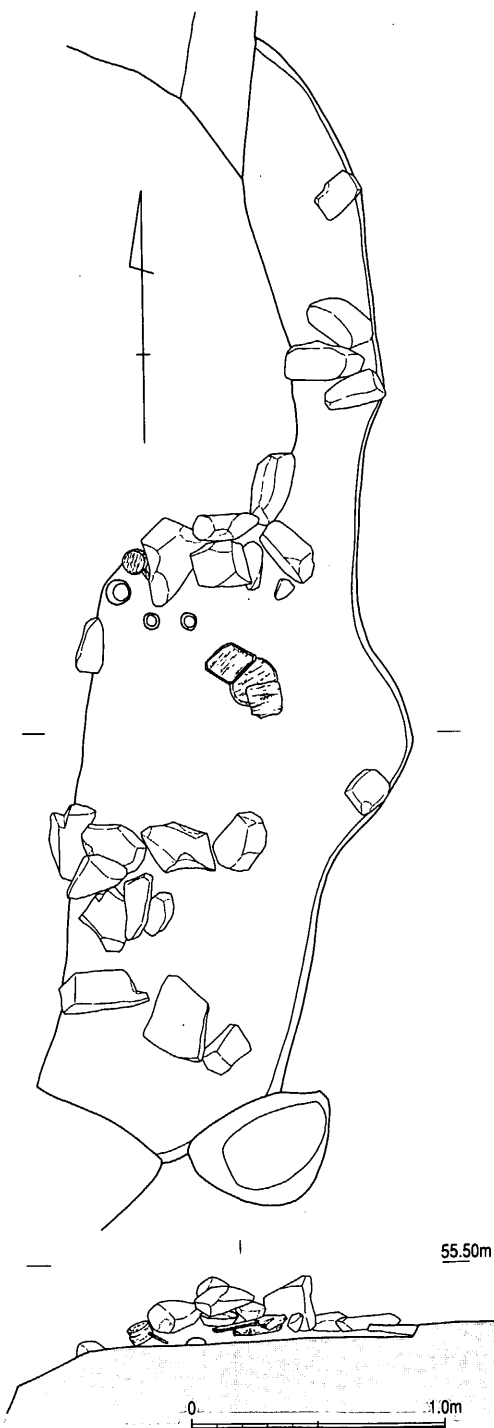


図28.1SX120遺構実測図 (S=1/30)

『横岳遺跡 -遺構編-』

プランを呈す。検出面からの深さ約0.1mと浅い。遺構内には礫が配されているが明確でなく、遺構のほぼ中央辺りを約1.0m空けて、南北両側に礫のまとまりがみられる。堆積状況は青灰色腐植土の単一土であり、特に南北の礫群と礫群の間に厚く堆積している。そこからは、多くの植物遺体と共に漆器・椀・皿、小形の曲げ物、箸等の木製品が出土している。

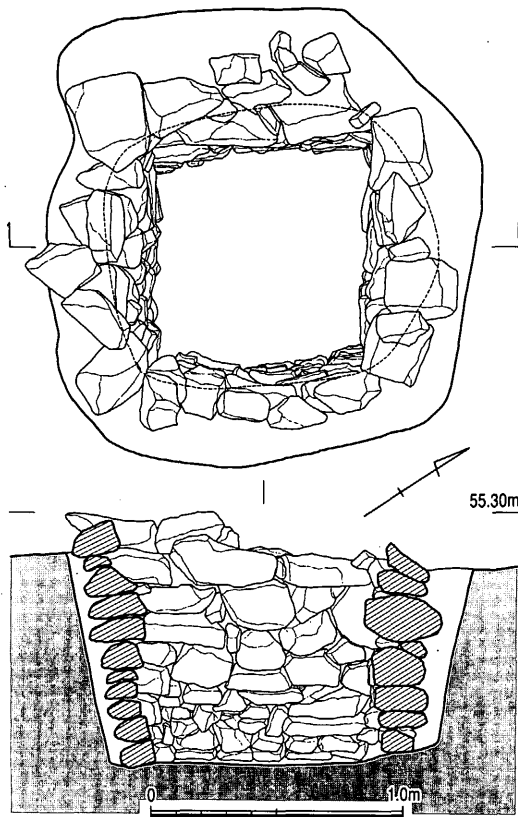


図29.1SE155遺構実測図 (S=1/30)

調査区の北半分を占めるように検出できた遺構で、上位には黒灰色土が堆積し、その下位には灰白色シルトを帯状に含む暗青灰粘質土および淡灰色砂質土が堆積していた。人為性はいくつかあらず、自然流路の景観を有している。堆積土は粘質土であり、湿地的な生態環境が想定でき、

〔遺構Ⅲ面〕

Ⅱ面で確認された1SD240より南側で、まとまったピット群を検出したが、明確な建物跡等性格が付与できる遺構は確認できなかった。

a) 溝状遺構

1SD240

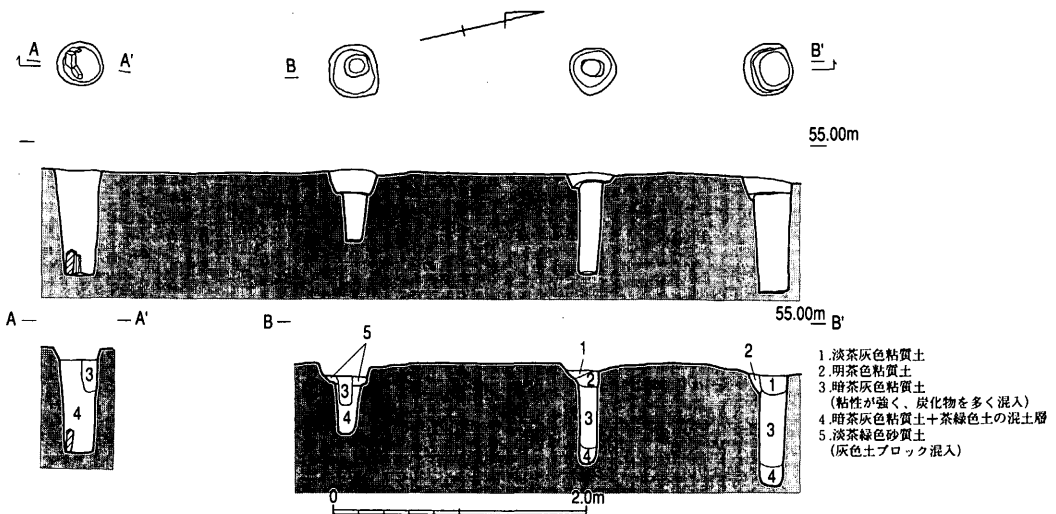


図30.1SA185遺構実測図 (S=1/60)

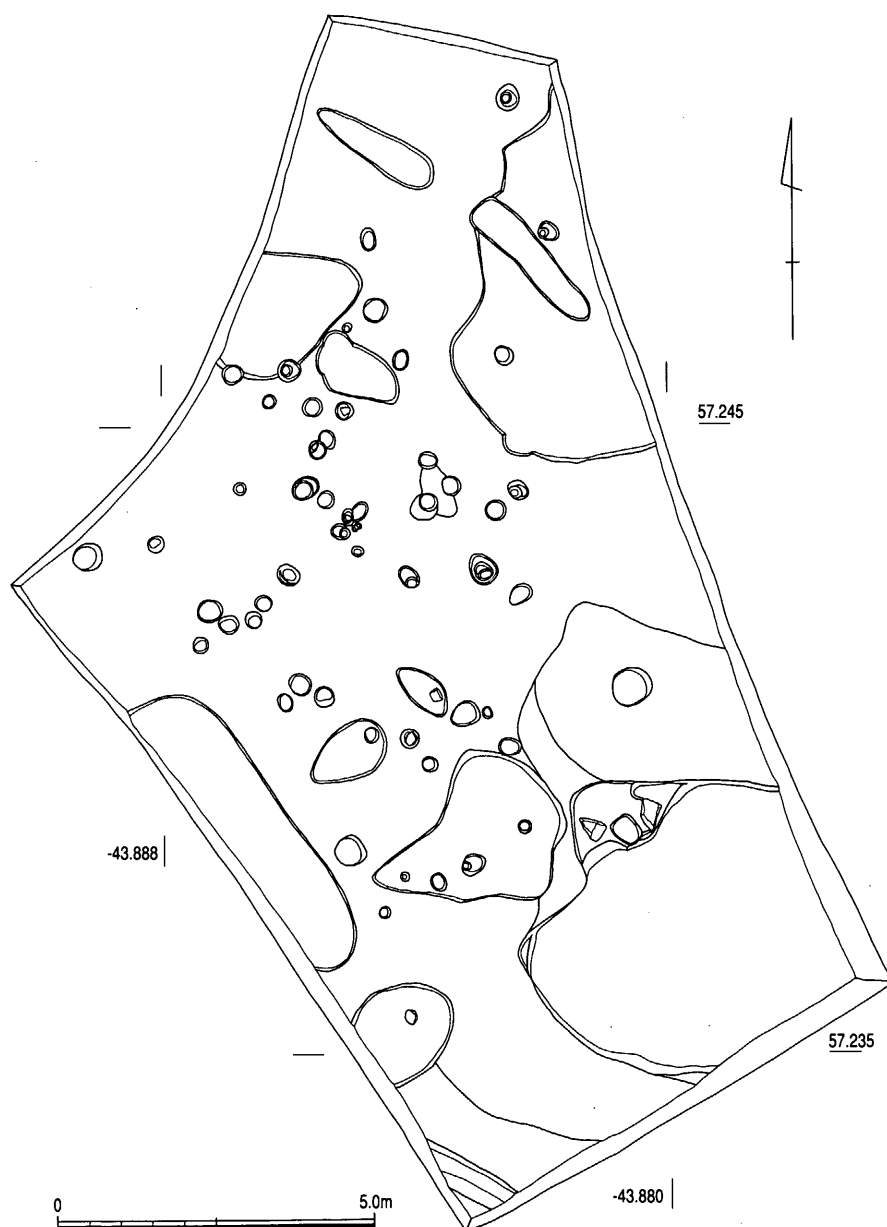


図31.C区遺構配置図 (S=1/120)



図32.A区Ⅲ面・Ⅳ面遺構配置図 (S=1/150)

堆積土中には多量の木製品の他、各種遺物が包含されていた。

[遺構Ⅳ面]

調査区の西端で一部確認しており、遺構の面的な広がりを確認するまでは至らなかったが、東側の丘陵斜面に沿って、調査区の西側に遺構の展開する可能性が考えられる。また、遺構Ⅲ面の北側にあった1SD240の下位には、1SE155の井戸跡、1SK171が検出が検出された。

a) 柵

1SA185

調査区の西端で検出した南北方向の柱穴列である。直径約0.4前後を測り、3間（5.3m）確認している。検出面からの深さは一定しておらず、また、柱間も一定しておらず、北から約1.4m・1.85m・2.05mを測る。3間より南北方向には延びておらず、調査区の西側に展開する建物跡とも想定れるが、柱間に差がありすぎることから現状では柵列と考えておく。主軸の方位はN-13° 21' 46" -Eである。

b) 井戸

1SE155

調査区の北東端の一段下がった平坦部で検出された井戸である。一辺が約1.7m～1.8mを測る平面プラン略隅丸方形を呈す掘り方で、その中に一辺が約0.9mを測る方形の石組みの井戸枠がみられる。石組は南西端から組始められ、それより、左回りに組まれている。8～10段から成る石組みは、下部に0.1m～0.2mの扁平な礫が使用され、下部より3～4段めでは、一部0.3m程の礫も使用されているが、基本的に拳大前後の比較的小さな礫が使用されている。5段目より上位は、0.2m～0.4mの大きな礫を用いる傾向にある。また、礫と礫の間は、小礫もしくは黒灰粘質土により固定されており、これらの礫はほとんど垂角礫～垂円礫の花崗岩が用いられている。その他、北側部分については、その他に比べて粗く組まれており、この部分だけ、別に組まれている可能性も考えられる。井戸基底部には、黒色腐植土が1cm程薄く堆積している。

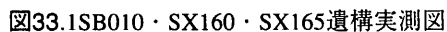
c) 土坑

1SK171

1SE155の西に隣接して検出されたもので、長軸長約1.95m、短軸長約0.95m、深さ0.8mを測る。略円形プランを呈する土坑が2基切り合うように検出されているが、切り合いは認められず、茶灰色ブロックを含む茶褐色土が堆積していた。

C区

当初他の調査区に比べ標高が低く、調査区西に接して流れる小河川によって形成された河岸段丘にあたることから、遺構の残存は望めないものと考えていた。しかし、試掘調査を実施したところ、調査区南側へ傾斜するように遺構面が確認できたことから、調査を実施した。



B区

[遺構1面]

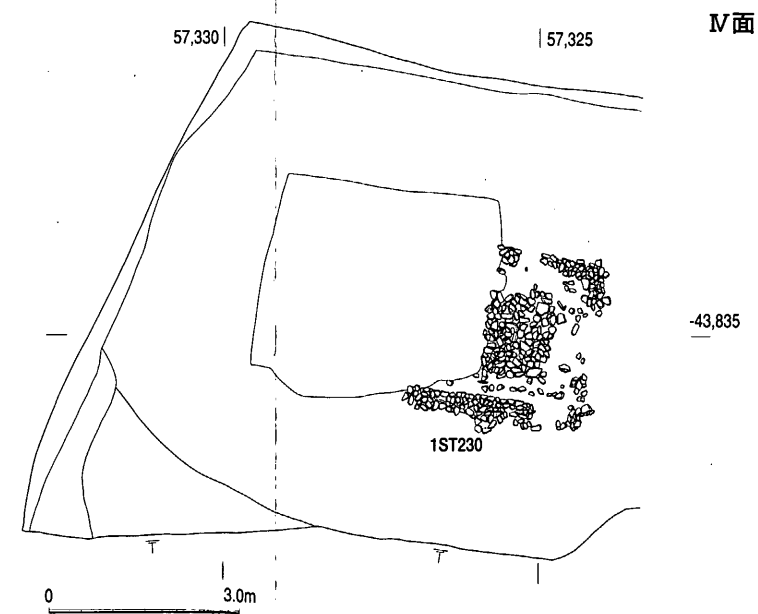
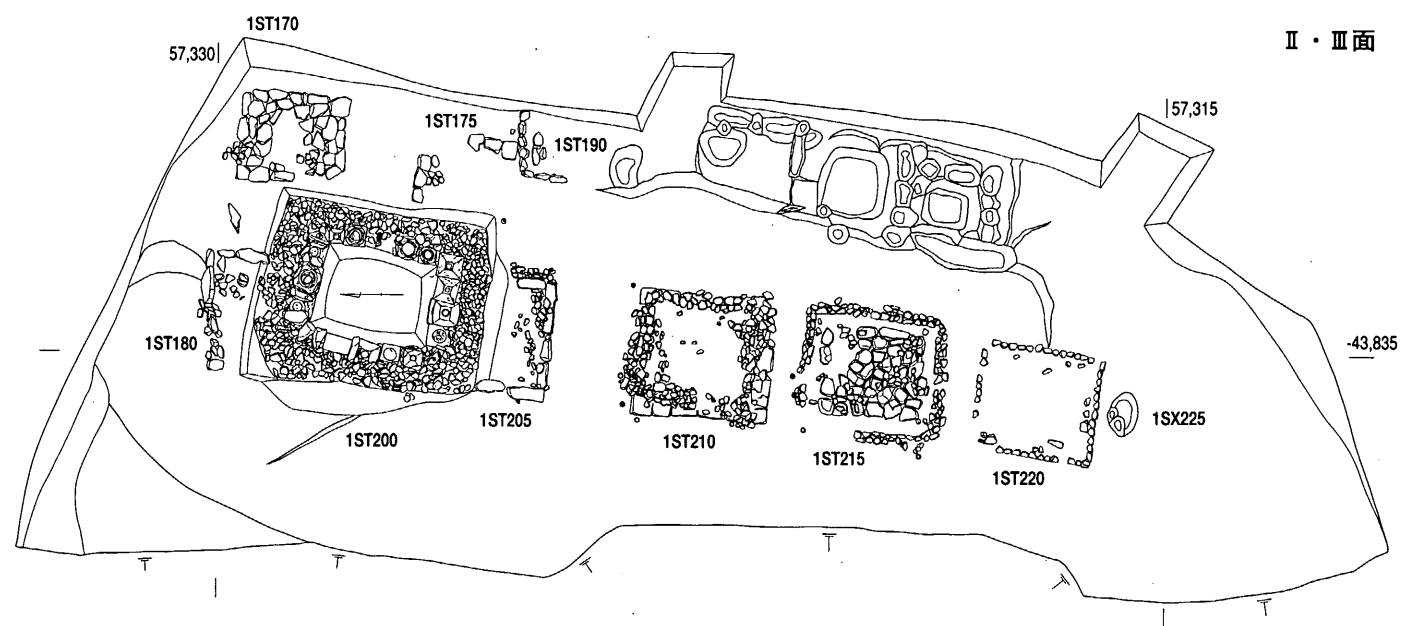
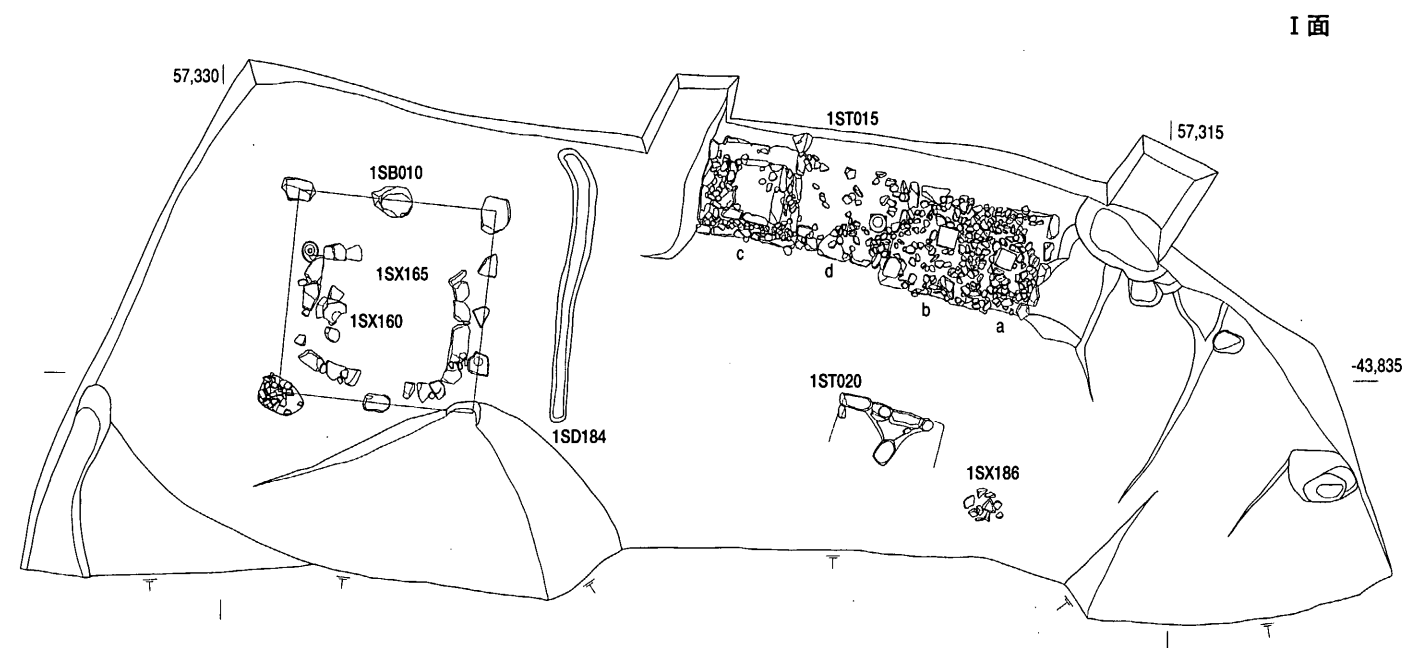


図34.B区I面・II面遺構配置図 (S=1/120)

a) 礎石建物

1SB010

調査区の北側で検出した南北2間×東西4間の礎石建物跡である。東側の礎石は、長さ約0.5m～0.65m、幅約0.35m～0.45mの扁平な花崗岩が使用されている。西側の礎石は、斜面の崩壊に伴い1基消失し礎石の掘り方のみ確認できる他は、礎石および礫の集積のみが残存している。残存している礎石hは、長さ約0.4m、幅約0.25mの花崗岩を用いている。また緑色片岩礫を集積した小穴は、礎石標高とあまり落差がないことから、礎石の代替えとして集石遺構を転用した可能性がある。南側は中央に礎石e、長さ約0.3m幅約0.2mの花崗岩を据え、さらに両側に礎石d・fが据えられ、長さ約0.35m、幅約0.3mの花崗岩礫を用いている。西側の礎石fには、直径0.12mの柱のあたり痕跡を確認している。柱間総距離は、南北3.12m、東西3.24mを測る。各柱間は、1.56mを測り、南側の東西の各柱間は、西から0.84m・0.74m・0.76m・0.9mを測る。南側は柱間が狭いことや、中央の礎石eは他に比べて小さいことから東柱であった可能性があり、本来二間×三間の外観を呈するものと考えられる。したがって礎石eは、礎石d・fの間にあることから、入口の扉を支えるものと推定できる。礎石掘り方は一様でなく、深さ0.1m程度に掘り込まれるもの、浅い凹状を呈すもの、根石を伴うものがある。主軸の方位はN-7° 3′ 34″ -Eである。建物内部および周辺には骨細片が散在していた。

建物内部には円形に石列を組む1SX165が検出され、さらに1SX165の北よりに大甕を埋置した1SX160がある。これらは一連の遺構として考えられ、建物床下に蔵骨器を供えた1SX160があったものと考えられる。さらに、1SX165の礫の下位には後述する1ST200が検出され、1ST200の性格を意図した可能性が強い。

b) 溝状遺構

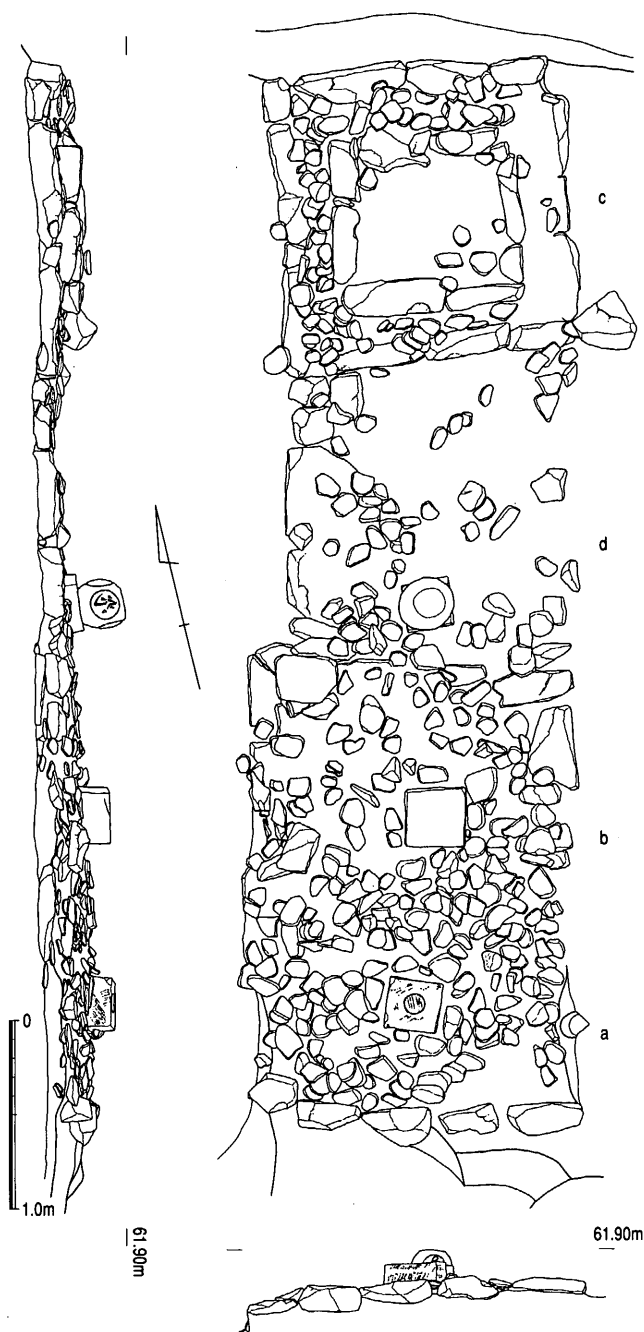
1SD184

1SB010の南側で検出した東西方向の溝状の遺構である。検出長約3.0m、幅約0.25m～0.35mを測り、東側で若干北側に曲がって止まる。検出面からの深さは約0.1m～0.15mを測る。埋土には灰茶色土の堆積土がみられた。1SB010の南側と平行することから、雨落ちの溝と考えられる。

c) 墓

1ST015

調査区の東側で検出した石塔を持つ石組墓である。検出長は南北に約5.5m、東西約1.5～1.6mを測り、4つの石組墓が連結して造られている。石組の状態から1ST015b・1ST015c→1ST015a・1ST015dの前後関係が見て取れる。石組墓は地山整形された一段上がった平坦部に構築されているが、検出段階では、崩壊土等の堆積により西側の1SX186、1ST020と同レベルで検出されている。以下a～dに分けて個別に記す。



1ST015a

1ST015bの南側に連結して造られたもので基壇状を呈す。区画石は0.1m～0.4mの垂円礫～垂角礫の花崗岩により一段で、平面形縦長の長方形に造られている。西側のみ二段で造られており、長さ約0.8m、幅約1.6m、高さは約0.25mを測る。ほぼ中央に一辺が0.28mの地輪のみが残存しており、当初は五輪塔があったものと考えられる。埋土の状況は、下位に黄褐色花崗岩風化土があり、その上位に薄く帯状に黄色土が観察できた。この層より上位は暗茶色砂質土→明黄茶色土であった。明黄茶色土中には緑色片岩礫が並べられており、その上部に五輪塔が置かれていた。

1ST015b

1ST015aの北側に位置する。内側と外側の二段の基壇を形成し、外側は、平面形一辺がおおよそ1.9mを測る正方形プランを呈し、高さは検出面から0.05mを測る。内側は一辺がおおよそ1.5mを

図35.1ST015遺構実測図 (S=1/40)

測る正方形プランを呈し、高さは0.2mを測る。外側は西側のみ、0.28m～0.55mの大きな垂角礫の花崗岩を横方向に立てて使用し、南北側は0.3m～0.4mの板状の花崗岩垂角礫を倒して組み、

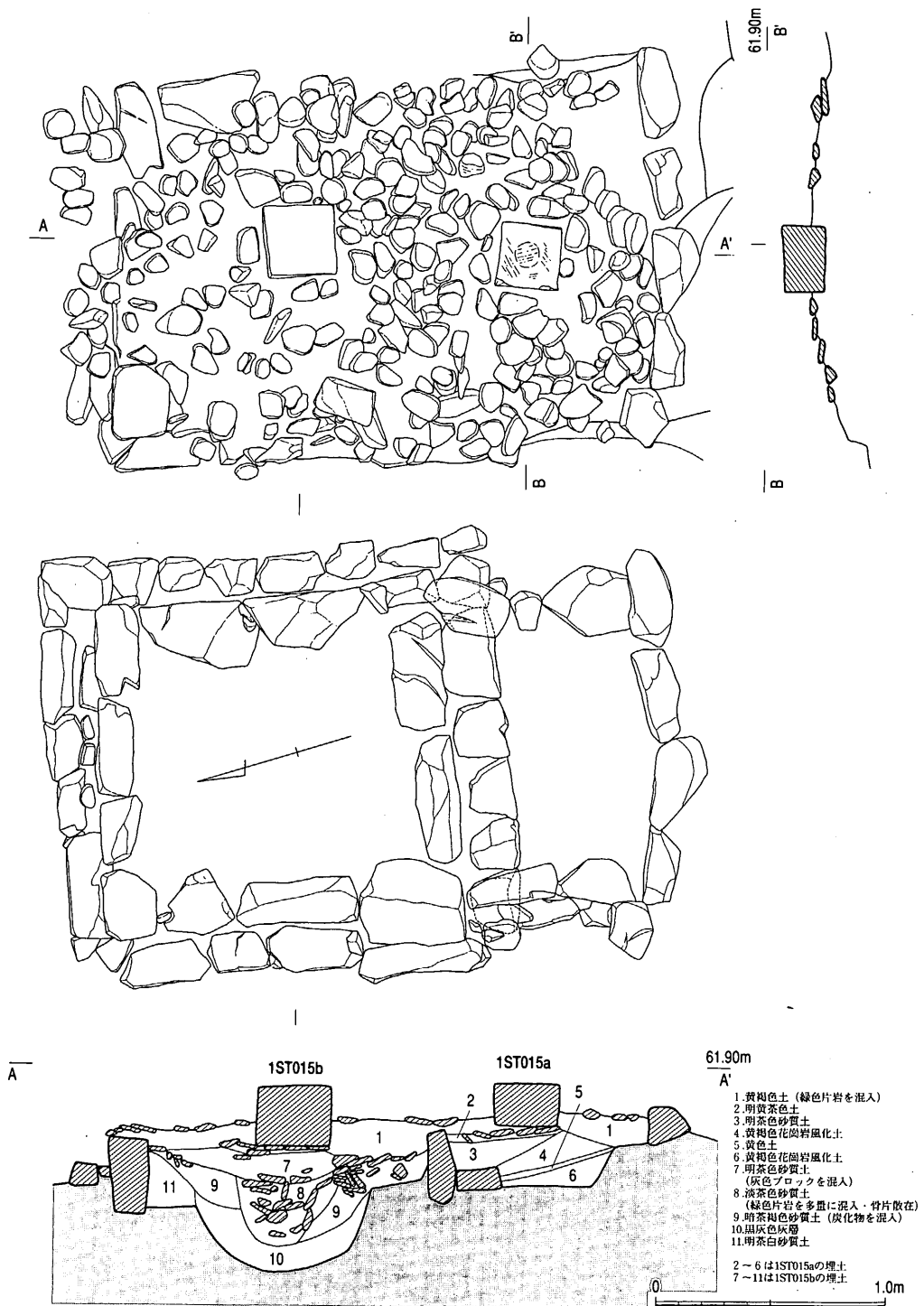


図36.1ST015a・b遺構実測図(1)(S=1/30)

東側はさらに小さい約0.2m～0.3mの扁平な花崗岩亜角礫を倒して組でいる。内側は、地山を掘り下げて、約0.25m～0.5mの大きな亜角礫の花崗岩を横方向に立てて組でおり、明茶白色砂質土により固定されている。外側はそれを囲むように組まれており、地山整形は認められない。石

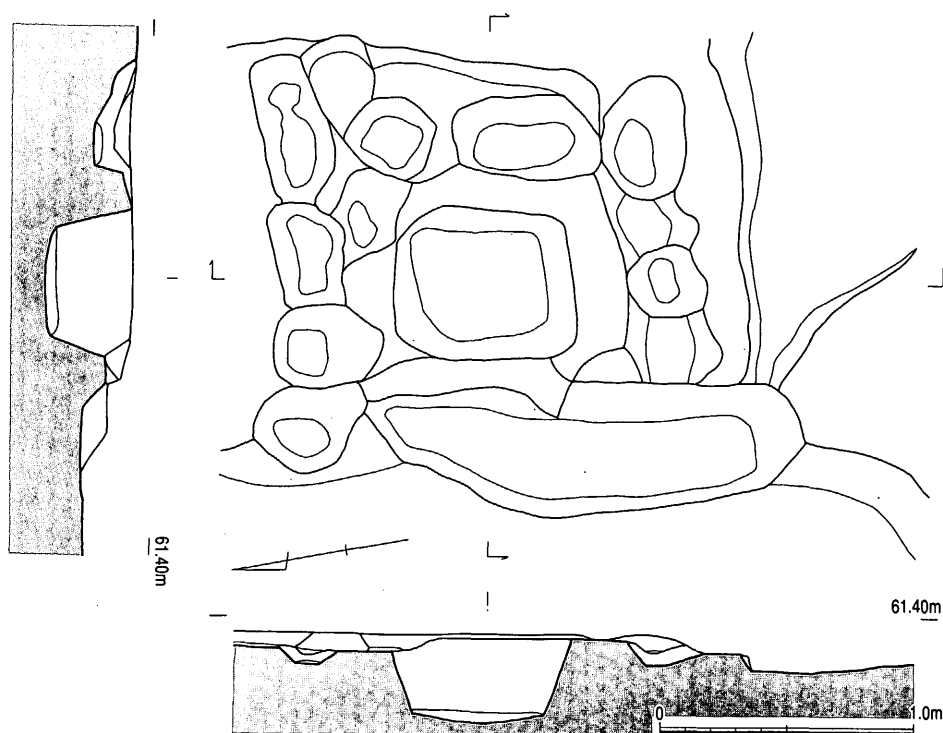


図37. IST015a・b遺構実測図(2) (S=1/30)

組みのほぼ中央には、一辺が0.32mを測る五輪塔の地輪のみが残存しており、本来五輪塔があったものと考えられる。地輪下部には緑色片岩が敷かれており、地輪の根石として置かれたものと考えられる。さらにその下には主体部と考えられる緑色片岩の充填された箇所が検出されている。緑色片岩と緑色片岩の間には骨片が散在している。また、床面のほぼ中央では、南北0.7m、東西0.6mを測る平面形隅丸長方形を呈し、地山検出面から深さ0.35mを測る逆台形状に掘り下げられた土坑を検出している。土坑内の埋土は黒灰色の灰層である。主体部はこの床面まで達しておらず、暗茶褐砂質土を埋めた後、緑色片岩を充填した淡茶色砂質土を埋め、さらに明茶色砂質土で石組内を平滑にしている。その後、前述したように緑色片岩を敷き、地輪を据えている。西側基壇を構成する石組面の方位は、N-13° 21' 37" -Eである。

1ST015c

1ST015の中で最も北側に位置する。1ST015bと同様に外側と内側の二段の基壇を形成しており、外側は、一辺がおよそ1.5mを測る正方形プランを呈し、高さは検出面から0.2mを測る。内側は一辺がおよそ0.9mを測る正方形プランを呈し、高さは0.45mを測る。内側は、南北西側で長さ0.3m～0.55m、幅0.3mの板状の花崗岩角礫を使用し、2個ずつ横方向に並べて立てて組んでいる。東側は、それより小さい長さ0.2m～0.3m、幅0.3mの板状の花崗岩角礫、あるいは、角柱状の花崗岩を横方向に立てて組んでいる。外側は、長さ0.2m～0.6m、幅0.3mの花崗岩角礫を使用し、一辺はそれぞれ3個で組まれている。また、外側は、地山を掘り下げて石組を組み、暗黄茶

『横岳遺跡 -遺構編-』

褐色砂質土により固定し、その上に内側の石を組んで、淡茶灰色砂質土によりさらに固定している。これにより内側の石組の中全体を主体部に見立てている。主体部には、ほぼ中央に中国製の褐釉陶器の壺が蔵骨器として据えられており、その埋土は、骨片を多量に含む淡茶灰土である。蔵骨器は、明茶褐色砂質土→炭化物を多量に含む暗灰褐色土→暗茶白砂質土→茶白砂質土の順で埋められている。蔵骨器の高さから本来、内側の石組みの高さまで埋土が在ったものと考えられるが、現状では削平を受けている。なお、上面には0.1m～0.15mの緑色片岩が全体にみられる。また、地上標識としての五輪塔、石塔等は検出していない。西側基壇を構成する石組面の主軸の方位はN-5° 19' 56" -Eである。

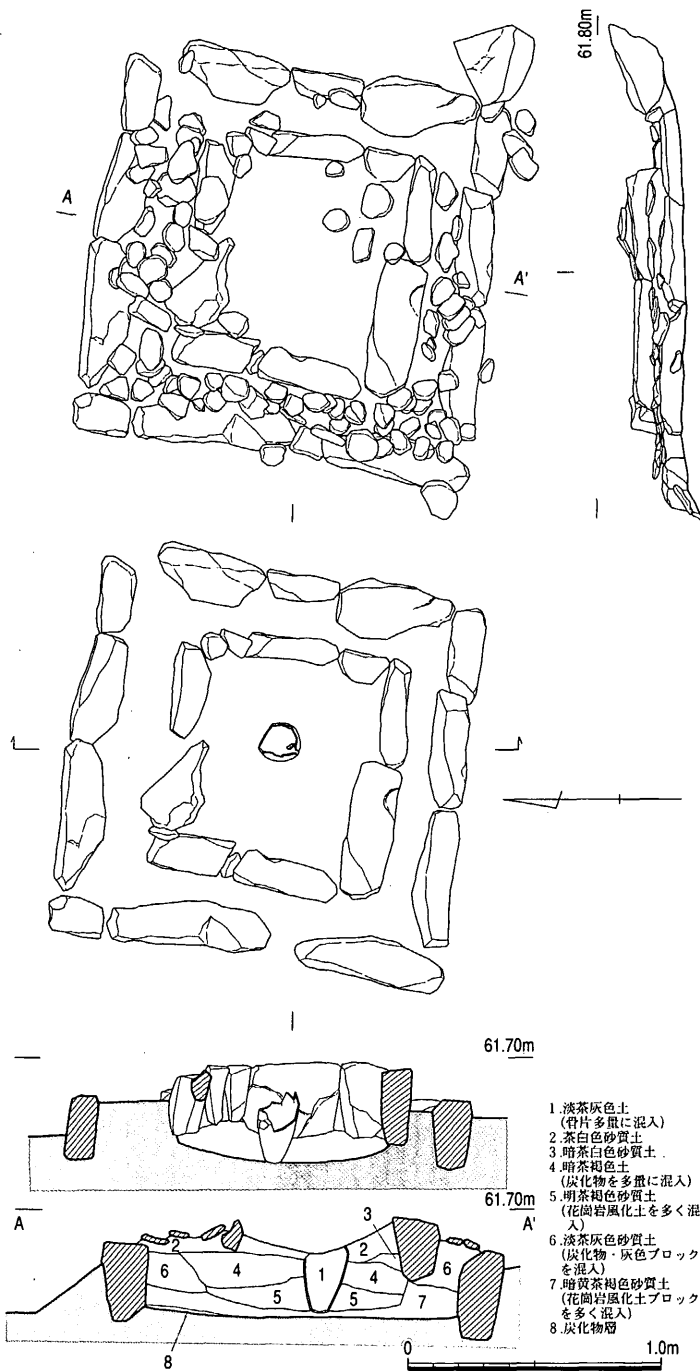


図38.1ST015c遺構実測図(1)(S=1/30)

ある。南北に約1.5m、東西に約1.5mを測る正方形プランを呈し、高さ0.15mを測る。石組は西側で、長さ0.4m、幅0.3mの板状の花崗岩角礫と0.1m～0.2mの垂円礫～角礫の花崗岩とで区画し、東側は0.1mに満たない拳大の礫をランダムに並べて区画している。区画内南側には、花崗岩製

1ST015d

1ST015bと1ST015cの間に位置し、それぞれの北側と南側の石組に連結させたもので

『横岳遺跡 -遺構編-』

の五輪塔の水輪と地輪が残存している。五輪塔下部からは、納骨ピット、骨片等の主体部と考えられる遺構は検出できず、中央よりやや北側で、小礫が充填された中に0.4mを測る亜円礫の花崗岩が検出され、これが主体部になる

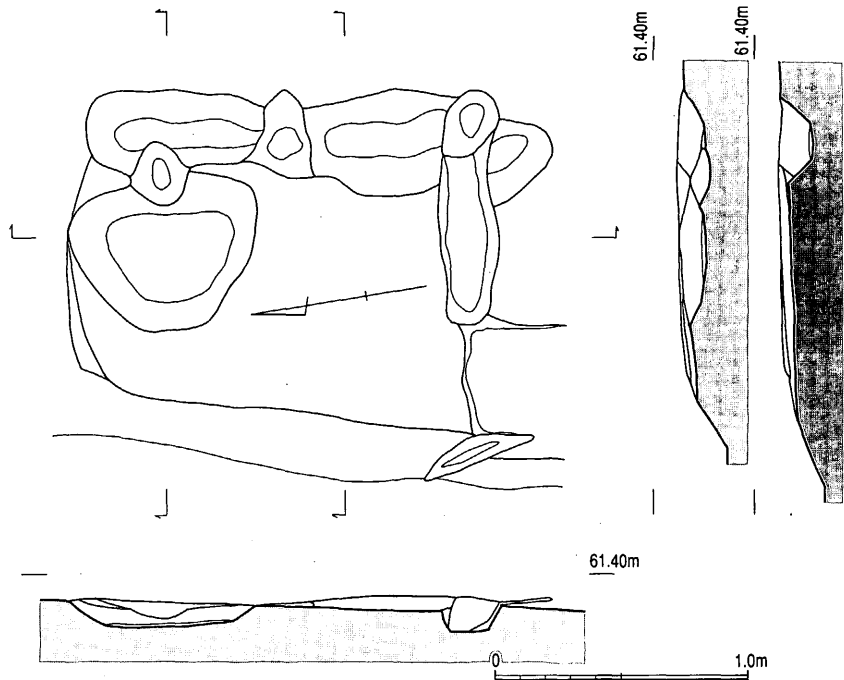


図39.1ST015c遺構実測図(2) (S=1/30)

と考えられる。区画内は、一辺が1.1m、深さ0.2mの隅丸正方形に地山が掘り下げられているが、主体部はこの底まで達していない。埋土は、下部から暗茶色土→主体部の礫を含む灰色砂質土→黄色粘質土→灰茶色砂質土である。さらに上位に黄茶色土が堆積しており、その上部に0.1m～0.15mの緑色片岩が散在している。五輪塔の地輪は、他の地輪の下部にみられる根石としての緑色片岩が認められず、崩壊土と考えられる黄茶色土中に埋没していること、また、主体部との位置関係がずれていることから現位置を保っていないと推定される。

1ST020

1ST015の西側で検出した検出長1.4m、高さ0.2mを測る石列であるが、その西側に0.3m×0.4m、深さ0.1mを測る小穴が確認でき、その中には骨片が充填されていた。このことから一辺が1.5m程度を測る石組墓と推定され、遺構の上面を厚く崩壊土が覆うことから、南北西側の三方が調査区東にある丘陵斜面の崩壊により消失したものと考えられる。

d) その他の遺構

1SX186

1ST020の南側で検出した長軸0.8m、短軸0.6m、深さ0.2mを測る楕円形プランを呈す集石遺構である。礫は楕円形に組まれ、その上部に0.1m～0.2mの亜角礫花崗岩が充填されている。埋土は茶灰色ブロックを含む明茶色砂質土の単一土層で、若干の骨片が認められる。中央よりやや北側の床面には、朱書きで「大」と書かれた完形の天目茶碗が据えられている。遺構の状態が

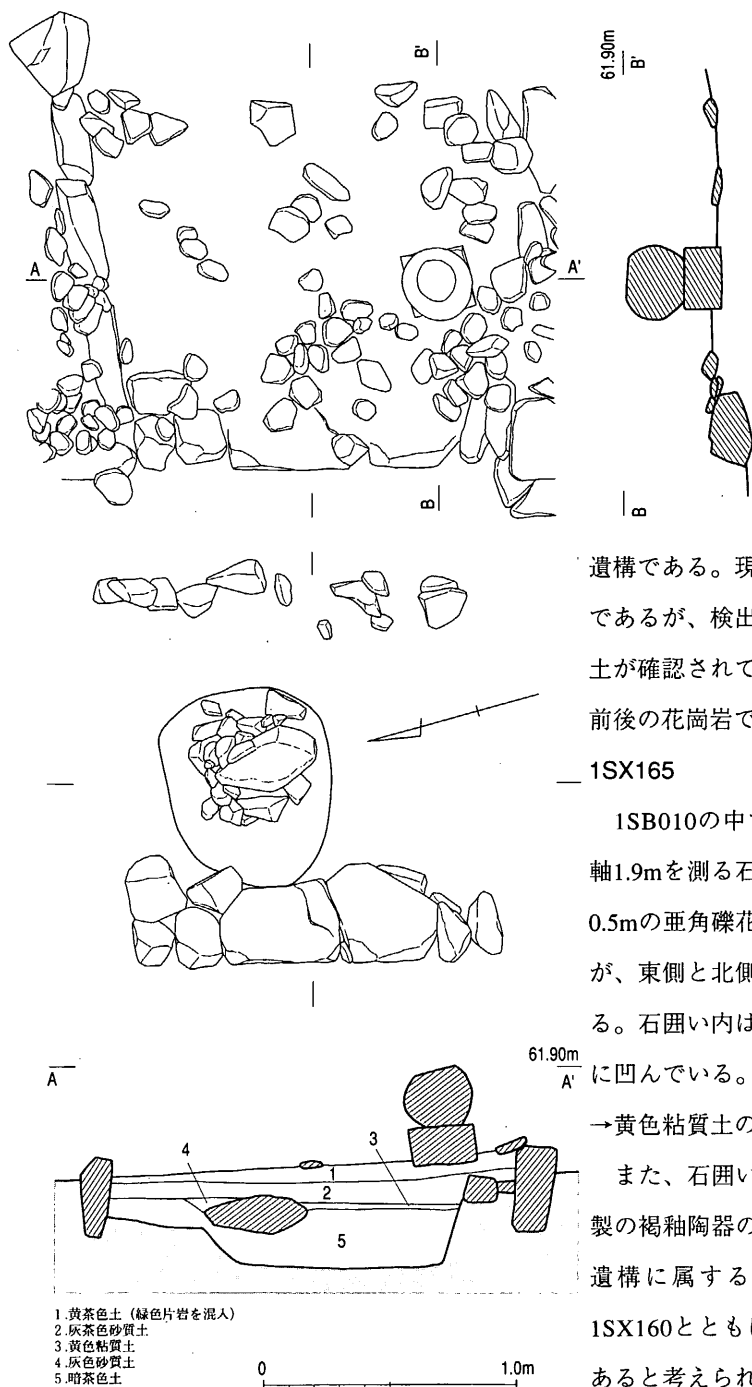


図40.1ST015d遺構実測図 (1) (S=1/30)

a) 墓

1ST200

調査区北側で検出された五輪塔を11基埋納した遺構で、1SB010下位に検出した。遺構は、長軸

『横岳遺跡 -遺構編-』
 ら何らかの施設の主体
 部と考えられ、1ST020
 同様に区画石が本来在
 った可能性があり、斜
 面の崩壊等により消失
 したものと推定され
 る。

1SX160

1SX165内の中央北
 端で検出した常滑産と
 考えられる大甕の埋置

遺構である。現状では底部付近のみの残存
 であるが、検出時に口縁部片、胴部片の出
 土が確認されている。北側と東側は、0.2m
 前後の花崗岩で固定されている。

1SX165

1SB010の中で検出された長軸2.3m、短
 軸1.9mを測る石囲いの遺構である。0.2m～
 0.5mの亜角礫花崗岩で一列に組まれている
 が、東側と北側・西側の一部は消失してい
 る。石囲い内は深さ0.4mを測り、レンズ状
 に凹んでいる。埋土は下部から茶色砂質土
 →黄色粘質土の順に堆積している。

また、石囲いの北東端の外側には、中国
 製の褐釉陶器の壺が埋置されているが、当
 遺構に属するか不明である。先述した
 1SX160とともに1SB010に付帯する施設で
 あると考えられる。

〔遺構II面〕

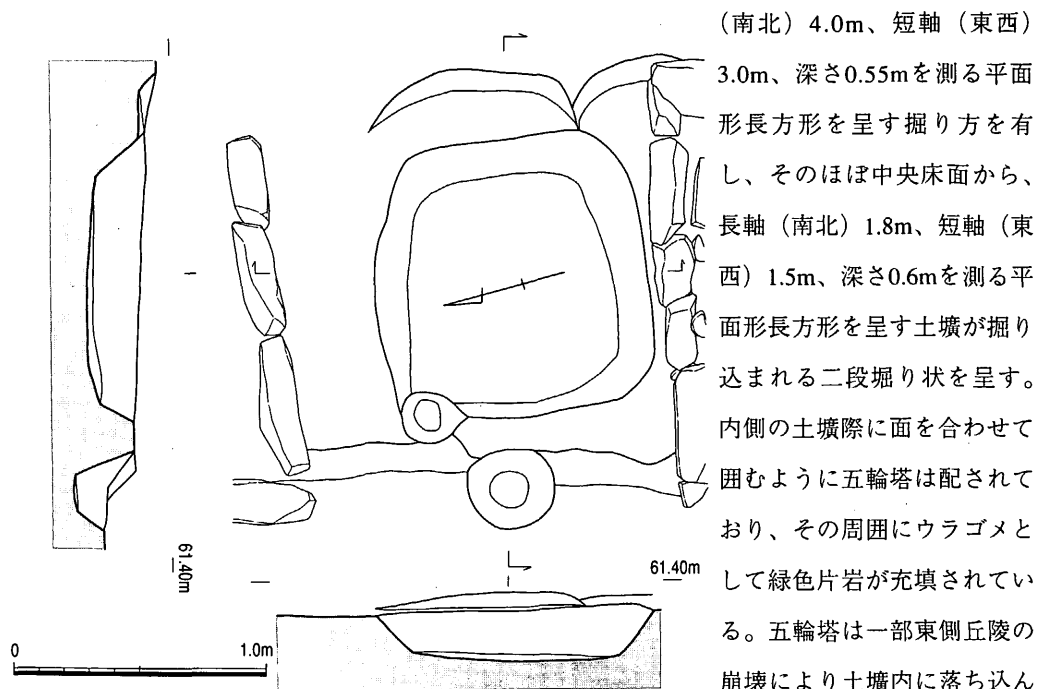


図41.1ST015d遺構実測図 (2) (S=1/30)

て写真撮影を行っている（巻頭写真）。南側には4基の五輪塔があり、火輪・水輪・地輪まで据えられている。西側だけが地輪のみであるが、水輪が東側丘陵の崩壊に伴う土砂の流入により土壌内に落ち込んでいる。また、南北中軸線上にある砂岩製のものは一段地山を整形して据えられており、全体の高さのバランスを考慮したものと考えられる。他は凝灰岩製の五輪塔である。東側には、南から凝灰岩製の水輪・地輪、砂岩製の水輪のみ、砂岩製の地輪のみ、凝灰岩

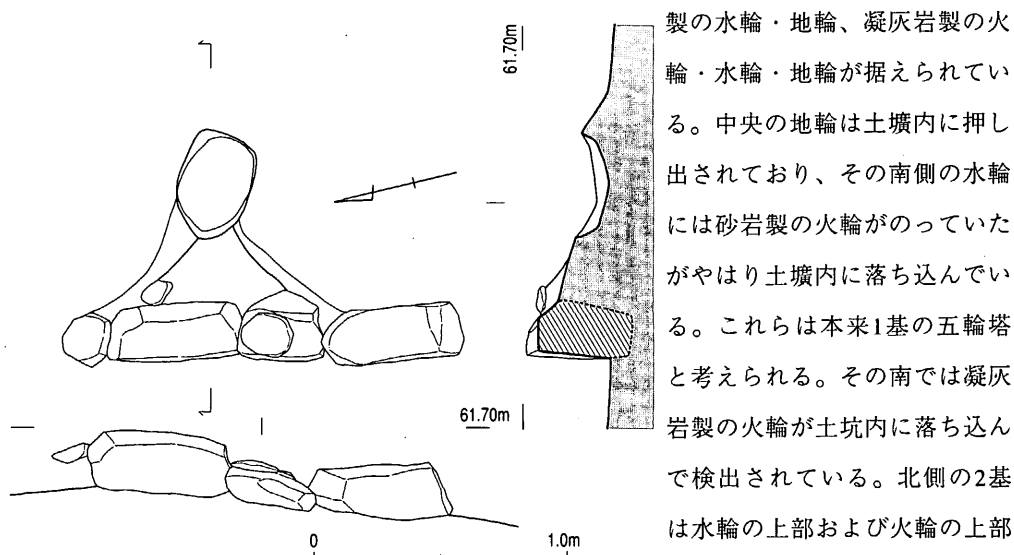


図42.1ST020遺構実測図 (S=1/30)

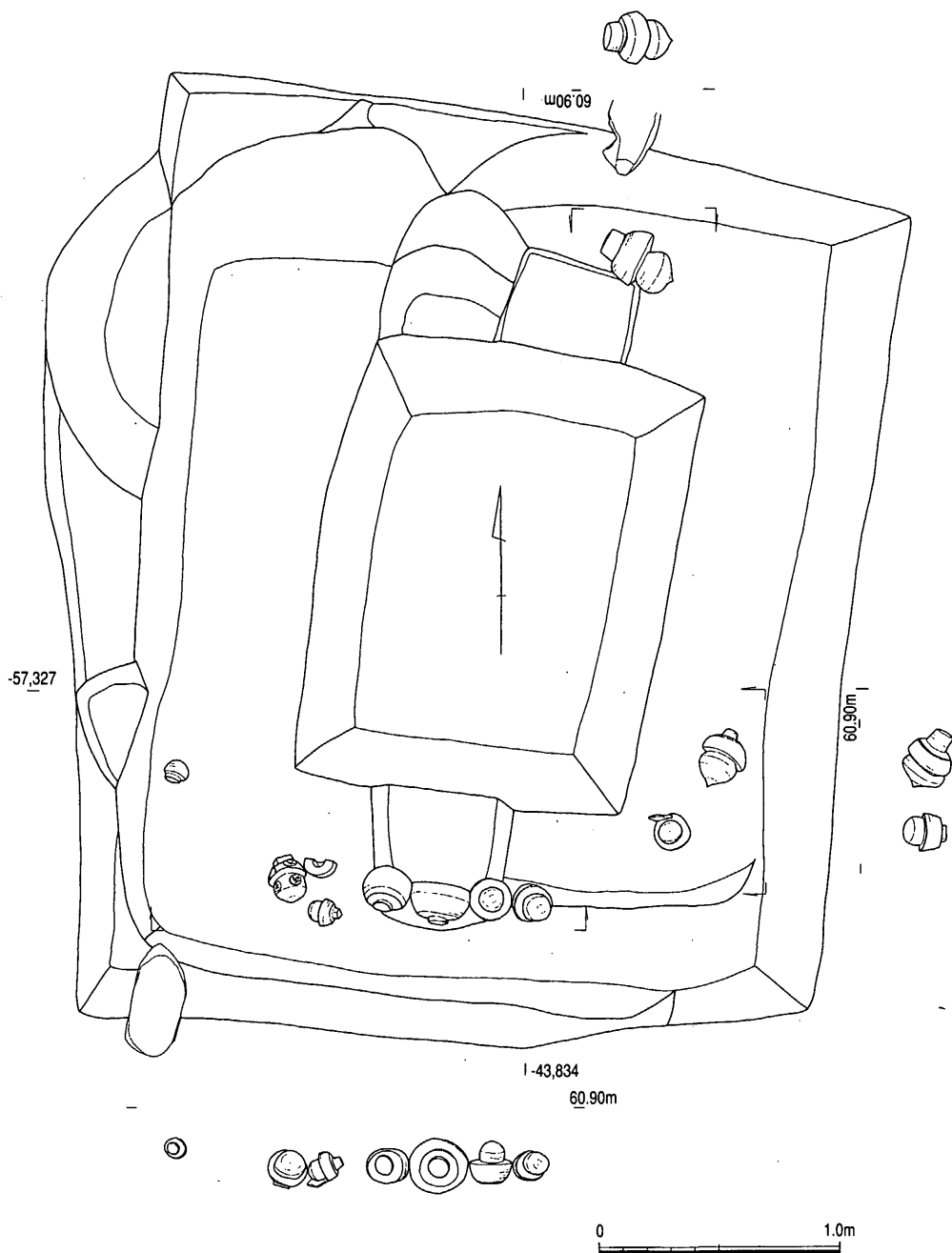


図43.1ST200遺構実測図（1）（S=1/30）

ており、おそらく蓋を意識しているものと考えられる。北側には、東から火輪のみ、空風輪・火輪、水輪・地輪、空風輪・火輪が据えられており、いずれも凝灰岩製である。東側の火輪は立てた状態で据えられている。中央の地輪は1段地山を整形して据えており、その西側の火輪の下部には花崗岩礫が置かれている。これらは高さ調整されたものと考えられ、また、本来1基の五輪塔と考えられる。西側は、北側の隅を花崗岩礫で構築し、それより南に、角礫凝灰岩製の

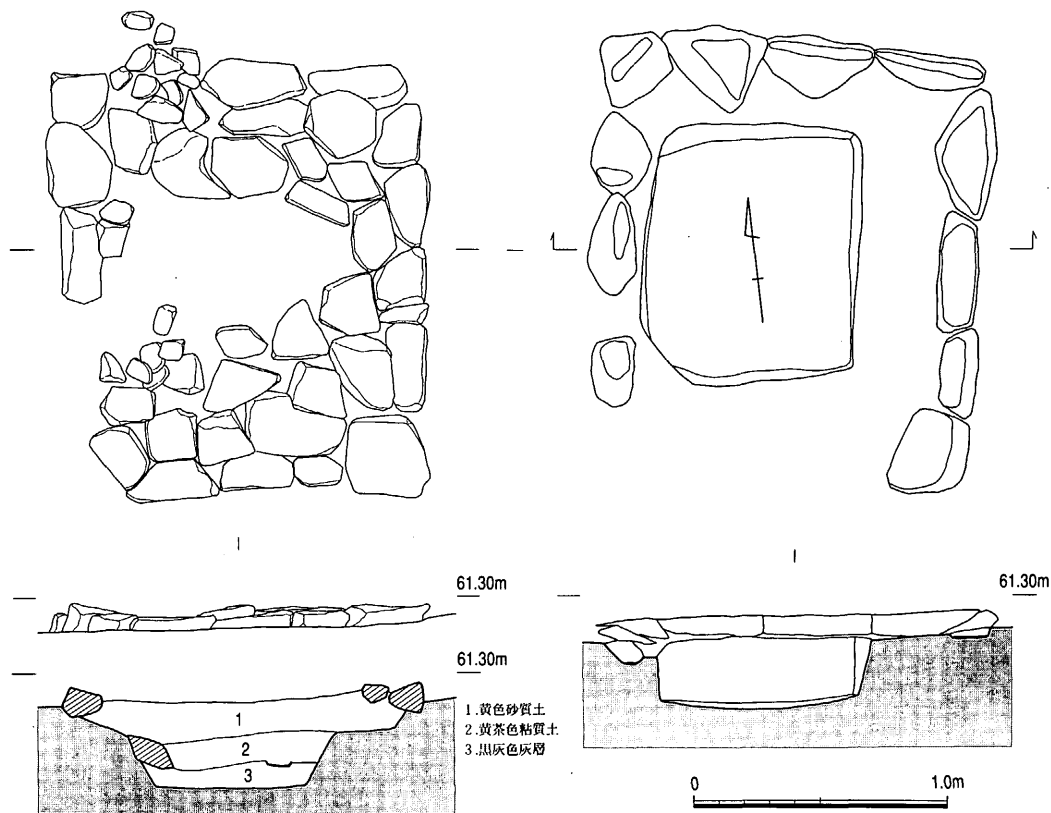


図44.1ST170遺構実測図（1）（S=1/30）

地輪のみ、角礫凝灰岩製の火輪のみ、凝灰岩製の地輪のみ、凝灰岩製の火輪・角礫凝灰岩製の地輪、凝灰岩製の地輪のみが据えられている。南側の火輪は裏面を土壌内に向けて立てられている。その北側の火輪のみ風化が著しく、他の五輪塔全てが、極めて状態の良いものであり、五輪塔に刻まれている梵字には漆を下地として金箔が貼られていた。この北側の地輪には、凝

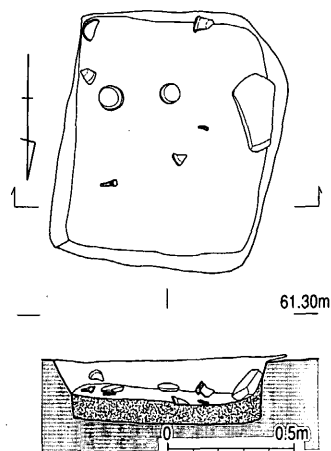


図45.1ST170遺構実測図（2）
（S=1/30）

灰岩製の水輪がのっていたと考えられるが、土壌内に落ち込んで検出された。それより間を1つ空けて北側の地輪は、表を土坑に面して立てて据えている。西側でみられる角礫砂岩製の各部位は本来1基の五輪塔と考えられる。周囲に充填されている緑色片岩を取り除くと、各五輪塔に接して空輪、風輪、空風輪が検出される。南側からは空輪が1点、風輪2点、空風輪4点、東側からは空風輪が2点、北側からは空風輪が1点、西側からは空輪が1点出土している。これら検出された五輪塔の各部位は、上記でも若干触れたが本来1基の五輪塔を構成していたものであり、西側で検出された風化が著しい火輪を除いて、11基の五輪塔で構成されている。西側で検出された風化

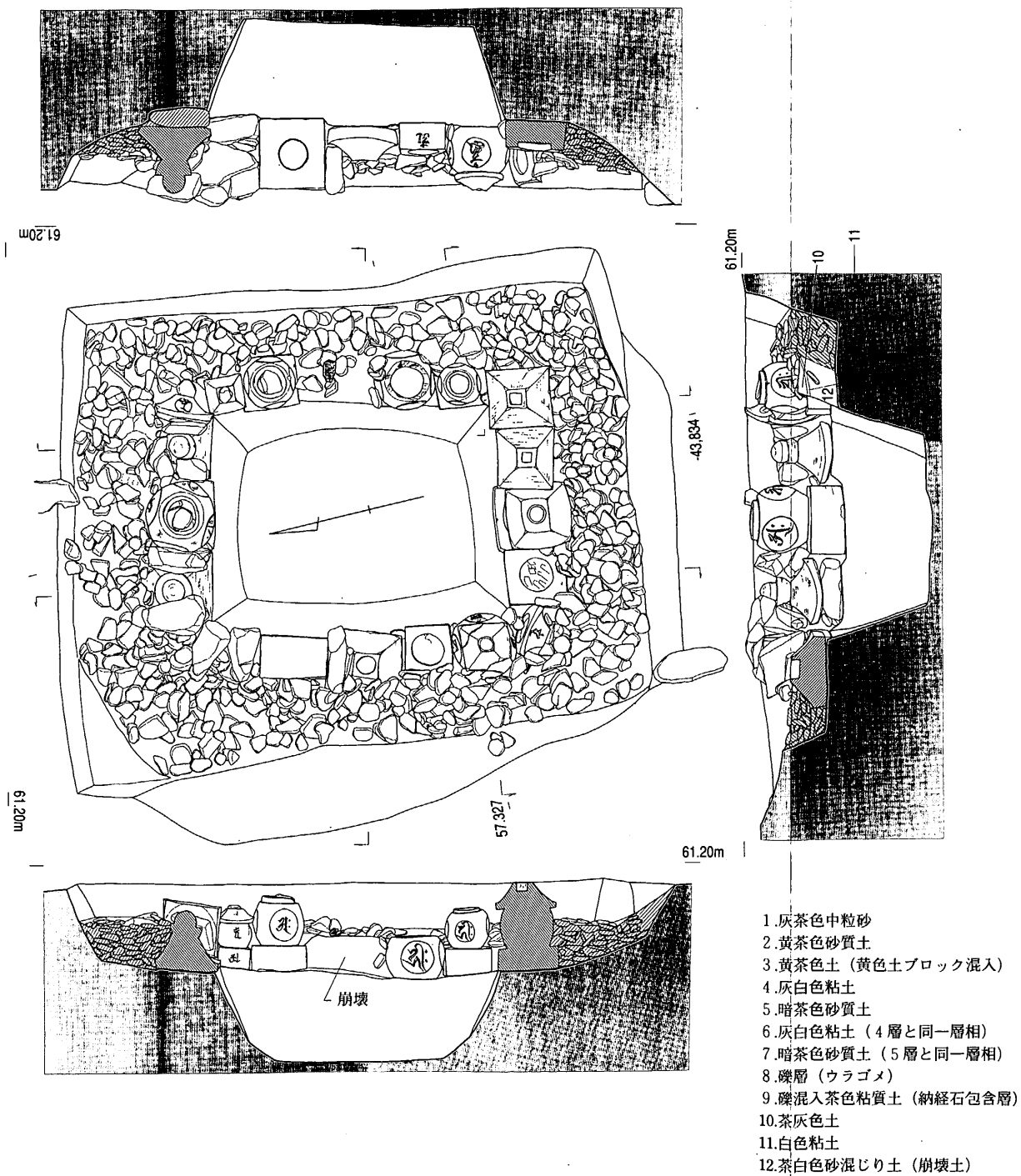
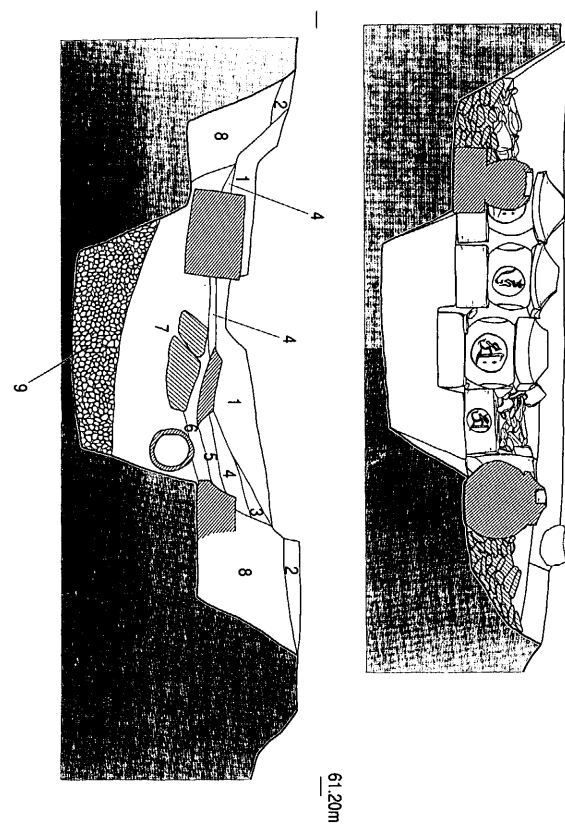


図46.1ST200遺構実測図（2）（S=1/40）

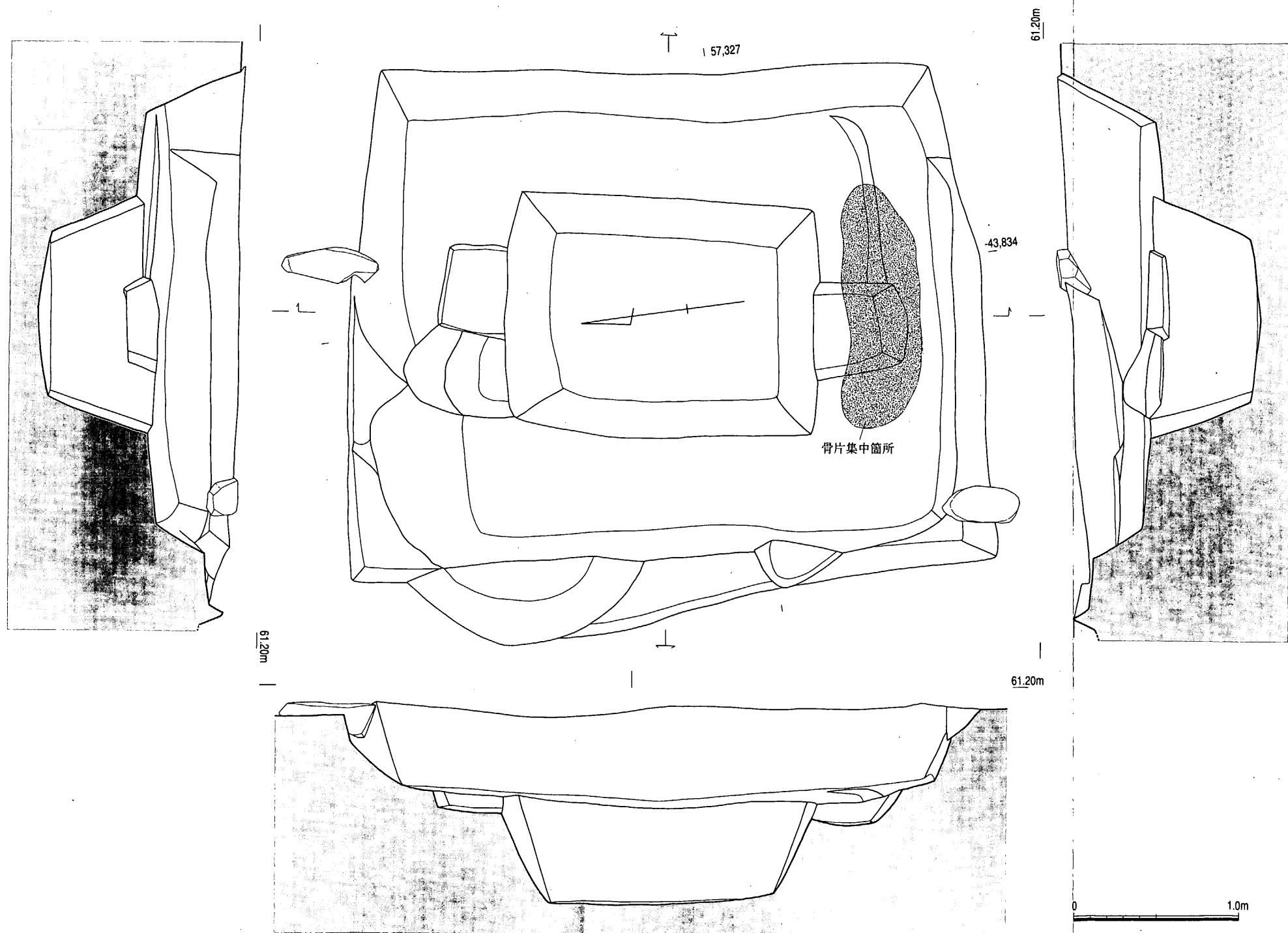


図47.1ST200遺構実測図（3）（S=1/30）

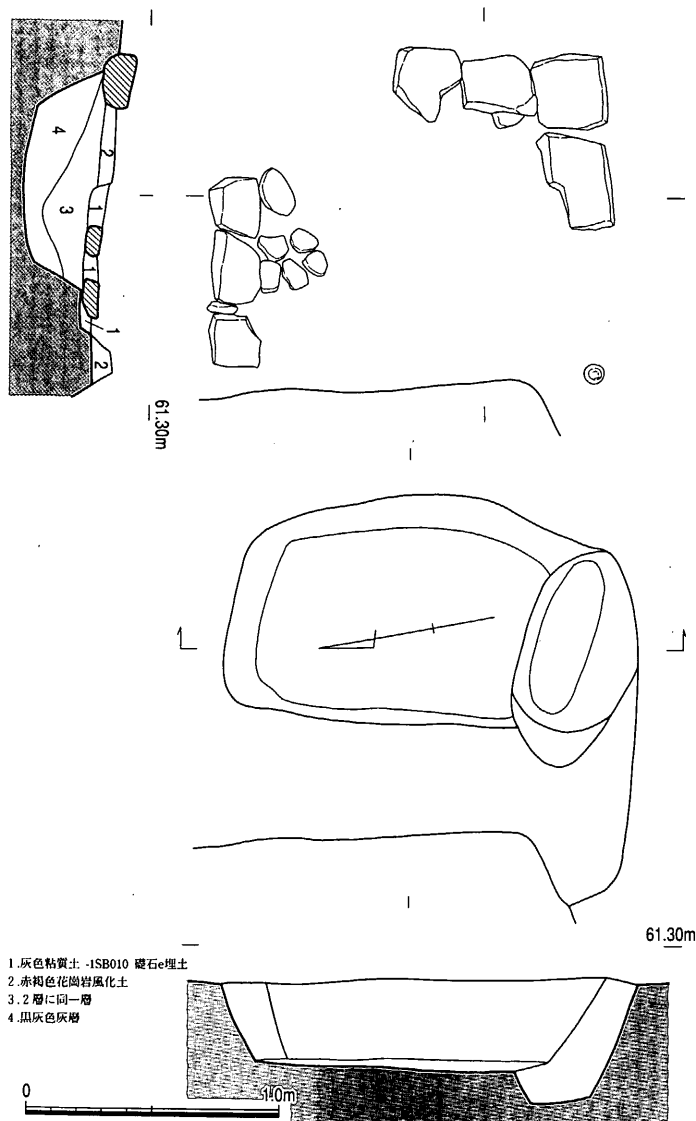


図48.1ST175遺構実測図 (S=1/30)

小さな花崗岩で構築されており、検出面からの高さは0.05mを測る。西側は一部1SD184により削平を受けている。また、これより南は消失している。石組除去後に、土坑、小穴等の下部遺構は検出されなかった。遺構の切り合い関係は、1ST175→1ST190→1SD184である。ただし1ST200と同時併存であったかどうかに関しては、遺構の前後関係がつかめなかったことから、判断し難い。

[遺構III面]

a) 墓

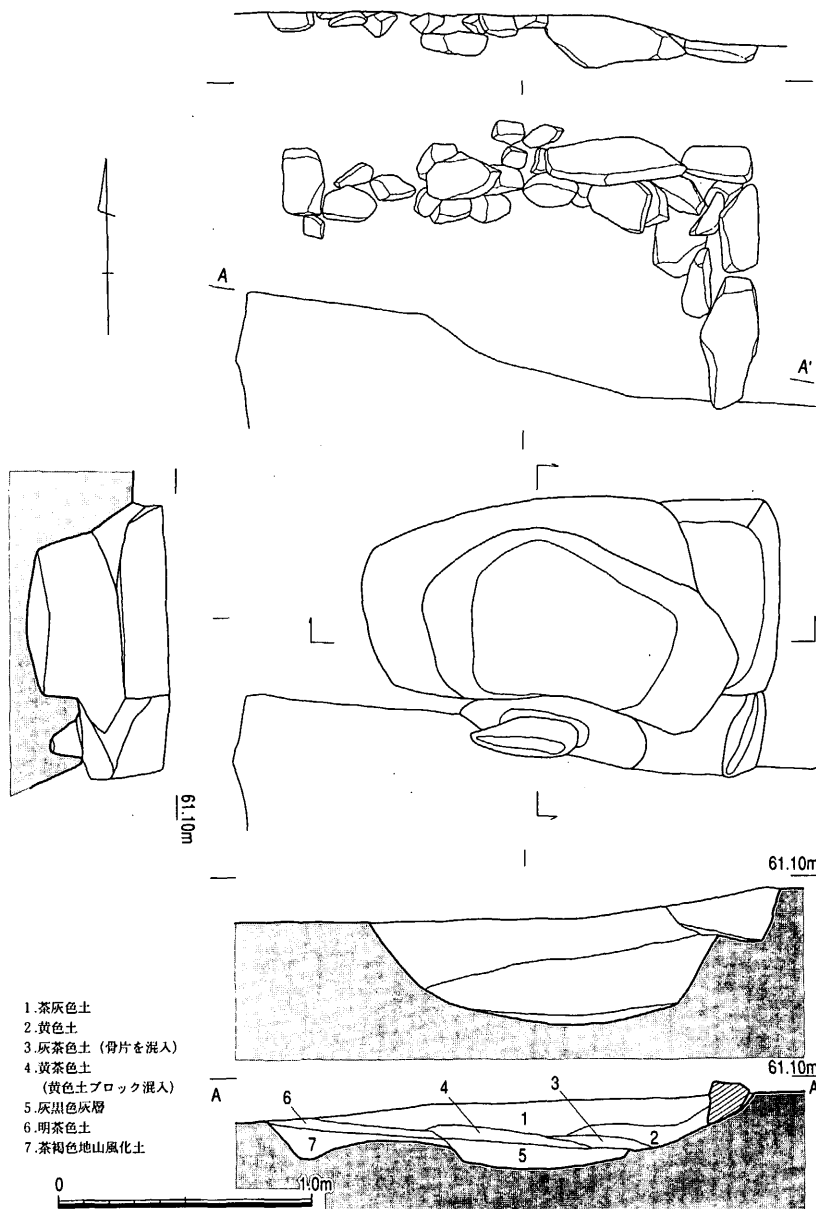
『横岳遺跡 -遺構編-』が著しい火輪は、構築時に流れ込んでいたものを使用したと考えられる。裏込め礫があった箇所には骨片が散見されるが、特に南辺中央部分に集中する傾向があった。

土壌内には下部から、掘り方同様に緑色片岩が検出されるが、北側と南側に厚く中央が凹むように堆積しており、土層観察から南側と北側から投げ入れられた状況が看取された。また、緑色片岩には墨書されたものが多く出土しており、納経石としての可能性が考えられる。

1ST190

1ST175の南側で検出した南北1.4m以上、東西1.0m以上を測る方形プランを呈すと推測される石組をもつ墓である。石組はの北側の一部と、西側の一部のみの残存である。石組は、0.1m～0.2mの小

1ST170



調査区北東端で検出した、南北1.7m、東西1.4m、高さ0.15mを測る長方形プランを呈す石敷の墓である。石敷の東西北側は、外枠のみ地山を掘り下げて配しており、他はその中に敷き詰める状態で置かれている。中央は、抜き取られているが、本来あったものと考えられる。石敷を除去すると、やや西よりに南北1.0m、東西0.8m、深さ0.4mを測る平面形長方形を呈す土坑が検出される。下部には黒

図49.1ST180遺構実測図 (S=1/30)

灰色灰層が約0.1mの高さで埋められており、この上面から土師器小皿a、白磁皿、龍泉窯系青磁小碗・杯、鉄釘が散在するように出土している。これより上位は黄茶色粘質土→黄色砂質土の順に堆積している。東側石敷き面の方位はN-12° 13' 30" -Eである。

1ST175

1ST170の南側で検出した南北1.5m、東西1.2m以上を測る平面形方形プランを呈す石組をもつ墓である。石組はの北側の一部と、南東の一部のみの残存である。石組は、0.2m~0.35mの扁平

『横岳遺跡 -遺構編-』

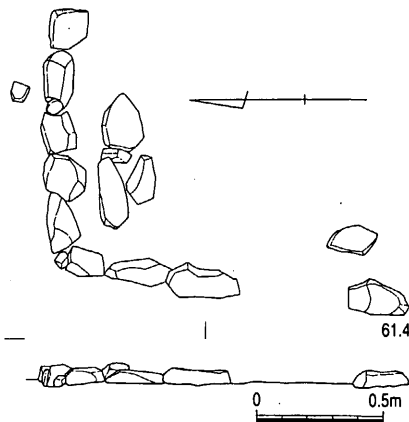


図50.1ST190遺構実測図 (S=1/30)

な花崗岩で地山を掘り下げ構築されており、流失したものと考えられる。また西側は1ST200に切られている。南西端からは、土師器小皿aが逆になった状態で出土している。石組を除去すると、長軸1.6m、短軸0.9m、深さ0.3mを測る平面形長方形を呈す土坑が検出され、さらにその南側を幅0.4m、深さ0.5mに段掘りしている。下部には黒灰色の灰が埋められており、これより上位は赤褐色花崗岩風化土である。土層図にみられる1層は、1SB010礎石cの掘り方である。

1ST180

1ST170の西側で検出した、東西1.8、南北1.0以上を測る方形プランを呈すと推定される石組をもつ墓である。石組はの北側と、北東の一部のみの残存である。石組は、0.2m～0.5mの花崗岩で、地山全体を掘り下げ構築されている。遺構の半分以上は1ST200切られており消失している。石組を除去すると、長軸1.65m、短軸0.8m、深さ0.5mを測る平面形略長方形を呈す段掘り状の土坑が検出される。さらにその中央南側に接して長さ0.4m、幅0.2m、深さ0.2mを測る小穴が検出される。埋土の状況を古いものから記すと、西側で石組構築時の茶褐色地山風化土→明茶色土が確認できる。土坑・小穴内には灰黒色灰層が充填されており、この上位に黄茶土がある。黄茶土の東側にはレベルを同じくして、骨片を含む灰茶土が確認される。これより上位は黄色土→上面に緑色片岩を含む茶灰土である。

1ST205

1ST180の南側で検出した、東西1.9m、南北1.1m以上を測る。石組の南側と、東西の一部のみの残存であり遺構の半分以上は1ST200切られて消失している。残存状況から方形プランを呈すと推定される。石組は、0.4m～0.5mの角柱状の花崗岩で、地山を掘り下げ構築されている。石組除去後に、土坑、小穴等の下部遺構は検出されなかった。埋土は明茶白色砂質土の単一土層であり、その上面には0.05m～0.15mを測る緑色片岩が散在している。また、東側の土層図下部にみられる暗茶白色砂質土は、遺構IV面で検出した1ST230の埋土である。遺物は東西の石組の外側に接して土師器小皿aが正位置で出土している。石組南辺の方位はN-6° 43' 43" -Eである。

1ST210

1ST205の南側で検出した、東西2.0m、南北2.2mを測る方形プランを呈す石組をもつ墓である。石組の上部には、0.1m～0.15mを測る緑色片岩が、幅0.1m～0.35mで同じく方形に配されている。南北西側は石組よりも北側に歪んでいる。石組は、長さ0.25m～0.45m、幅0.2m～0.3mの花崗岩角礫で、地山全体を掘り下げ構築されている。石組のはば中央には、直径0.55m、深さ0.1mを測る略円形の小穴が掘り込まれており、その中には緑色片岩の集石が認められた。埋土は白黄色

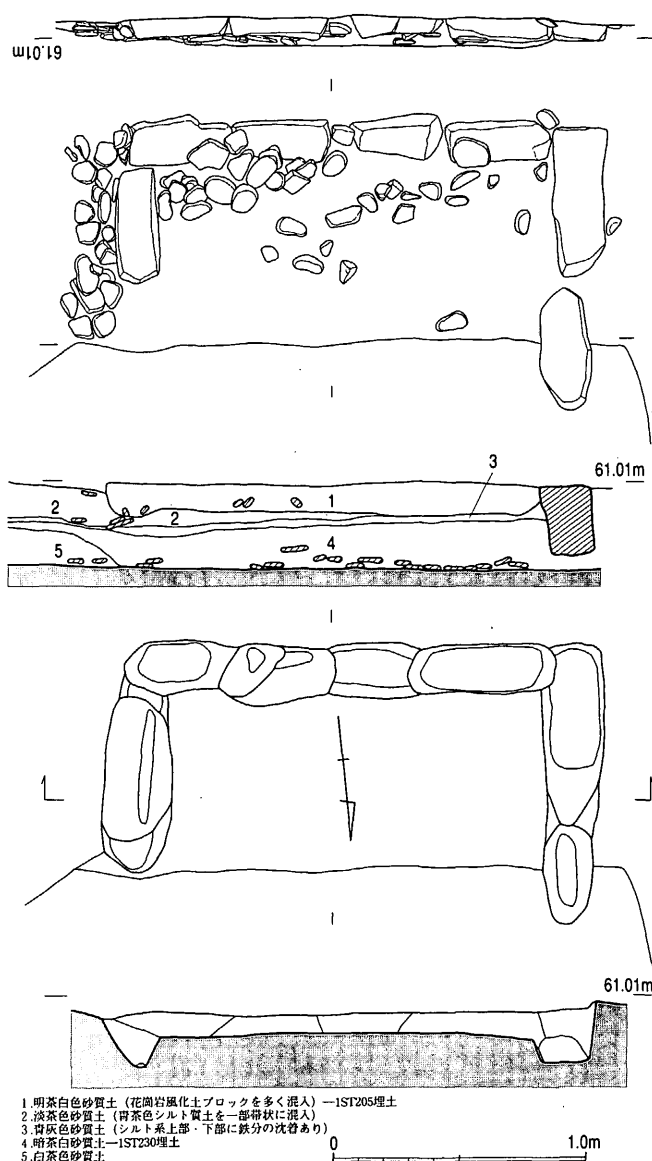


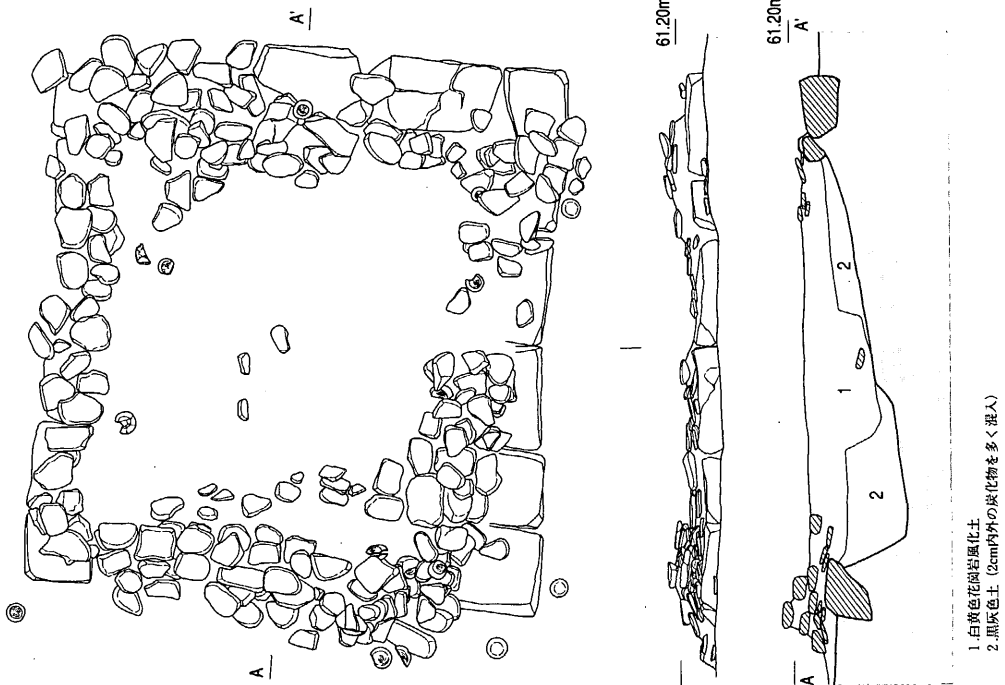
図51.1ST205遺構実測図 (S=1/30)

れている。遺物は土師器小皿aがほとんどであるが、一部に出土レベルに違いがみられ、時間差が想定される。石組西辺の方位はN-3° 8' 53" -Eである。

1ST215

1ST210の南側で検出した、東西2.0m、南北2.4mを測る方形プランを呈す区画石をもつ墓である。区画石は0.1m～0.2mを測る緑色片岩が2列並べて造られており、北西部を一部消失している。区画内には、東西1.4m、南北1.6mを測る平面形方形プランを呈す石敷が検出される。石敷は地山全体を掘り下げ、0.2m～0.3mの亜円礫～角礫よりなる花崗岩を用いて敷き詰めている。一部

花崗岩風化土で、火葬骨は認められなかった。石組を除去すると、北側で長軸0.8m、短軸0.6m、深さ0.3mを測る平面形略長方形を呈する土坑と、その東側で長軸0.8m、短軸0.5m、深さ0.2mを測る平面形略楕円形を呈する土坑が検出される。いずれも埋土は、炭化物を多量に含む黒灰土である。埋土は前述した白黄色花崗岩風化土と黒灰土の上下2層に分層され、黒灰土を充填して平滑にした後に、小穴を掘り込んで白黄色花崗岩風化土を埋めている。遺物は大きく3箇所から出土している。1箇所は、上部の緑色片岩の間、あるいは白黄色花崗岩風化土中からの出土である。土師器の小皿aを中心に、東西南北の石組に近接して出土しており、北側と東側では、方形に配された緑色片岩に墨書するものも各1点出土している。もう1箇所は、黒灰土中からのもので、土師器小皿a、坏a、鉄釘が出土している。もう1箇所は、石組の外側で出土したもので、北側で石組に近接して、正位置もしくは逆位置で供献さ



北側で礫が消失している。区画石、石敷を除去すると、南へ区画を逸脱して、長軸（南北）2.4m、短軸（東西）1.1mを測る平面形略長方形を呈す土坑が検出される。土坑ほぼ中央で分割され、南側で深さ0.2m、北側で0.5mを測る段掘り状を呈す。北側の下部には黒灰色の灰が充填され、南側の下部には炭化物、焼土ブロックを多く含む暗茶褐色土みられる。次に淡茶色砂質土→暗茶色砂質土があり、その上部に石敷を含む茶白色砂質土がある。南側の土坑は全面焼けており、ほぼ中央に0.6mの範囲で硬化面が認められる。焼土層は厚い

図52.1ST210遺構実測図（1）（S=1/30）
ところで0.1m確認しており、漸移的に基盤層に移行している。出土遺物は3箇所で見出している。1箇所は黒灰色灰層の直上から出土した土師器杯a、小皿aと、もう1箇所は、北側の土坑の床面

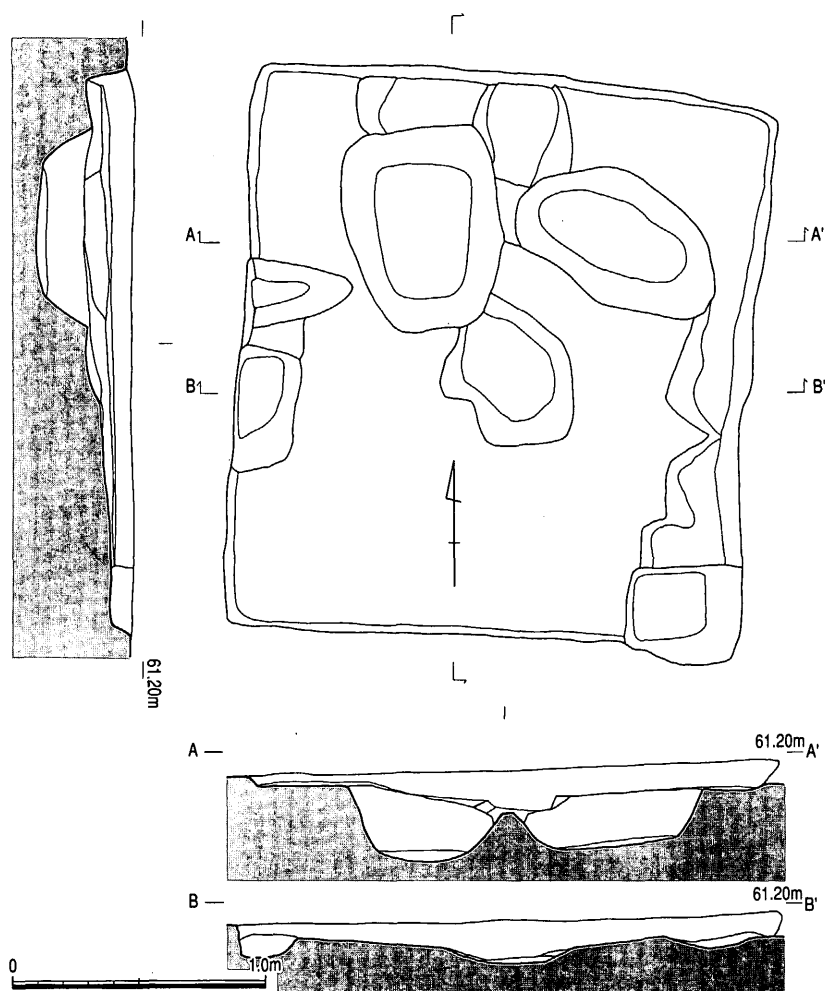


図53.1ST210遺構実測図（2）（S=1/30）

画石をもつ墓である。区画石は0.1m～0.2mを測る緑色片岩を1列に並べて造られているが、北西部を一部消失している。南側の区画石の内側中央には、0.1m～0.2mの花崗岩礫が3個並んでいる。区画内のほぼ中央には、長軸長0.8m、短軸長0.7mを測る円形プランを呈し、深さ0.4を測る断面逆台形を呈す土坑が検出される。埋土は下位から、黒灰色灰層→明茶白色砂質土→淡茶色砂質土→明茶白色砂質土である。土層図にみられる5・6・7層は自然堆積層と考えられる。石組西辺の方位はN-6° 22' 38" -Eである。

b) その他の遺構

1SX225

1ST220の中央南側で検出した長軸0.7m、短軸0.5m、深さ0.1mを測る浅い小土坑である。埋土は明茶色砂質土の単一土層といえるが、上面に薄く茶白色砂質土の崩壊土層が堆積している。埋土内からは土師器の小皿a、坏aが床面から浮いた状態で出土した。1ST220の中軸線上に位

から出土した土師器小皿a、鉄釘である。さらにもう1箇所は、区画石の外側で土師器小皿aが出土したもので、北側と西側で区画石に近接して、正位置もしくは逆位で出土している。石組西辺の方位はN-2° 7' 16" -Eである。

1ST220

1ST215の南側で検出した、東西1.7m、南北2.0mを測る方形プランを呈す区

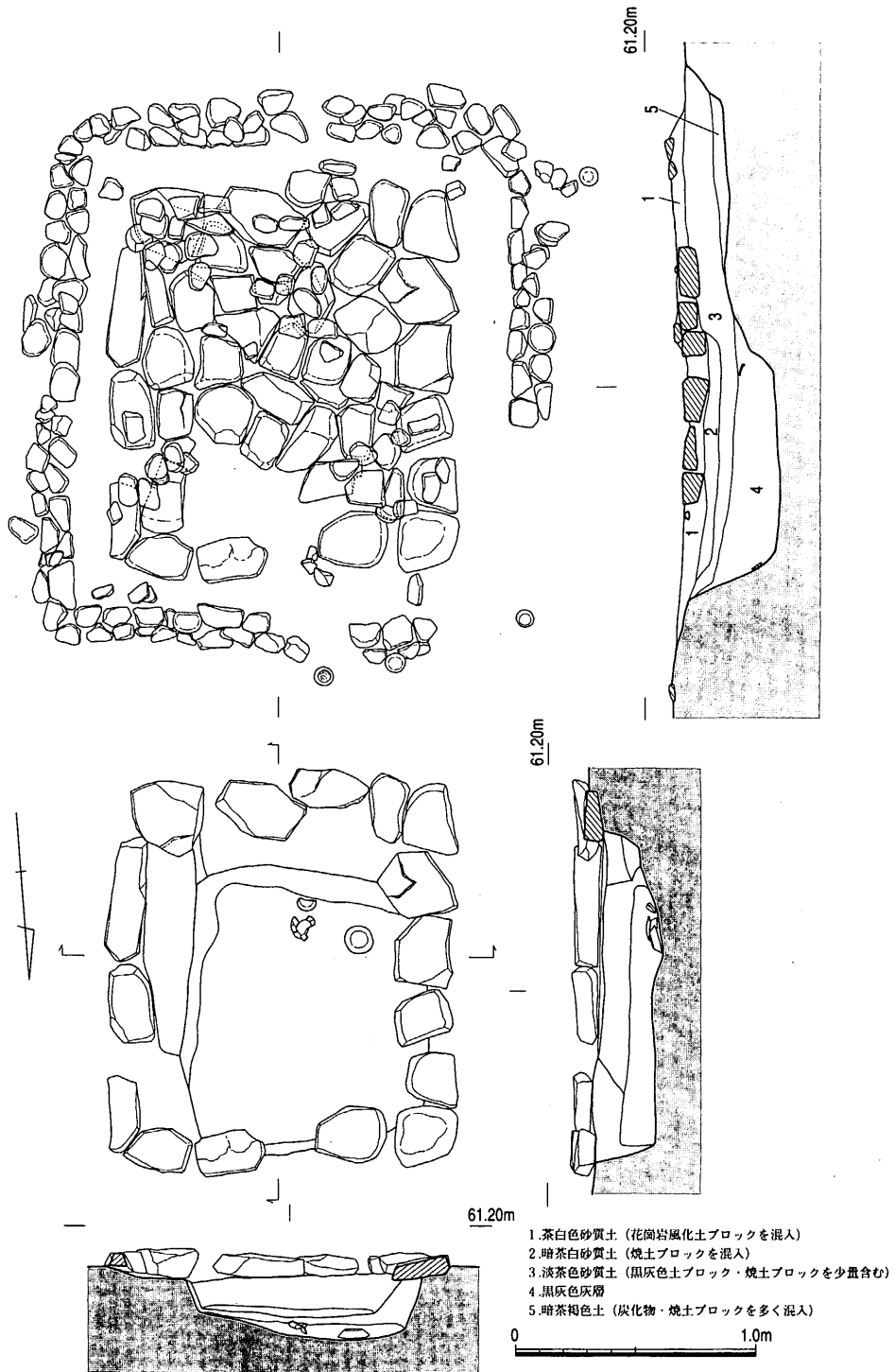


図54.1ST215遺構実測図（1）（S=1/30）

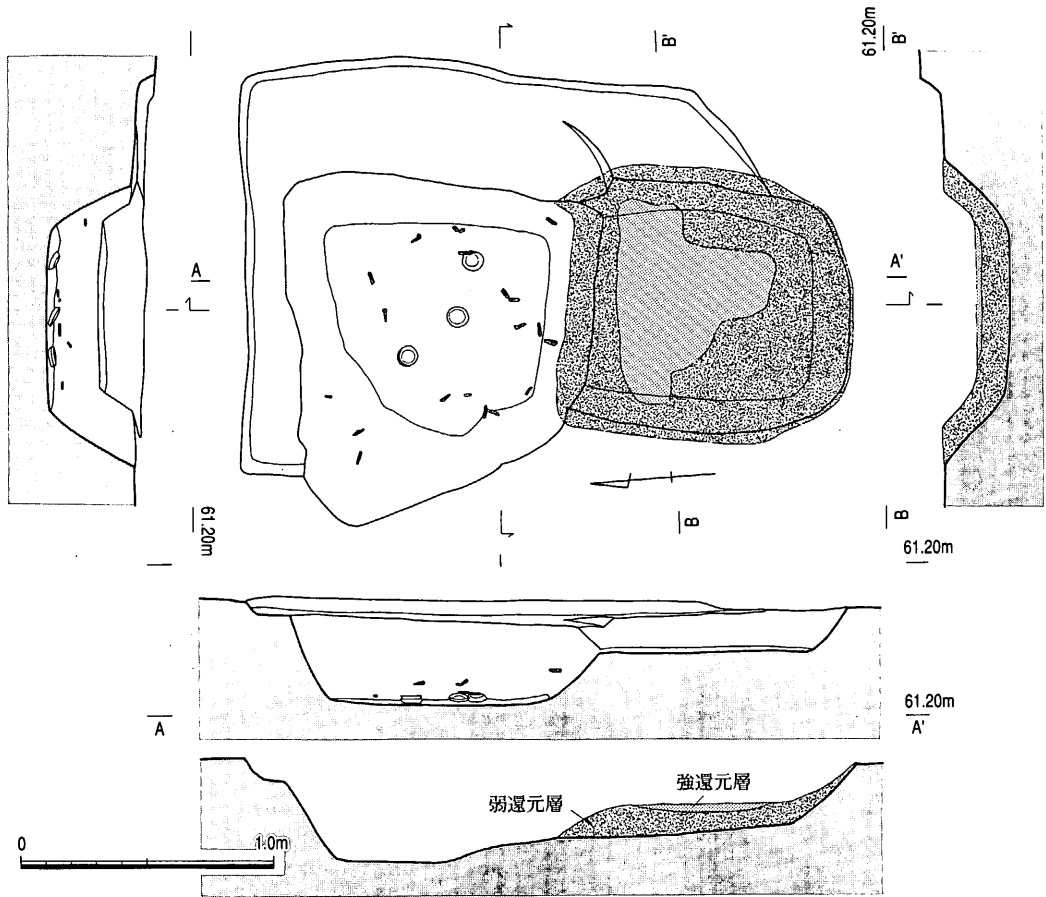


図55.1ST215遺構実測図（2）（S=1/30）

置し関連が想定される。

〔遺構Ⅳ面〕

a) 墓

1ST230

1ST205の下層で検出した、東西2.8m、南北2.8mを測る正方形プランを呈す石敷の墓である。石敷は0.1m～0.2mを測る緑色片岩が敷き詰められて造られている。北側は1ST200により削平を受けている。石敷は一辺が約1.9m、幅約0.4mの範囲で帯状の空間部分が見られ、西側と東側では、その下部からは幅0.15～0.2m、深さ0.1～0.2mの溝状に掘り下げられた遺構を検出している。ここには本来石組が組まれていたと考えられ、帯状の空間は石組の抜き取り跡と推定される。石敷の中ほどには約0.2mの花崗岩角礫が2個、地山に掘り込んで検出され、石敷と平行に東西方向1.0mを測る。この箇所にだけ花崗岩が使用されており、礎石としての可能性考えられる。北側は1ST200により消失しているが、1間が1.0を測る1間×1間の礎石建物が想定される。石敷の下部からは土坑、小穴などは検出していない。埋土は暗茶色砂質土の単一土層である。出土遺

『横岳遺跡 -遺構編-』

物は抜き取り痕から
瓦片が出土している。主軸の方位は
N-7° 25' 41" -Eで
ある。

3. 小結

1) 建物部

a) 遺構I面

1SB075と1SA095
の位置づけ

まず、1SB075は1
間×4間の北側に大
きな底をもつ建物
で、建物としては特
異な構造をしてお

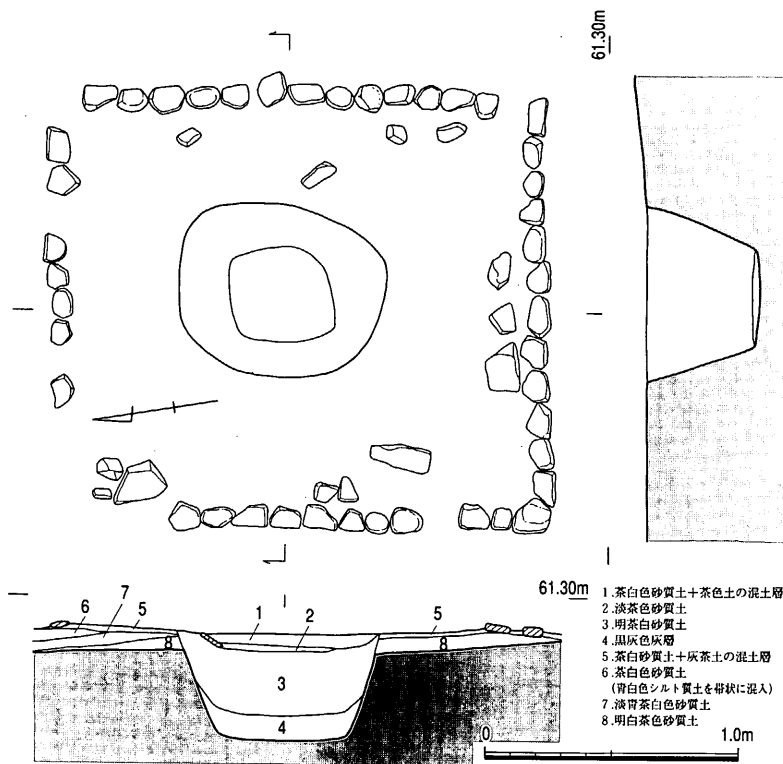


図56.1ST220遺構実測図 (S=1/30)

り、通常の住居とは異なった性格の建物であると考えられる。建物本体が横長であることから馬屋としての性格が考えられるが、1SA095の塀状の遺構によってL字状に北・東側を囲まれていることから別の性格の建物が考えられる。中世に描かれた各種絵図から馬屋が塀により区画されていることも十分に考えられるが、1SA095の柱堀方の規模が大きく、規格性の高いことから別のものを区画していると考えられ、この特異性から現段階では、祭祀的な建物としての可能性が想定される。

次に両者の関係について、1SB075と1SA095の東側と南側の柱穴は、それぞれその延長線上（同一軸線上）に位置し、1SB075柱堀り方mを除いて全ての柱穴が、東西・南北方向ほぼ同一軸線上に位置している。また、1SA095の屈曲部の柱堀り方k・lと1SB075柱堀り方d・h・mは斜め方向にはほぼ同一軸線上に位置している。以上のことからこれらの建物が同一のものである可能性が考えられる。建物としては特異な構造をもつことになり、中世の建築史上このような建物の在り方が可能な今後の課題といえる。

1SB065と1SB100

各建物の柱穴は同一軸線上に並んでおり、1つの建物としての可能性も考えられるが、1SB065の柱間と1SB100の柱間では約0.2m違っており、また、1SB065では西に1間確認していることから報告に記載したように別々の建物と認定できる。

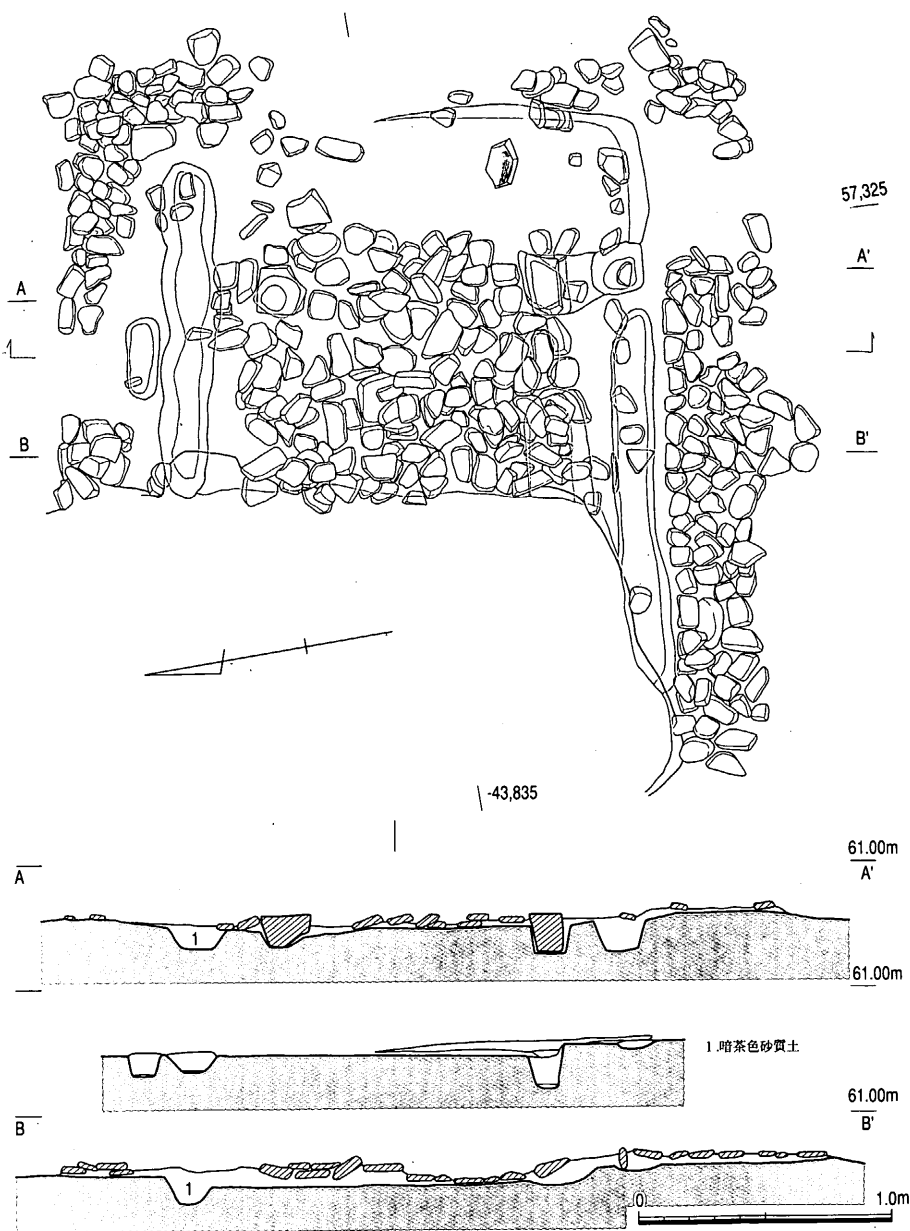


図57.1ST230遺構実測図 (S=1/30)

各建物の関係

検出された建物群は主軸の方位がほぼ一致しており、規格性の高いものといえる。ただ、各建物間が互いに近接して建てられており、同一時に建つことが可能であるかが問題となってくる。しかし、主軸の方位が同じで、各建物の柱穴がそれぞれほぼ同一軸線上にあることから、同時に設計されて建てられたか、軸線を認識できる程の時差の範囲内で建て替えられた可能性はある。今後、どの程度の時差が見込めるかは、遺物から検討する必要がある。

2) その他の遺構

1SX090位置づけ

遺構の性格として、形状・規模から石組の土壌墓が考えられる。石組は北東方向から崩れており、土層観察からも、おおよそ北方向からの崩壊土（明黄褐色砂質土）の流入が認められている。この埋土は、棺内の空間部に入り込んだものと理解でき、その上位の暗灰褐色砂質土は、棺を覆っていた覆土と考えられる。この下部から出土した完形の土師器杯aは、棺の蓋の上に供献されていたものと推定できる。

ただ、石組の南側が、南西の方向に曲がっており、調査時平面プランでは確認できなかったものの、南西の方向に延びる可能性も考えられ、1SK053の遺構の下部にみられた散在する礫との関連が推測される。また、石組自体かなり丁寧に造られており、土壌墓として他に類例を

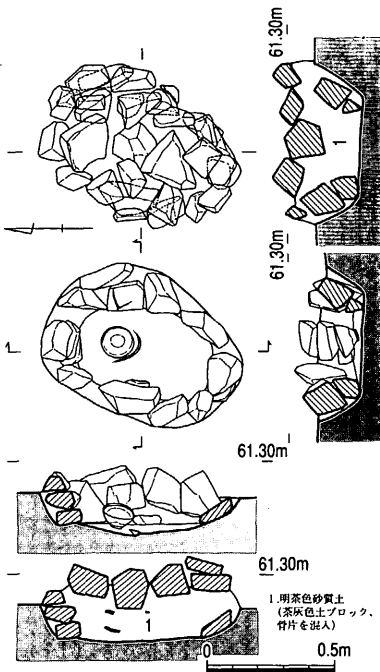


図58.1SX186遺構実測図 (S=1/30)

みないことから、遺構の性格を土壌墓とするよりも、別の性格を想定したほうが、当遺跡全体を考える上では可能性が高い。

建物とその他の遺構の関係

1SB060の正面方向は、南側の縁側部分だけが柱間の間隔が違うことから南側に想定できるが、

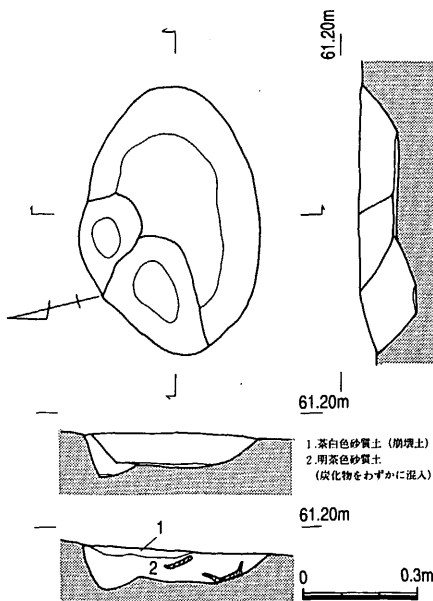


図59.1SX225遺構実測図 (S=1/20)

南には近接して1SA095があり、逆に北側は遺構密度が希薄であり、空閑地が広がっている。このことから北側が正面の可能性が高いと言え、また、1SB060の中軸線上北側には1SX089があり、関連がうかがえる。この1SX089の周囲より北側にはピット群がみられるが、1SB060との間はピットが散見されるものの空閑地となっており、1SB060の正面の可能性を補強している。

1SX089の北側のピット群からさらに北側は、ピットが散見するものの崩壊土等の堆積土が入り乱れた状況にあり、他の検出面に比べて異なった様相を呈していた。遺構検出の困難さから遺構の認識には至っていないが、建物との位置関係からこの場所に庭園の在った可能性が想定でき、前述した1SX090はこれに付帯する

『横岳遺跡 -遺構編-』

遺構の可能性も考えられる。

1SX085は、建物造営に際しての地鎮遺構、あるいはこの地の造成に対する地鎮遺構等の可能性が考えられるが、東側の丘陵裾の基盤層に掘り込んで造られており、また、他の遺構群から離れた場所に位置していることから、それらとの先後関係が不明瞭であり、何に對しての祭祀かは不明である。

b) 遺構II・III・IV面

建物群

遺構II面検出の建物群は主軸の方位がそれぞれ異なっており、時間差が想定され、1SA140が掘立柱建物として完結するならば確実に1SB235との先後関係を想定する必要がある。各建物の柱穴どうしは切り合っておらず、その先後関係は不明であるが、出土した遺物によって解決を図る必要がある。

1SD240位置付け

遺構II面で遺構の南側の肩と一部北側の肩を検出しているが、その埋土に切り込んでII面目の遺構が検出されており、また、掘り下げに伴い下部の堆積土がII面目の遺構検出面下の堆積土に入り込んでいく状況にある。さらに調査区西壁の土層観察からも同様の所見が得られた。このことから当遺構が機能していた生活面はIII面目であると考えられる。また、堆積土の状況から自然流路と考えられ、旧河川として捉えられる。

1SE155・1SK171位置付け

1SD240より下位に検出された1SE155・1SK171は、河川堆積以前の施設で在ることは間違いがないが、河川の堆積土下からの検出であり、IV面目の遺構としての可能性も考えられるが、調査所見から同時性は判断し難く、遺物からの検討が必要となってくる。

その他の遺構

1SK188は1SD240に切られており、IV面目の遺構になる可能性がある。

調査区東側では基盤層に遺構が形成されているため、下位の遺構を掘ってしまった可能性もあるが、生活面が水平であると仮定するならば、同時性は考慮できる。

(2) 墓部

墓の形態

墳墓は各遺構面でそれぞれ異なった様相を呈している。遺構I面は、外部構造に花崗岩礫による石組をもつものである。一辺が約1.5m程度を測る正方形プランを呈すものが多く、二段構造を呈すものもある。最大の特徴として、各石組と石組を連結させて構築していることが挙げられる。下部構造は土壙状に掘り込まれたものが多く、埋土には炭化物層・粗い灰層が認められるものもある。主体部は、蔵骨器のもの・集石のもの・小穴のもの等である。上部構造は残存し

ているもので、全てが五輪塔である。

遺構III面は、外部構造に石組をもつもの・石敷のものがある。石組は花崗岩礫のもの・花崗岩礫と緑色片岩礫のもの・緑色片岩礫のみのものがある。石敷にも花崗岩礫のもの・花崗岩の礫と緑色片岩礫のものがある。花崗岩礫と緑色片岩礫のものは、緑色片岩礫が散在するが花崗岩礫には規則性がみられ、北側に集中する傾向にある。一辺が約1.7m～2.0mを測る正方形プランを呈すもので、丘陵斜面側に規模の小さいものが展開する傾向にあり、地形に制約を受けたものと考えられる。また、最大の特徴として、1つ1つの墓が独立して造られていることが挙げられる。下部構造はほとんどが土壌状に掘り込んでおり、下部に純粋に近いとみられる灰を充填している。また、1ST215については焼成面が確認されている。主体部と考えられるものは、1ST210と1ST180で小穴を確認しているが確証は得られなかった。上部構造については後述するが、全てに五輪塔があったものと推定される。

遺構IV面は、外部構造に緑色片岩による石敷があるもので、一辺が2.8mを測る正方形プランを呈す。内部には、一辺が約1.9mを測る石組をもっていたと考えられる。

以上、各遺構面ごとの形態について概観したが、形態変化についてまとめると以下のようになる。

- ・墓の規模は新しくなるにつれて小さくなる傾向にある。
- ・緑色片岩の利用は古いものほど丁寧である。
- ・墓の区画は古いものは独立しており、新しいものは連結させて造られている。
- ・主体部は、新しいものに明確に認められるが、古いものは不明瞭である。
- ・下部構造の土壌には古いものほど灰のみが充填されている。

これらは遺構面ごとの大きな流れであり、今後遺物の整理と伴に各形態の変化をみる必要がある。

1ST215について

唯一焼成面をもつものであり、同じ規模で段堀された土壌の南側の浅い方で焼成が行われたと考えられる。北側の土壌床面からは完形の土師器小皿a、坏aが出土しており、また、鉄釘が土壌下部の周囲からほぼ方形に出土している。これらの状況から南側の土壌で棺が焼成された後、ある程度、棺が残った状態で北側の一段深くなった土壌に入れ込まれたものと考えられる。その後覆土を入れ、石を敷いている。

1ST190について

遺構の切り合いから1ST175に後出し、1SB010に付随する1SD184により古いことは明らかであるが、1ST200との前後関係が不明であり、出土遺物からの検証が必要となってくる。

『横岳遺跡 -遺構編-』

1ST200と遺構Ⅲ面の墓の関係

1ST200はⅢ面の墓を切って造られていることから、この前後関係は明らかである。Ⅲ面に検出された各墓には主体部と考えられる遺構が存在しておらず、1ST200に埋置された五輪塔の所在を遺構Ⅲ面の墓に求め得る可能性は高いものといえる。五輪塔の水輪内部には骨片が認められ、水輪に蔵骨機能を持たせていたと考えられ、遺構Ⅲ面で検出した墓に主体部が認められなかったのはこのことに起因しているものと考えられる。また、1ST200で検出された五輪塔は11基であり、Ⅲ面にて検出した墓の数は7基であることから調査区外への展開が考えられるが、調査区の北側と東側では丘陵斜面の基盤層が調査区際まで来ており、同一平坦面での展開は考え難い。しかし北側および東側斜面中には平坦面らしきものが認められ（図67）、そこから崩壊してきたものの可能性も考えられる。西側については墓域の境界を示すように、小さな礫の集石列が検出されており、こちらへ展開する可能性は低いものと考えられる。さらに南側への展開は、1ST220の南から緩やかに傾斜しており、崩壊等に伴い消失した可能性は考えられる。

五輪塔の石材のほとんどが黒色細粒凝灰岩であるのに対して、2基は砂岩製であり、1基は角礫凝灰岩製である。これらの石材は、周辺の基盤岩が花崗岩であることから、全て他地域からの搬入によって賄われたものと考えられる（唐木田他、1992）。

1ST200について

上記のとおり、五輪塔はⅢ面にて検出した墓のものと考えられ、丘陵斜面の崩壊で散在したものを1箇所を集めて供養したものと考えられ、段掘りされた内部に納経をするという行為が行われていた可能性がある。ここで問題となってくるのはどのくらいの期間そうした行為が行われていたかであるが、今後、出土した納経石の整理・検証が課題となってくる。ただ、五輪塔の状態が良いことから長期にわたり風雨に晒されていたとは考え難く、短期間の利用で再度起こった丘陵斜面の崩壊で埋まったものと考えられる。

1SB010と1SX160・1SX165について

1SX165は、1SB010の建物内部に略方形に石列が配されたものであり、1SX160はその北側に大甕を埋置したものである。大甕は1SB010の南北方向の中軸線上に据えられており、これらは一連の施設として捉えられる。報告記載のとおり、1SB010の入口は南側に位置しており、建物の奥に大甕が据えられていたことになる。機能としては、建物床下に蔵骨機能を備えた1SX160があったものと推定され、床を一部開放して、納骨行為がなされていたものと推定できる。建物は納骨堂として利用されていたと考えられ、機能上、外から堂内に投げ入れられるようなものではなく、入口から堂内に上がって納骨をしたものと推定される。また、1ST200の性格をも加味するならば、納骨に際して何らかの儀式があったことが考えられる。

1SB010と1ST200の関係

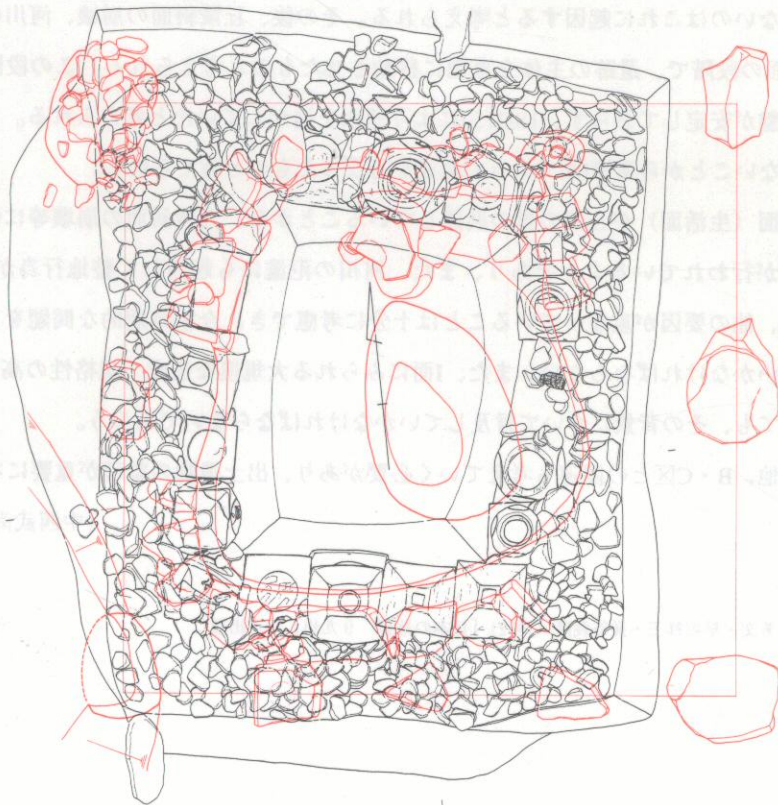


図60.1SB010と1ST200の関係

1SX165の下位にはほぼ同じ規模で、1ST200の五輪塔が配されており、1SB010の建物自体も1ST200の掘方の上位に、規模・主軸の方位をほぼ同じくして建てられている。このことから1ST200を意識して建てられた可能性は極めて高く、1ST200造営時の性格をも踏襲した可能性が強いと考えられる。

墓道の問題

A区とB区には3.8mの高低差があり、B区の墓域に上がるための墓道の存在が考えられたが、直接B区への接続箇所は検出されなかった。1SX050は丘陵斜面を緩い段状にし、切り通し風を呈しているものであるが、調査区内では墓域へは向かっておらず、関連性は判断し難い。墓域への墓道は丘陵斜面の崩壊等で消失した可能性もある。

(3) 遺跡

A区遺構の変遷

A区遺構Ⅲ面以前では1SE155や1SA185の遺構のみの検出であり、Ⅳ面以前の主たる遺構は調査区外の西側に展開していたものと考えられる。その後、河川の氾濫に伴い遺構Ⅲ面の段階で、丘陵斜面側に遺構を展開させてきたと考えられる。しかしこの段階ではまだ遺跡の主体は西側

『横岳遺跡 -遺構編-』

にあったものと考えられる。また、この時北側には河川が流れており、遺構に井戸跡が検出されていないのはこれに起因すると考えられる。その後、丘陵斜面の崩壊、河川の堆積に伴って遺構II面の段階で、遺跡の主体を東側に移動させたものと考えられる。この段階では、北側はまだ地盤が安定しておらず、1SD150により湧水を逃がしていたと考えられる。しかし、地盤が安定しないことから遺構I面で大きく造成を行なったものと考えられる。

遺構面（生活面）が丘陵の裾の展開していることから、丘陵斜面の崩壊等に伴い幾度かの整地行為が行われているようであり、また、河川の氾濫にも起因して整地行為が行われている。しかし、他の要因が重なっていることは十分に考慮でき、今後時期的な問題を含めての変遷を考えていかなければならない。また、I面にみられる大規模な造成・規格性の高い建物群の造営についても、その背景について言及していかなければならないであろう。

この他、B・C区との関連も考えていく必要があり、出土遺物の整理が重要になってくる。

(中西武尚・中島恒次郎)

文献

唐木田芳文・早坂祥三・長谷義隆（1992）『日本の地質 9 九州』共立出版

IV. 成果

1. 調査成果

調査によって得られた成果は大きく、解釈を加える必要性を痛感するが、調査による所見を記載することで、資料提供を目的とした。したがって解釈については、学会の動向に委ねる。

今回の調査によって、これまで礎石建物が横嶽崇福寺を構成する建物と理解されていたが、掘立柱建物も存在していたことが確認できた。また、湿地環境を改善する目的で、大規模な造成がなされるなど、中世後期の土木事業の歴史を考える上でも貴重な成果を得ることができた。これらの遺構が重層的に展開し、かつ面として確認できた成果は大きく、まだ遺物の詳細な検討を経ていないため具体的な時間軸上での位置づけに欠けるものの、今後周辺の調査を行なう上で遺構の展開を考える必要がでてきた。さらに、『横嶽志』に記載されている「開山及歴代諸祖塔散在於東西林麓」の内容を確認するように検出された墓群は、文献記載内容に対して考古事象からの裏付けを得ることができたとともに、ST200のあり方は中世前期後半の墓を考える上で、一つのケースとして上げ得るものとなった。今後は出土した遺物同様に人骨の分析を進め、性別・年齢に関して検討を加えていく必要がある。以下に建物部と墓部にて検出された遺構の前後関係について、検出できた面を基に記載しておく。なお主たる遺構に限っている。またSX085については、基盤層に掘り込む遺構であることから遺物による解釈が必要となるため、() による記載をしている。

建物部

I面 SB060、SB065、SB075、SB100、SE070、SA095、SX090、SX089、(SX085)

II面 SB125、SB140、SB235、SE138、SE145、SD150、SX120

III面 SD240

IV面 SE155、SA185、SK188

墓部

I面 SB010、ST015、ST020、SX186

II面 ST190、ST200

III面 ST170、ST175、ST180、ST205、ST210、ST215、ST220、SX225

IV面 ST230

2. 課題

a. 『横嶽崇福寺伽藍図』と遺跡

今回調査を行なった区域周辺には、字名の他に通称による地名が残存しており、『太宰府横嶽山伽藍図』（以下『伽藍図』と記載）に記載されている各施設ないしは地名と一致するものが見受けられる。また今回検出した大規模な建物群の位置づけについても、現況地形ならびに道

『横岳遺跡 -遺構編-』

路・河川など『伽藍図』にあてはめることが可能ではないかと考えられる箇所も存在しており、今後の調査への課題を示す意味で『伽藍図』と地図について検討を加えてみる。

まず『伽藍図』と現況地形を比較してみる。『伽藍図』には寺の諸施設を取り囲むように山の稜線と考えられる線が描かれており、南が開放していることがうかがえる。これら山の稜線は、大きなもので2条描かれ、寺北東隅に小さい稜線が1条描かれている。この小さい稜線の東側に河川と考えられる2条の平行線が描かれ、この2条の平行線にまたがるように「橋」との記載があることから、河川を意図して描かれていることがわかる。さらにこの「橋」の西には「橋」へ至る道が「行路」として描かれており、「大門」－「山門」－「佛殿」－「法堂」へと続く主たる経路から分岐し、東山裾に展開する各庵への導線として描かれたものと考えられる。

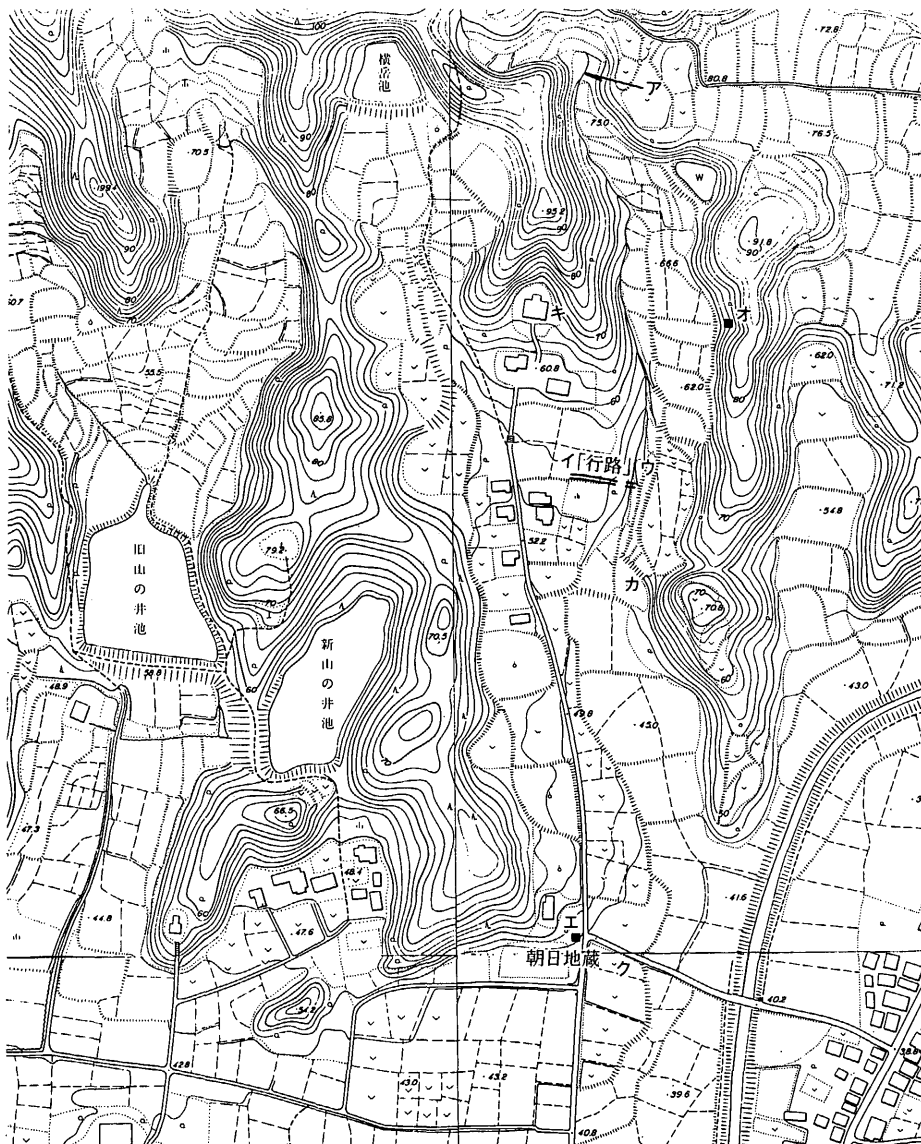


図61.現況と伽藍図に見る地名

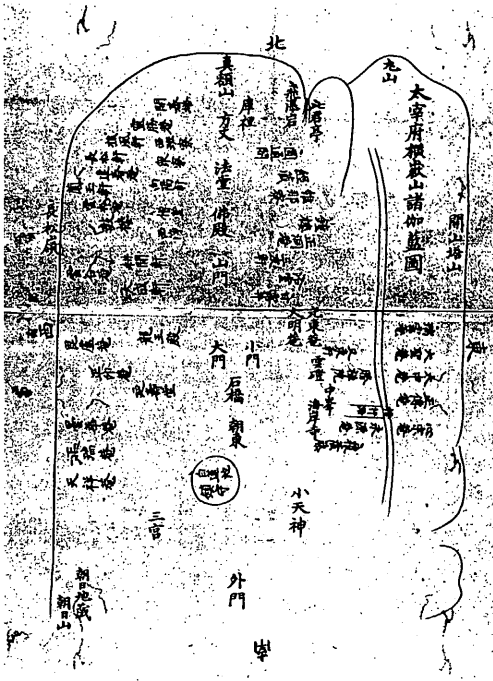


図62.『太宰府横嶽山諸伽藍図』
(福岡市博物館所蔵)

また『伽藍図』に描かれた各文字には三方向から描かれたことが読み取れる。この三方向が何を意味しているのかは決し難いが、描いた者の進入方向を示唆している可能性はある。しかし、「朝日地藏」および「開山塔山」については、主たる施設と同一方向から記載されており、施設の重要度ないしは、基準となる施設を初筆し、その後各施設を進入方向に即して加筆していった可能性も否めない。

さてこれら『伽藍図』に描かれた施設と現況地形に残された地形情報を比較してみる。しかしここで問題がある。現況地形は既に宅地造成を受け、その大半が欠失してしまっている。したがって欠失した箇所については、昭和23年に撮影された航空写真に基づいて図化された旧地形図を頼るほか術がない。残存する箇所につい

ては、地形観察および現況での利用のされ方によって『伽藍図』との比較を試みた。

・河川

調査区西に隣接して、四王寺山から南へ流れる河川が1条存在しており、この河川を『伽藍図』に記載された2条の線によって描かれた河川と考えても大過ないものとする（図61-ア）。この河川の東側にやはり開山塔である須弥壇座無縫塔が存在していることから傍証できる。

・「行路」

河川については先述したが、現存する小道が1条残存しており、『伽藍図』に記載されているとおりに「橋」と組になって、先述した河川を横断している（図61-イ・ウ）。

・「朝日地藏」と「開山塔山」

両者とも現在も残っており、「朝日地藏」については地域の信仰の対象として、蠟燭、線香の火が今も絶えることが無い（図61-エ・オ）。

・地形情報

『伽藍図』に記載された地形に関する情報は、山の稜線、河川、道、などで、具体的な山の名前が記載されているものの、現存する山の名前とは異なっていることから、特定できない。しかし、旧地形図には河川による段丘崖とは考え難い複数の挟り込みが観察でき、特に西側丘陵に顕著に見受けられ、4箇所ほど確認できる。『伽藍図』には、東側丘陵よりは西側丘陵への

『横岳遺跡 -遺構編-』

施設の書き込みが多く、これら諸施設造営のために自然地形が改変された結果である可能性が高い。また、残存する道路も、『伽藍図』に記載されているような主たる道路である二方向に分岐しており、先述した「行路」を付加すると三方向に分岐していたということになる。

・地名（通称）および鐘樓の礎石

開発対象地の地権者であった木村栄氏から、今回調査を行なった区域の南側（図61ーカ）に「小天神（こてんじん）」と呼称していた箇所があるとの御教示をいただいた。また現在、「鐘樓」の礎石が残存している箇所（図61ーキ）があり、この礎石のある箇所の南を「正洞庵」と呼称しているとの御教示も合わせて得た。さらに、先述した「朝日地蔵」が所在している箇所（図61ーク）から南側を、「門外（もんのほか）」と呼称していたとのことであった。この「門外」の門は、『伽藍図』記載の「外門」と考えられ、門の存否については検討する余地はあるものの、「門外」と呼称されていたことを考えると、この地域周辺に寺域と外界を遮断する何らかの施設が存在していた可能性がある。

以上の各要素を考え、旧地形図上に『伽藍図』に記載されている諸施設を付加すると、図63ようになる。これはあくまで推定であり、今後残存する箇所について検証をしていく必要は十分ある。

なお『伽藍図』に記載されている「行路」の南東側には、「心宗庵」のみが描かれており、現在想定している図61に記載した「行路」がイ箇所であるということが作業前提になるものの、今回調査によって検出した建物群が、この「心宗庵」である可能性が極めて高い。

b.調査に関わる課題

遺構

宅地造成によって失われた地形は多く、どれほどの遺構が残存しているかは心許無いが、前項目にて推定復原した伽藍図に基づき周辺の開発行為については、試掘調査による遺構規模の確認を実施していく必要はある。また東側丘陵北部および西側丘陵南部は、今だ残存しており、『横嶽志』記載の「開山及歴代諸祖塔散在於東西林麓」を考えると、墓域が展開している可能性は極めて高いといえる。

調査によって得られた墓群以外に、調査区のほぼ2/3を覆っていた丘陵崩壊土と考えられる花崗岩風化土中に、蔵骨器および五輪塔部品が数多く包含されており、調査区東側に伸びる丘陵斜面および丘陵頂部に墓域が展開していた可能性は、十分想定することは可能である。この東側の丘陵頂部には現存する墓で近世からの墓石が散在しており、現在も墓域として利用されている（図69：付図）。また横嶽崇福寺の西に隣接する金光寺跡では、丘陵斜面部に墓とともに火葬施設が検出されており、斜面部の調査によってこの火葬施設の確認も想定できる。今回の調査では、火葬施設として考えられる遺構はST215下位に検出した焼成土壌のみであったが、各

『横岳遺跡 -遺構編-』

墓に付帯する土壌内には、灰が埋置され、水輪中に埋納された火葬骨の存在から、火葬施設の存在も十分想定可能である。したがって、東側斜面を含めて火葬箇所の特定が今後の課題の一つになる。

ST200の形成された物理的理由については、報告の中で記載してきた。しかし、葬送儀礼を司る宗教的な背景については現状では推論の域を出ないため記述しないが、ST200内部の土壌から出土した墨書円礫の釈読を含めて考えていく必要がある。

建物部分については、建て替えおよび造成の繰り返しによって造営されており、建物の配置を含めた造成理由の解釈が必要となってくる。また金光寺跡で顕著であった排水施設が、今回の調査区内では顕著では無かった点、また瓦の出土が希少であった点など、同時代に並存した両者の寺に違いが見受けられる。最終面であるI面を除くと、常に蛇行する自然流路に沿って施設が展開しており、この自然流路が排水施設の役割を担っていたものと解釈することも可能である。しかし反面自然災害とは隣り合わせの危険な状態であったことも考えられ、この危険と隣り合わせの状況を回避するために、約1.5mもの造成をかけ地上げを敢行し、施設基盤の安定化を図ったものと考えられる。この安定化を図った後の排水施設の希薄さについては、金光寺との自然環境の違いと捉えるのか、安定化を図った造成土が河川側へ斜めに傾斜する版築工法であることから、水掃けを意図した構造になっていたためとも考えられ、排水施設に関する課題を残す結果となった。さらに造成のきっかけになったと考えられる事象として、調査区の約2/3を覆うような調査区東側丘陵の崩壊土があり、過去頻繁に繰り返えられる自然崩壊現象を回避するだけではなく、崩壊土の活用を意図した造成計画であった可能性もある。しかし単に崩壊土を均すだけの造成ではなかった点に、先述した排水を意図した可能性もあり、土木工学的な視点からの解釈を加えていく必要性はある。

また遺構I面には、炭化物が散在するように検出され、文献に残る天正十四年の薩摩島津氏の岩屋攻めに伴う兵火によって焼失した際の炭化物である可能性がある。しかし遺物の時間軸上での位置づけを未考察であるため、確定するには至っていない。したがって、遺物による解釈を加えた上で考察を加える必要がある。

さらに今回調査によって明らかになった建物群の性格を、前項にて「心宗庵」と推定したが、この「心宗庵」については『横嶽志』に「大燈國師塔曰心宗庵」と記載されており、今回の調査では明確にこの「大燈國師塔」にあたる遺構を確認していない。したがって東側の丘陵部分を含めて、今後の課題を残す結果となった。さらにどのような要素をもって、この「大燈國師塔」とするに足るのか、根拠の立案が必要となる。

遺物

選別作業および記録作成作業を実施したのみであり、今後は実測作業を経て図化記録作業が

残る。したがって、客観化された資料の開示ができないため、ここでは課題を明確に抽出できないが、遺構の項でも記載したように、瓦の出土が極めて希薄な状況であったことが上げられる。したがって、今回の調査にて検出した各建物には瓦を葺く建物はなかった可能性が高い。これを傍証するように全て掘立柱建物であり、根石を欠く柱穴があるなど、重量物を支える機能が想定できない。

また金光寺では、各種仏具ないしは宗教色の強い遺物の出土が見られたが、今回の調査では青白磁製の土手が出土したのみで宗教色の強い遺物の出土は顕著ではなかった。これは先述した「庵」としての生活空間であったことに起因する可能性が高く、今後周辺で出土した遺物との比較によって明らかになっていくと考えられる。

遺物の帰属年代についても、現在大宰府で用いられている食器相では理解できないものが多くを占めており、これら遺物の解釈を行なうための食器相説明をなす必要がある。

(中島恒次郎)

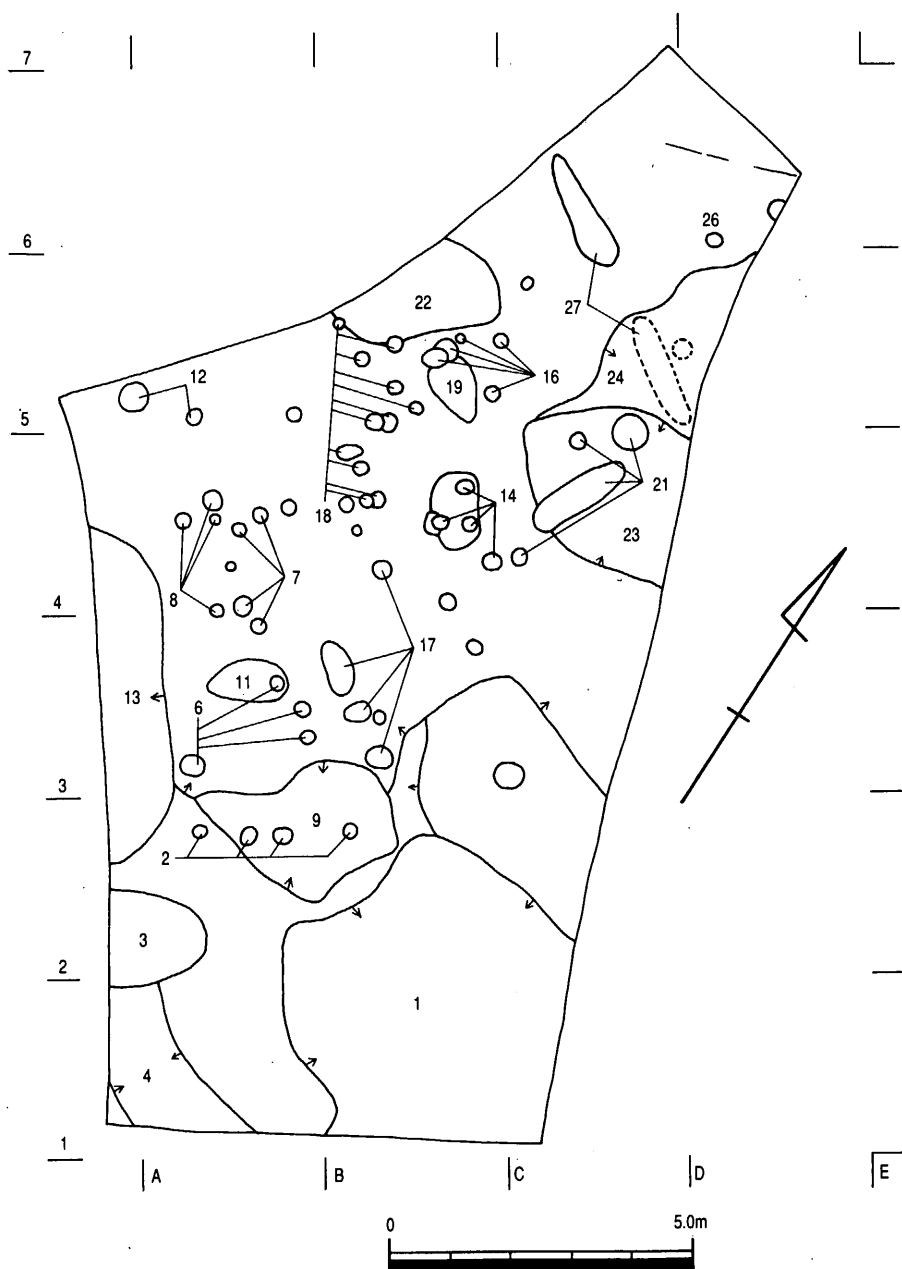


図64.C区遺構略測図 (S=1/125)

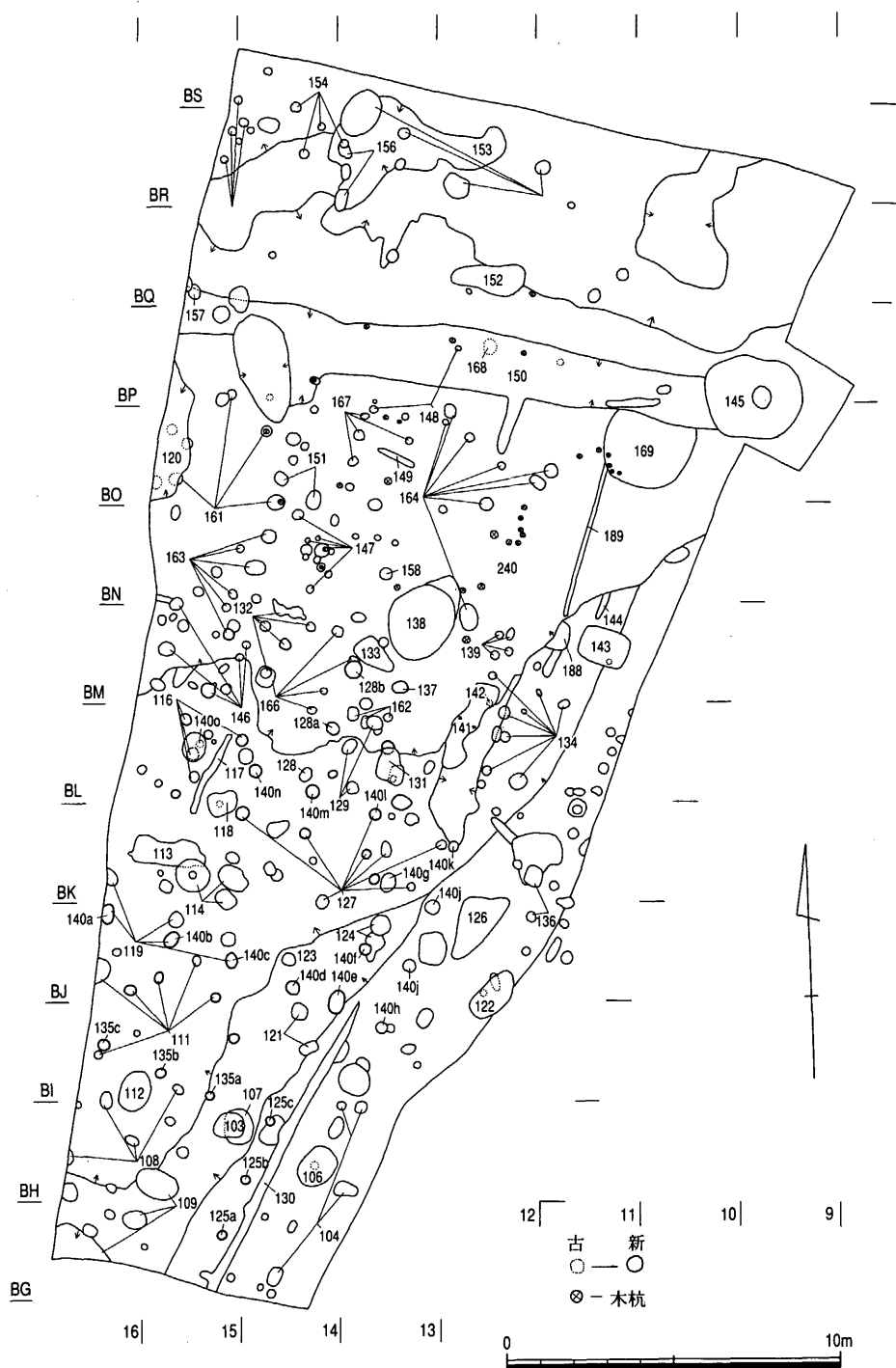


図65.A区II面遺構略測図 (S=1/220)

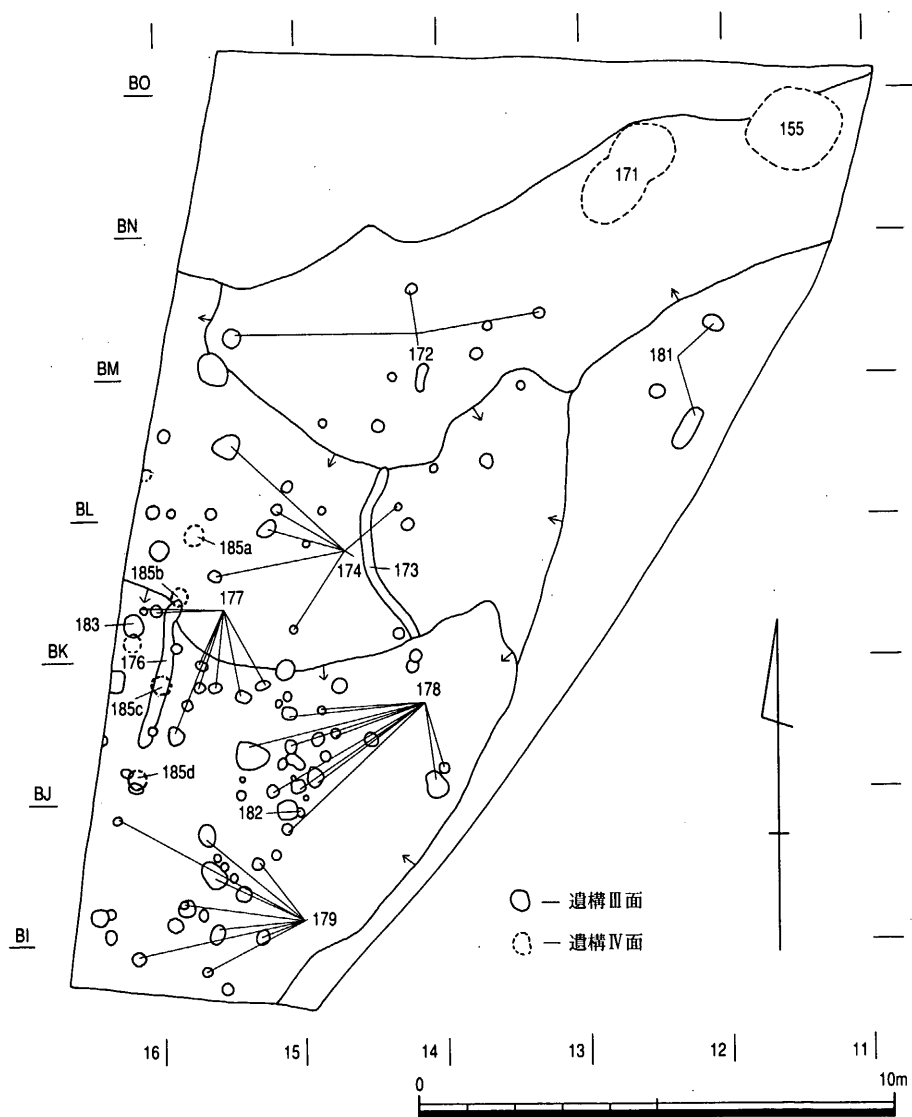


図66.A区Ⅲ面・Ⅳ面遺構略測図 (S=1/160)

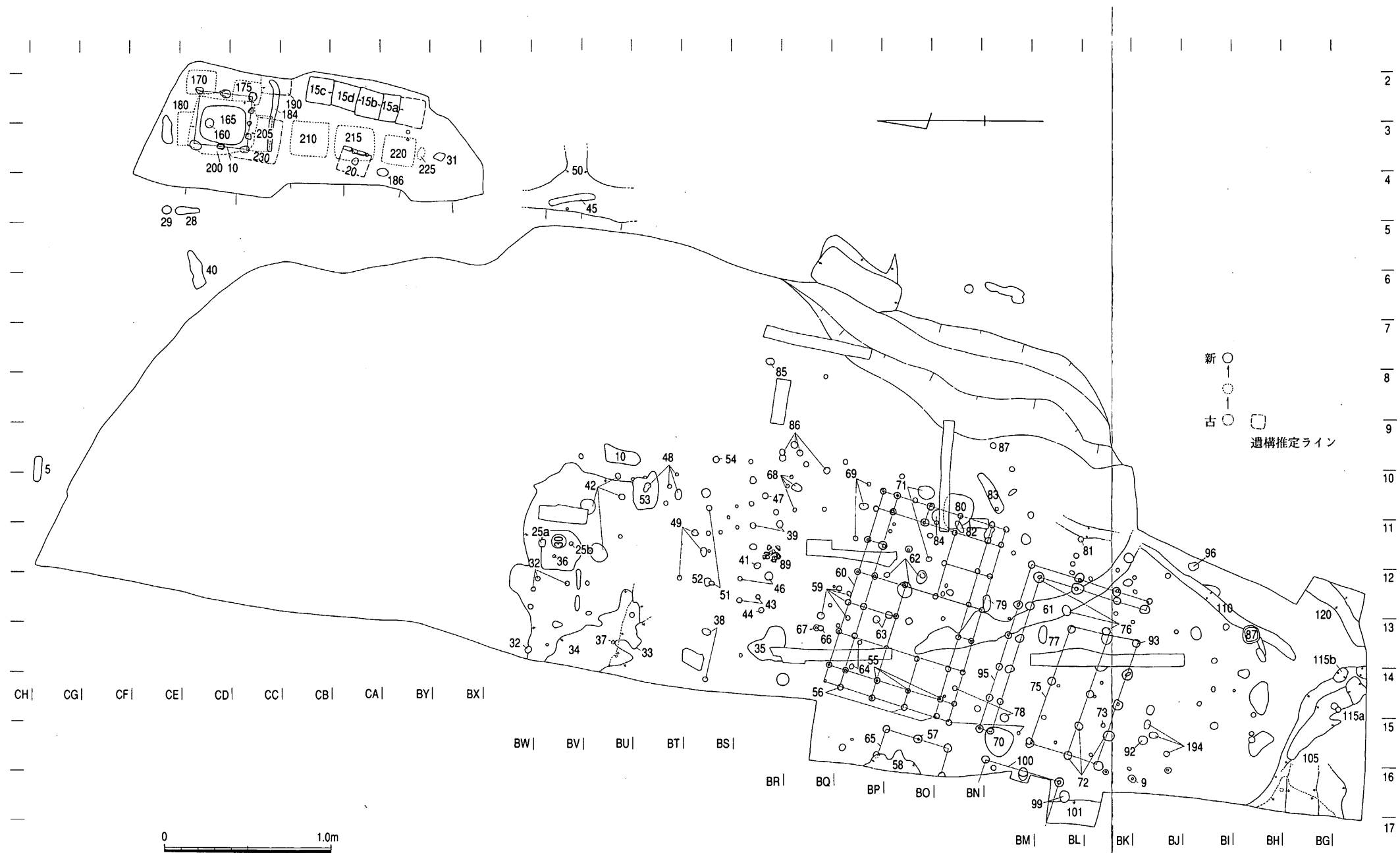


図67.A区I面・B区遺構略測図 (S=1/300)

表2.横岳遺跡第1次調査遺構一覧

S-番号	遺構番号	種 別	調査区	遺構面	地区
1		凹み 黄色土ブロック混入粗砂(亜角礫混入)	C区		B1
2		ピット群 茶黒色土	C区		A2
3		ピット 茶色土	C区		A2
4		溝 黒灰色土	C区		A1
5	ISX005	石垣遺構	A区		CH10
6		ピット群 茶色土	C区		A3
7		ピット群 茶色土	C区		A4
8		ピット群 茶色土	C区		A4
9		凹み 黄茶色土 9→2	C区		A2
10	ISB010	礎石建物 200→10	B区	I面	CC2
11		凹み 黄茶色土 11→6	C区		A3
12		ピット群 茶黒色土	C区		A5
13		凹み 灰色砂	C区		A3
14		ピット群 茶色土	C区		B4
15	IST015a~d	石組墓 b・c→a・d	B区	I面	CA2
16		ピット群 茶色土	C区		B5
17		ピット群 茶色土	C区		B3
18		ピット群 茶色土	C区		B5
19		凹み 茶色土	C区		B5
20	IST020	石列(墓)	B区	I面	CA3
21		ピット群 茶色土	C区		C4
22		凹み 茶色土(礫含む)	C区		B5
23		凹み 白色砂土	C区		C4
24		凹み 黒茶色土	C区		C5
25		ピット群	A区	I面	BV11
26		ピット 茶色土	C区		D6
27		凹み 溝の可能性あり	C区		C5
28		石敷遺構 包含層取り残し	A区		CE4
29		土坑	A区		CE4
30		凹み S-30灰砂はピット	A区	I面	BV11
31		ピット 焼土混入	B区	I面	BX3
32		ピット群 黒茶色土	A区	I面	BV12
33		整地層 白灰砂質土(地山崩壊土)	A区	I面	BU13
34		整地層 黒茶色土	A区	I面	BU13
35	ISK035	土坑 焼土	A区	I面	BR13
36		ピット 茶黒色土 30→36	A区	I面	BV11
37		ピット 茶黒色土 37→34	A区	I面	BU13
38		ピット群 白色砂	A区	I面	BS13
39		ピット 灰茶色土	A区	I面	BR11
40		斜面凹み	A区		CR5
41		ピット 灰茶色土	A区	I面	BR11
42		ピット群 灰茶色土	A区	I面	BU10
43		ピット群 灰茶色土	A区	I面	BR12
44		ピット 灰茶色土	A区	I面	BR12
45	ISX045	石列	A区		BU4・5
46		ピット 黄色ブロック混入土	A区	I面	BR12
47		ピット 灰茶色土	A区	I面	BR10
48		ピット群 灰茶色土 53→48	A区	I面	BT10
49		ピット群 灰茶色土	A区	I面	BS11
50	ISX050	斜面段状遺構	A区		BU45
51		ピット群 灰茶色土 52→51	A区	I面	BS11
52		ピット 黄色ブロック混入灰茶色土 52→51	A区	I面	BS12
53	ISX053	凹み 茶灰土(砂混じり) 53→48	A区	I面	BT10
54		ピット 灰茶色土(柱残存)	A区	I面	BS9
55	ISB060	掘立柱建物 堀方・灰茶色土 60g・m・r	A区	I面	BO14
56	ISB060	掘立柱建物 堀方・灰茶色土 柱痕・橙褐色土 60at・au・av・aw	A区	I面	BO14
57	ISB065	ピット 堀方・灰茶色土 柱痕・橙褐色土	A区	I面	BO15
58		凹み 暗灰褐色土 65→58	A区	I面	BO15
59	ISB060	ピット群 灰茶色土 60aaを含む	A区	I面	BP12

『横岳遺跡 -遺構編-』

S-番号	遺構番号	種 別	調査区	遺構面	地区
60	1SB060	掘立柱建物 堀方-灰茶色土 柱痕-橙褐色土 61・79・80→60	A区	I面	BP12 他
61	1SD061	溝状遺構 暗灰褐色土 61→60・95	A区	I面	BO13他
62		凹み群 灰茶色土	A区	I面	BO12
63		ピット群 暗灰色土	A区	I面	BO13
64		ピット群 堀方-灰茶色土 柱痕-橙褐色土	A区	I面	BP13
65	1SB065	掘立柱建物 堀方-灰茶色土 柱痕-橙褐色土 65→58	A区	I面	BO15他
66		ピット 暗灰色土 67→66	A区	I面	BQ13
67		ピット 堀方-灰茶色土 柱痕-橙褐色土	A区	I面	BQ13
68		ピット群 暗灰色土	A区	I面	BQ10
69		ピット群 暗灰色土	A区	I面	BP10
70	1SE070	井戸	A区	I面	BM15
71		ピット群 暗灰色土	A区	I面	BO11
72	1SB075	掘立柱建物 暗茶灰色土 75a・b・g	A区	I面	BL15
73		ピット群 暗茶灰色土	A区	I面	BK15
74		ピット群 暗茶灰色土 60asを含む	A区	I面	BN14
75	1SB075	掘立柱建物 堀方-灰茶色土 柱痕-橙褐色土 調査後に75eに切り合うピットが建物になると判明	A区	I面	BK14
76	1SB075 1SA095	ピット群 暗茶灰色土 75e、95k・lを含む	A区	I面	BL12
77		凹み 暗灰黒色土	A区	I面	BL13
78		ピット群 灰茶色土	A区	I面	BN14
79		土坑 暗灰褐色土 79→60an	A区	I面	BM12
80	1SK080	土坑 黒灰色土 80→60aj	A区	I面	BN10
81		ピット 暗灰色土 110→81	A区	I面	BL11
82		ピット 暗灰色土 80→82	A区	I面	BN11
83		凹み 暗褐色土 (砂混じり)	A区	I面	BM10
84		凹み 淡灰色土	A区	I面	BN10
85	1SX085	地鎮遺構 暗褐色土 (炭化物を多く含む)	A区		BR7
86		ピット群 灰茶色土	A区	I面	BQ9
87		ピット 暗褐色土	A区	I面	BM9
88		凹み 斜面落ち込み	A区	I面	BO6
89	1SX089	集石遺構	A区	I面	BR11
90	1SX090	石組遺構	A区		BU9
91		ピット 堀方-灰茶色土 柱痕-橙褐色土 根石あり	A区	I面	BK16
92		ピット	A区	I面	BJ15
93	1SB075	ピット 堀方-灰茶色土 柱痕-橙褐色土 75jに同じ	A区	I面	BJ13
94		ピット群 暗茶灰色土	A区	I面	BJ15
95	1SA095	堀方-灰茶色土 柱痕-橙褐色土 61→95	A区	I面	BM14
96		ピット 淡茶白色土	A区	I面	BI11
97		土坑 淡茶白色土 110→97	A区	I面	BH13
98		凹み 淡黄茶色土	A区	I面	BH13
99		ピット 灰砂色土	A区	I面	BF16
100	1SB100	掘立柱建物 堀方-灰茶色土 柱痕-橙褐色土	A区	I面	X6他
101		落ち 茶褐色土	A区	I面	BL16
102		落ち 茶灰色砂質土	A区	I面	BF11
103		凹み 明茶色砂質土+黄褐色土の混土 107→103	A区	II面	BH15
104		ピット群 灰白色砂質土	A区	II面	BG14
105		溝状遺構	A区	I面	BG16
106		土坑 灰白色砂質土	A区	II面	BH14
107		土坑 107→103	A区	II面	BH14
108		ピット群 灰茶色土	A区	II面	BH15
109		凹み群 灰茶色土	A区	II面	BH15
110	1SD110	溝状遺構 淡灰色土 110→81・97	A区	I面	BI12
111	1SA140	ピット群 灰白色砂質土 調査後に1SA140の柱穴を含むと判明 1SA140 l・m	A区	II面	BI15
112		凹み 灰茶色土	A区	II面	BI16
113		凹み 灰茶色土	A区	II面	BK15
114		凹み群 暗茶色土	A区	II面	BK15
115		集石遺構群 S-105最終埋没土	A区	I面	BF14

S-番号	遺構番号	種 別	調査区	遺構面	地区
116	1SB235 1SA140	ビット群 灰茶色土 調査後に1SB235・1SA140の柱穴を含むと判明 1SB235g 1SA140j・k	A区	II面	BL15
117		溝状遺構 暗褐色土	A区	II面	BL15
118		凹み 暗褐色土	A区	II面	BL15
119	1SA140	ビット群 灰茶色土 調査途中で建物になると認識 1SA140a・b・c	A区	II面	BJ16
120	1SX120	集石遺構 240→120	A区	II面	BO15
121		凹み 灰白色砂質土	A区	II面	BI14
122		集石遺構 自然堆積	A区	II面	BJ12
123		ビット	A区	II面	BJ14
124		ビット群 灰茶色砂質土 124→140f	A区	II面	BJ13
125	1SB125	掘立柱建物 調査後にS135と伴に建物になると判明 1SB125d・e・f	A区	II面	BH15
126		凹み 巨大花崗岩礫を含む	A区	II面	BJ12
127	1SB235	ビット群 調査後に1SB235の柱穴を含むと判明 1SB235j・k・l・m	A区	II面	BK14
128	1SB235	ビット群 調査後に128a・bが1SB235の柱穴になると判明 240→128	A区	II面	BL14
129		ビット群	A区	II面	BL13
130	1SD130	溝状遺構 灰白色砂質土	A区	II面	BG14
131		ビット	A区	II面	BL13
132	1SB235	ビット群 調査後に1SB235の柱穴を含むと判明 根石あり 1SB235b	A区	II面	BM14
133		凹み	A区	II面	BM13
134		ビット群	A区	II面	BM12
135	1SB125	掘立柱建物 調査後にS125と伴に建物になると判明 1SB125a・b・c	A区	II面	BI15
136		ビット群	A区	II面	BJ11
137		ビット	A区	II面	BM13
138	1SE138	井戸 花崗岩風化土 240→138	A区	II面	BM13
139		ビット群	A区	II面	BM12
140	1SA140	掘 調査後に140g・h・i・j・k・lは建物の柱穴でないと判明 140l・m・nは1SB235の柱穴と判明	A区	II面	BM12
141		凹み 141→142	A区	II面	BL12
142		ビット 茶灰粘質土 141→142	A区	II面	BM12
143		土坑 暗褐色粘質土	A区	II面	BM11
144		溝状遺構 褐色粘質土 144→240	A区	II面	BM11
145	1SE145	井戸 150→145	A区	II面	BP9
146	1SB235	ビット群 茶灰色粘質土 調査後に1SB235に柱穴を含むと判明 1SB235h	A区	II面	BM15
147		ビット群 茶灰色粘質土 根石あり 240→147	A区	II面	BN14
148		ビット群 灰黒色粘質土 150→148	A区	II面	BP13
149		溝状遺構 青灰色砂質土 240→149	A区	II面	BO13
150	1SD150	溝状遺構 240→150→145	A区	II面	BP11
151		ビット群 灰黒色土 240→151	A区	II面	BO14
152		凹み 茶灰色土	A区	II面	BQ12
153		凹み群 茶灰色土	A区	II面	BR12
154		ビット群 茶灰色土 156→154	A区	II面	BS14
155	1SE155	井戸 155→240	A区	IV面	BN11
156		ビット群 茶灰色土 156→154	A区	II面	BR13
157		ビット 茶灰色土	A区	II面	BQ15
158		ビット 青灰色粘質土 240→158	A区	II面	BN13
159	1SD150	溝状遺構 青灰白色粘質土 1SD150の掘り返し 240→159	A区	II面	BP12
160	1SX160	大甕埋納遺構 1SB010主体部 200→160	B区	II面	CD3
161		ビット群 黒色土 161→120	A区	II面	BO15
162		ビット群 灰色土 162→129	A区	II面	BM13
163	1SB235	ビット群 黒色土 調査後に1SB235の柱穴を含むと判明 240→163 1SB235a	A区	II面	BN15
164		ビット群 黒色土 240→164	A区	II面	BO12
165	1SX165	石組遺構 1SB010下床構造物 200→165	B区	I面	CD3
166		ビット群 黒色土 166→128	A区	II面	BM14
167		ビット群 黒色土 240→167	A区	II面	BO13
168		ビット 黒色土 240→168→150	A区	II面	BP12
169		凹み 灰青色土 171→169	A区	II面	BO11
170	1ST017	石組墓 170→10	B区	II面	CD2
171	1SK171	土坑 茶褐色土 171→240	A区	IV面	BN12
172		ビット群 茶褐色土	A区	III面	BM14

『横岳遺跡 -遺構編-』

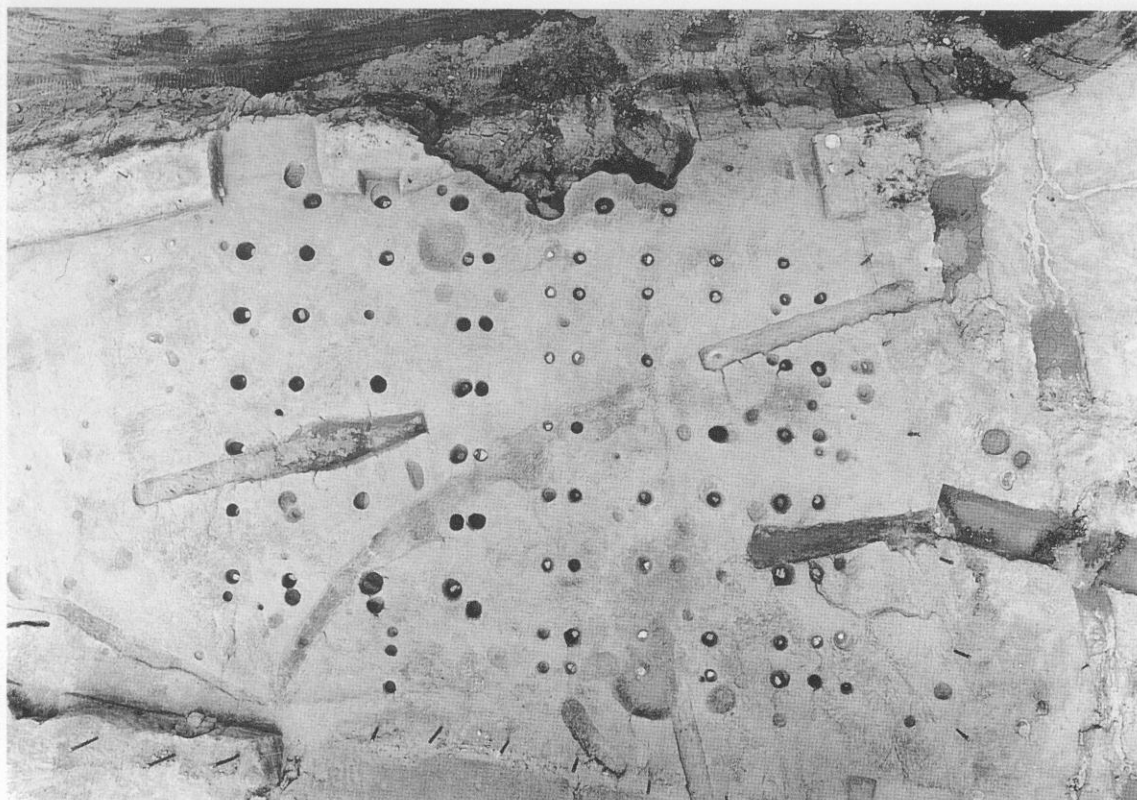
S-番号	遺構番号	種 別	調査区	遺構面	地区
173		溝状遺構 茶褐色土	A区	III面	BK14
174		ピット群 茶褐色土	A区	III面	BL15
175	1ST175	石組墓 200→175→10	B区	III面	CC2
176		溝状遺構 茶褐色土	A区	III面	BJ16
177		ピット群 茶褐色土	A区	III面	BK15
178		ピット群 茶褐色土	A区	III面	BJ14
179		ピット群 茶褐色土	A区	III面	BI16
180	1ST180	石組墓 200→180→10	B区	III面	CE3
181		ピット群 茶褐色土	A区	III面	BM12
182		ピット 茶褐色土	A区	III面	BI14
183		ピット 茶褐色土	A区	III面	BK16
184	1SD184	溝 灰茶色土 190→184	B区	I面	CC2
185	1SA185	溝 淡茶褐色粘質土	A区	IV面	BK15
186	1SX186	集石遺構 墓の主体部の可能性あり	B区	I面	BY4
187		集石列	B区	III面	CA4
188	1SK188	土坑 188→240	A区	II面	BM11
189		風倒竹（横竹） 暗灰色土 189→169	A区	II面	BN12
190	1ST190	石組墓 175→190→184	B区	II面	CC2
200	1ST200	五輪塔埋納遺構 175・180・205→200	B区	II面	CD2他
205	1ST205	石組墓	B区	III面	CC3
210	1ST210	石組墓	B区	III面	CB3
215	1ST215	石組墓	B区	III面	CA3
220	1ST220	石組墓	B区	III面	BY3
225	1SX225	土坑	B区	III面	BY3
230	1ST230	石組墓 230→205	B区	IV面	CC3
235	1SB235	掘立柱建物	A区	II面	BL15他
240	1SD240	旧河川	A区	III面	BN12他

写真図版

各遺構の詳細写真は、遺物を含めた『写真図版編』に掲載している。
ここでは主要な遺構の概要のみを掲載した。



A区およびB区I面遺構完掘状況（空中写真）



A区I面掘立柱建物群他（空中写真）



A区およびB区I面遺構完掘状況（南西から）



A区I面掘立柱建物群他（北から）



B区I面遺構検出状況（西から）



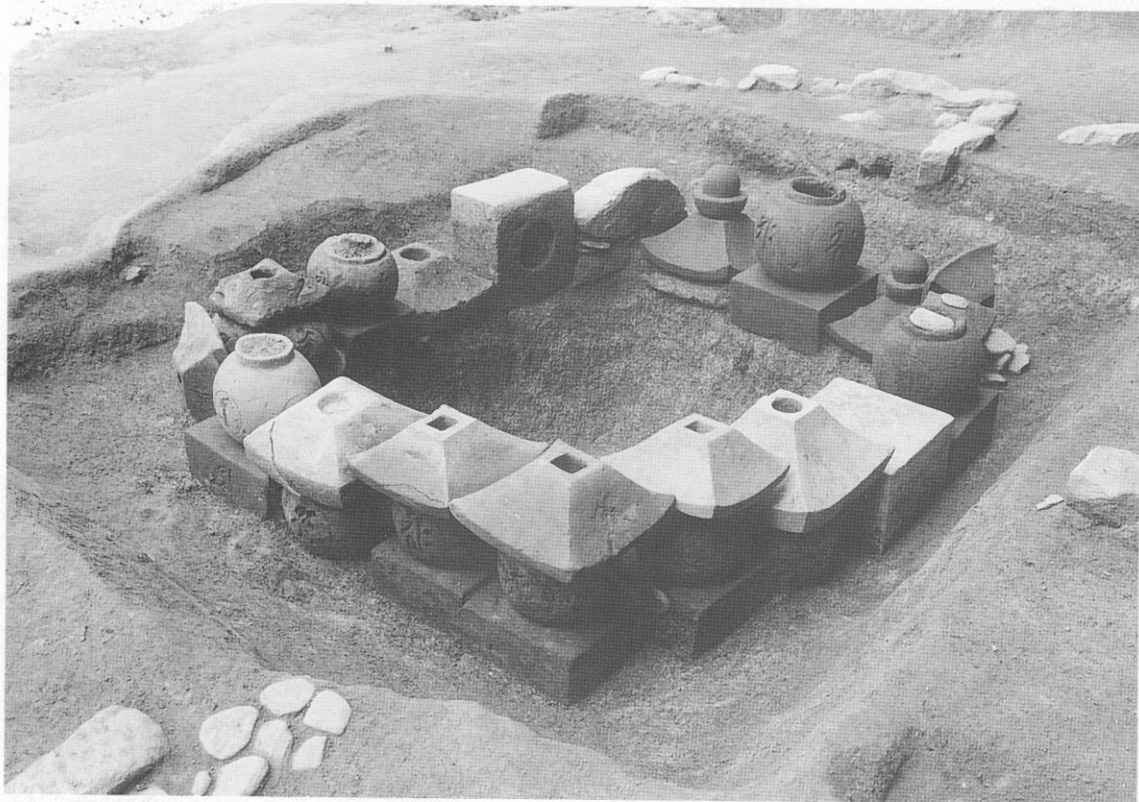
1ST015検出状況（北西から）



1ST200他検出状況（南から）



1ST200裏込め礫除去後、空風輪検出状況（南から）



1ST200裏込め礫除去状況（南東から）

太宰府市の文化財 第45集

横岳遺跡

-横嶽崇福寺跡の調査-

(遺構編)

平成11（1999）年3月

編集 太宰府市教育委員会

発行 〒818-0198

福岡県太宰府市観世音寺1丁目1-1

印刷 福岡印刷

〒810-0001 福岡市中央区天神3丁目4番3号

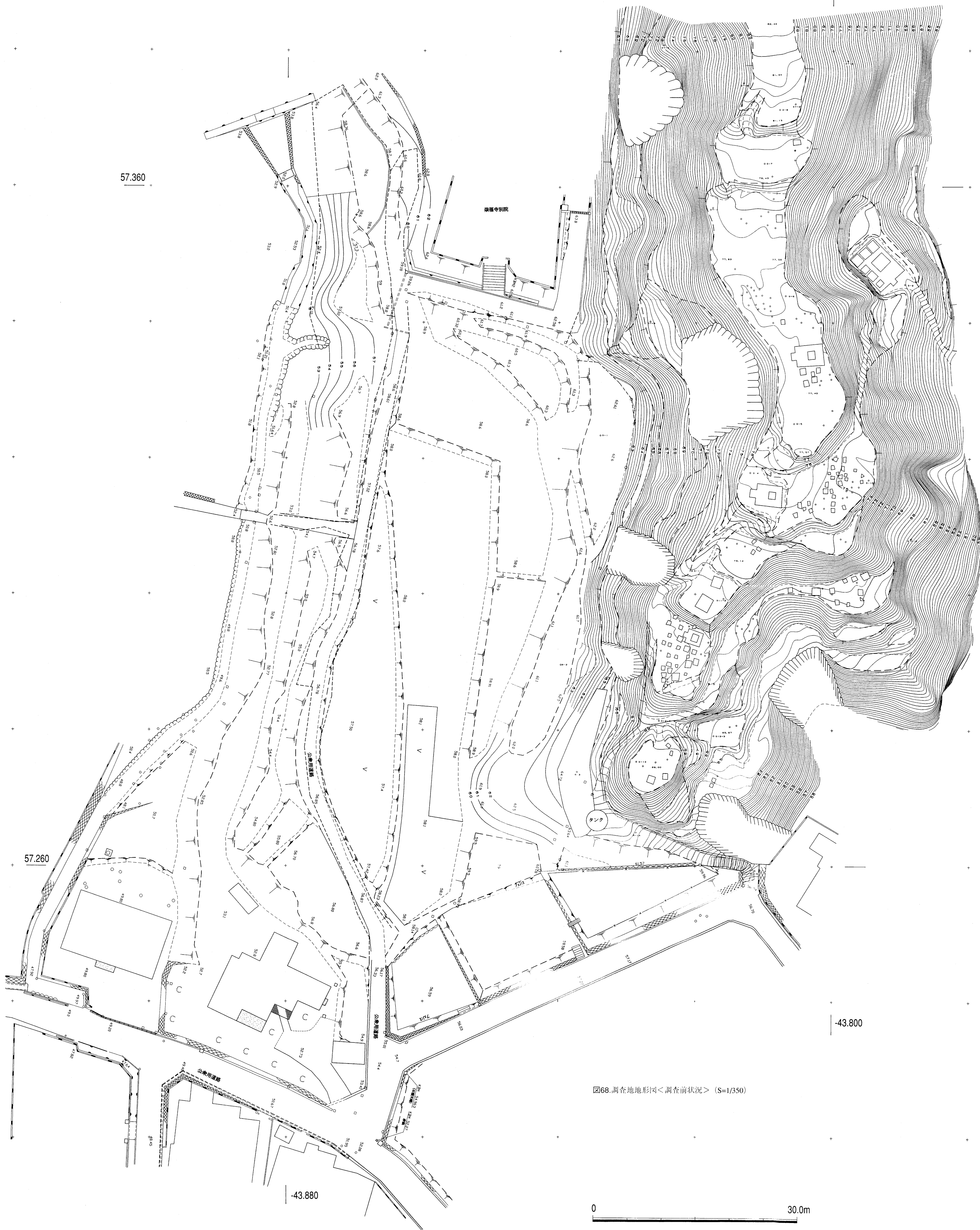
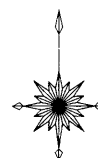


図68.調査地形図<調査前状況> (S=1/350)

